
生徒会の悪魔

ハーデス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の悪魔

【Nコード】

N5494R

【作者名】

ハーデス

【あらすじ】

ある日、生徒会に新メンバーがやってくる。しかし、そのついでに生徒会は無茶苦茶に…なったりならなかったり。

プロローグ（前書き）

この小説はキャラの崩壊や原作崩壊、キャラアンチがたくさん出てくる作品になると思います。

なので、原作の生徒会の一存が大好きで汚されたくないと思う人や、アンチが嫌いな人は読まないことをお勧めします。

はじめての投稿ですので読みづらいところがあると思いますが、よろしく願います。

プロローグ

「お前には今日から生徒会に入ってもらおう。」

「はっ？」

ある朝、親戚であり学校の教師でもある真儀瑠紗鳥にそう言われた。
「いや、俺バイトがあるから無理。それにめんどい。」

そう、俺は昔からたくさんバイトをしているためにそんなことをやっている余裕はない。高校へは就職のときに困らないようにするためだけに来ている。最近は就職厳しいからな。

「安心しろ。うちの生徒会はほとんど仕事をしていないから、ほとんど自由だ。それに生徒会に入れば内申点も上がるぞ。」

紗鳥はそう言っただけでニヤリと笑った。

おそらく他のたくらみもあるのだろうが、内申点上がるのはうれしい。それにうちの生徒会は確かにろくに仕事をしていないという話だ。ならばこの話もあり悪いものじゃないだろう。

「…いいだろう。だが、俺は今の生徒会みたいに仲良しごっこなどしないぞ。」

聞いた話と自分で見たことを合わせれば今年の生徒会は割と仲がいいらしい。だが俺はそんなあれいなどしたくない。自分の付き合い相手など最低限でいいのだ。

「ああ、かまわんさ。お前の好きなようにやるといい。だが、暴力沙汰は起こすなよ。」

「相手次第さ…」

「じゃあ、今日の放課後生徒会に連れていくから勝手に帰るなよ。」
そう言うと紗鳥はどこかへ行ってしまった。おそらく屋上にでもサボリに行ったんだろう。あまりまじめなやつじゃないからな。

「生徒会か…。俺の気に入るやつが果たしているかな。」

そうして、俺の生徒会入りが決まった。

プロローグ（後書き）

もし、「ここはこうした方がいい」などのアドバイスや、「全然面白くない」などの批判意見がありましたら感想の方をお願いします。

キャラ設定（前書き）

主人公設定を紹介します

キャラ設定

名前

黒井 凶夜

性別

男

性格

リアリスト

自己中心的

あまり他人を信じない

好感のもてる人にはやさしい態度だが、そうでない人には冷たい

外見

顔は普通より少し上

だが、目つきが悪くすぐに不良と間違われる

髪は知弦と同じくらい長い黒髪（髪を切るのが面倒なため）

詳細

クラスは2年B組（鍵や深夏と同じ）

生徒会の一員であり役職は会計補佐

真儀瑠とは親戚

ゲームが好きだがゲームに使う金が少ないため、無料オンラインゲームや人から借りたゲームをよくしている

生徒会に入ってからには真冬がよくゲームを貸してくれるので感謝している

昔から目つきの悪さでケンカを売られていたため、ケンカはものすごく強い

まだ小さい頃に、父親が浮気をしていたことにより両親が離婚し、その後は、母親の方についていく

母親が働いているがそれでは生活費が足りないので、自分もバイトをして生活費を稼いでいる

小さい頃から色々なバイトをしていたため、あらゆる分野でハイスペック

父親の浮気のせいで自分と母親が苦労している為、父親を嫌っている

また、父親のことがあり、鍵みたいな人（複数の人と付き合う、付き合おうとする人）を嫌う

好きなこと・もの

ゲーム

寝ること

嫌いなこと・もの

子供みたいなやつ

無責任なやつ

めんどくさいこと

父親

キャラ設定（後書き）

この主人公は生徒会のメンバー全員と仲良くするわけではありません。
ん。

特に父親を連想させる鍵をひどく嫌っています。
そのところご了承ください

顔合わせ（前書き）

タイトル通り生徒会メンバーと顔を合わせます。

顔合わせ

- - 教室 - -

「深夏、生徒会室行こうぜ！」

「真冬を迎えに行つてから行くから先に入つてろ。」

「おう、早く来いよ。」

教室で二人がそう話していた。そういえばあいつらも生徒会だった気がする。生徒会にまったく興味がなかったから忘れてた。まあ、どうでもいいが。さて、紗鳥が迎えに来るまで寝てるか。

… 30分後

「凶夜、待たせたな。ん、寝てるのか？おい、起きろ！」

「んつ。ようやく来たか。ふわぁ。」

「悪い悪い。職員室のテレビで面白い番組がやってたもんでな。」

紗鳥は悪びれる様子もなくそう言う。こいつのこの性格ももう慣れてしまったから別にどうこう言う気もない。

「はぁ。まあいい。さっさと行くぞ。」

「では行くとするか。ついてこい。」

紗鳥はそう言い生徒会室だと思われる方へ歩いて行つた。俺はまったく興味がなかったため生徒会室場所すらわからないかった。

- - 廊下 - -

「最近の調子はどうだ？」

紗鳥がふとそう言った。こいつはうちの家庭の事情を知っている為よく気にかけてくれる。あまり口に出したりしないが紗鳥にはすごく感謝している。こいつがいてくれたから俺はここに通うことができるのだ。正直家にある金だけじゃここに通うのは厳しい。こいつが俺を推薦してくれたおかげで授業料免除で通うことができている。もちろん推薦されるだけの学力はあるぞ。だが、俺は学校への出席率が悪かったから普通の推薦だと厳しかった。紗鳥は良くも悪くも

力を持っているから校長も逆らいづらかったんだろう。まあそう言うわけで俺は紗鳥には大きな恩がある。

「んゝぼちぼちな。最近なかなか時給のいいバイト見つけたし。」
「そうか、それはよかった。何か困ったことがあれば遠慮せず言うのだぞ。」

「サンキュ。」

ほんと、こいつにはいつか恩を返さなくちゃな。

「ついた。ここが生徒会室だ。」

ここが生徒会室らしい。中からは人が殴られたり誰かが泣いたり叫んだりする声が聞こえてくる。

「おい、この中は一体どうなってるんだ。っていうか普通生徒会室からこんな声聞こえてこないだろ。」

「ここは普通の生徒会じゃないからな。よし、私が先に行って来るから呼んだら入ってこい。」

「分かった。最後にもう一回言っておくが俺は仲良しごっこなどしないぞ。」

そう、いくら恩のある紗鳥の言うことでも俺は気に入らないやつとは仲良くすることなどしたくない。自分の付き合う相手は自分の気に入ったやつだけで十分だ。

「ああ、わかってる。お前の好きなようにやるといい。」

そう言っただけで十分だ。紗鳥は生徒会室へ入って行った。

- - 生徒会室 - -

鍵 side

「会長、今日は会議するんですか？」

「えゝめんどくさいよゝ。だから今日は休み。」

「いつものことだが、それでいいのか会長さん。」

「私がいいと言ってるからいいのよ。会長である私が正義よ。」

「そのうちどこかの独裁者になりそうですね。」

「大丈夫よ。」

「知弦さん。そうですね。そうならないように親友である知弦さんが止めますよね。」

「私が、裏でアカちゃんに被害が出ないようにそしてアカちゃんの言うことをみんなが聞くように細工するから。」

「あんたはただけすごいですか。」

「でも紅葉先輩なら出来てしまいそうです。」

俺のハーレムのメンバーである生徒会のメンバーは生徒会室でいつもどおり雑談をして過ごしていた。すると、

ガラッ

「みんな伏せろっ！」

『っ！』

突然の声にみんなが机の下に避難した。

「んゝそろそろ引つかからないと思っただがまだいけるようだな。」

「

そう言いながら生徒会顧問である真儀瑠紗鳥が入ってきた。

「あなたが言うところと冗談に聞こえないんですよ。」

「真冬、いつまでたってもなれそうにありません。」

「大丈夫だ真冬。さすがのお姉ちゃんもこれは厳しい。」

「私としたことが不覚だったわ。」

「もゝもつと普通に入ってきてよ。びっくりするじゃない。」

「悪い悪い。」

相変わらずこの人は何をするのかが分らない人だ。だが、美人なので許す。

「で、今日はどうしたんですか。」

「そうそう、今日は生徒会に新しいメンバーを紹介しようと思ってな。」

『っ！』

先生がそう言った瞬間生徒会の時間が一瞬止まった。

「ちよつと待ってください。生徒会のメンバーはこれで全員じゃないんですか。」

「そうよね。人気投票で選ばれた私たちと優良枠のキー君。この5人で全員のはずよ。」

「ああ、今まではそうだった。だが今日からはもう1人増える。」

「新メンバーは美少女ですね。それならば許す。」

「ちよつと杉崎。会長である私を差し置いて何を言ってるのよ。」

「俺のハーレムのメンバーが増えるのならそんなこと微々たるものですよ。」

「私の会長の権限がそんなことって…」

そう言って会長が落ち込んだ。もちろん冗談だが落ち込んでる会長もかわいいのでこのままにしておこう。隣で、

「落ち込んでるアカちゃんかわいいわ〜」

と言ってる人もいるし。

「いや、新メンバーは男だ。」

「なら断る。俺のハーレムメンバーに男はいらない。」

「お願い。鍵君。」

そう言って真儀瑠先生が上目遣いで俺を見た。

「うむ。許す。」

かわいいは正義だ。

「何言ってるのよ。だいたい杉崎にそんなこと決める権利ないよ!」
「どうやら会長も復活したようだ。しかし、

「どうします知弦さん。」

「どうもこうもこの人が言い出したら私たちじゃどうしようもないわ。おそらく他の先生方にはもう認めさせているでしょう。」

「分かっているじゃないか紅葉。」

そう言くと先生はニヤリと笑った。

「ならどうしようもないですね。」

「真冬、男の人が苦手だから心配です。」

「まっあたしはどっちでもいいから問題はないぜ。」

「会長である私の出番がほとんどない…」

そう言って会長は落ち込んでいた。

「メンバー全員の了承をもらったところで紹介しよう。入ってこい。」

先生がそう言うのと扉が開いてそいつが入ってきた。

鍵side end

「入ってこい。」

紗鳥のそう言う声が聞こえたため俺は生徒会室に入った。

「こいつが新たなメンバーだ。」

「あれ？こいつうちのクラスのやつじゃねえか。」

「椎名姉の言う通りだ。こいつは2年B組の黒井凶夜だ。」

「黒井凶夜だ。」

俺がそう言うと、

「私が会長の桜野くりむよ。」

「私は紅葉知弦よ。」

「知ってるかも知れないがあたしは椎名深夏だ。」

「まっ真冬は椎名真冬です。」

「最後は俺だな。俺も知ってるかもしれないが杉崎鍵だ。」

と、相手も自己紹介をした。正直どうでもいいがここは素直に返事を返しておこう。

「どうも。」

俺がそう言うと、

「じゃ後は任せたぞ。私は戻ってテレビでも見るかな。」

そう言うって紗鳥は職員室帰って行った。さて、俺はどうするか。とりあえず紗鳥が用意したであろう一つだけ空いている席に座った。

「じゃあとりあえず全員名前以外の簡単な紹介でもしましょうか。」

そう、杉崎だったか？が言う。

「そうね。じゃあまず会長である私から。」

会長がそう言おうとするが、

「いや、その前にここの活動記録か日誌みたいなものはないか。」

「それならここにあるわ。でもどうして？」

「俺は、自分の目で見たものしか信じない。自分の口から出る言葉なんかいくらでも誤魔化すことができるからだ。活動記録や日誌も役には立たないかもしれないが少しはましだろう。」

そう言っただ俺は貰った活動記録を見る。

「ふむ」

記録を見る限り一応一通りの仕事はしているようだ。だがこれはほとんど杉崎というやつがやったらしい。普段は会長の言う適当な議題について会議したり、雑談ばかりしているという話を新聞部から聞いた。あいつは俺に対しては本当のことしか言わないからおそらく事実だろう。この日誌と新聞部からの情報を集めるとこの生徒会の大体の姿が見えてきた。

「なるほどな。」

「どうした？」

「何、この生徒会についての俺の中での評価が出ただけだ。」

おそらくこの生徒会は話に聞いた通りほとんど仕事をしないやつらだろう。まあそれは今後自分の目で見て判断するか。唯一仕事をしている杉崎もこの生徒会を自分のハーレムだと言ってるらしい。ちつ虫唾が走る。

「俺はもう帰る。最後にひとつ言っておく。俺に必要以上に関わろうとするなうざいからな。じゃあな。」

そう言っただ俺は生徒会室から出て行った。

鍵side

凶夜がそう帰るとしばらく生徒会室は静かだった。

「俺に関わるなっただどういふことなんでしょう」

「真冬なんか怖いぞ。」

確かに凶夜の顔は怖かったから男が苦手な真冬ちゃんにはつらかっただろう。

「会長である私の発言を無視するなんてありえないわ!」

どうやら会長は自己紹介を遮られたことがいやだったらしい。

「知弦さん。どう思います？」

「そうね。態度からの想像でしかないけどおそらく彼はこの生徒会にいい感情を持ってないでしょうね。でないと、関わるなんて言わないわ。」

「そうですね。でも何であそこまで。」

俺たちは色々自由なことをやっているがそれでも周りから嫌われていることはなかった。だからなぜあそこまで嫌われてるのがわからない。

「あいつなかなか強そうだったぜ。くく戦ってみて。」

深夏はそう言っでずっと興奮していった。

「しばらくは今まで通りやって彼がどういう反応するのか見てみましょう。もしかしたら私たちの勘違いかも知れないしね。」

「そうですね。」

「あっお姉ちゃん時間が。」

「もうそんな時間か。」

「うう今日は何にもできなかったよ。」

会長がそう言う。もう日が暮れ始めていた。今日の生徒会もここまです。

「じゃあ今日の生徒会終了。」

そう言っでみんな今後どうなるか少し不安を抱えて帰って行った。さて、今日の仕事でもするか。

鍵side end

顔合わせ（後書き）

凶夜はリリシアとは知り合いです。

真儀瑠は凶夜に対して少し過保護なところが今後出てくるかもしれません。

凶夜は気に入った相手とそうでない相手とでは態度がすごく違いますので今後ご了承ください。

生徒会メンバーと会話がほとんどできませんでした。正直難しいです。アドバイスなどがありましたらよろしく願います。駄文なので批判意見も甘んじて受けます。ではまた次回。

バイト先で（前書き）

バイト先であの子と出会います。

駄文ですが楽しんでいただけると幸いです。

バイト先で

- - 教室 - -

放課後になった。昨日は顔合わせのためにバイトを休んだから今日は早めにいかなくては。カバンを持って帰ろうとすると、

「おい、生徒会室はそっちじゃないぞ。」

杉崎が声をかけてきた。

「黙れ、話しかけるな。それに俺は生徒会室には行く気はない。」
そう言い俺はさっさと帰った。

鍵side

凶夜が帰った後俺はひとりで生徒会室へ行った。あいつが来ないのは少し疑問だが今日も俺のハーレムメンバーと楽しく過ごしますか。

- - 生徒会室 - -

生徒会室はもうほとんどメンバーがそろっていた。

「あれ？凶夜は一緒じゃないのか？」

「声はかけたんだがさっさと帰って行っちゃったよ。それと話しかけるなって言われた。」

「そりゃ杉崎には誰も話しかけてほしくないでしょ。」

「ひどいですよ会長。俺は誰からも愛される好青年なんですからねっ知弦さん。」

「…えっ？ええそうね。」

こつちをちらりとも見ずに言われた。相変わらず厳しい人だ。

「そう言えば真冬ちゃんは？」

「ああ、あいつは今日買いたいゲームがあるとかで帰って行っちゃったよ。」

「へー。真冬ちゃんも俺の好感度が上げれずに残念だろうに。」

「誰もお前の好感度なんか上げたくねえよ。」

相変わらずここのメンバーはツンデレらしい。デレたときが楽しみ

だ。さて、真冬ちゃんがないのは残念だがいつも通りみんなと楽しく話しますか。

鍵side end

- -とあるゲームシヨップ - -

昨日は突然バイトを休んでしまったから、今日はしつかり働かなくては。ここは時給がなかなかいいからクビにはなりたくない。この店は目の前にゲーセンがあるから、よくそこにいる不良がうちの店に来る客から金を巻き上げようとするらしい。だから俺みたいなやつが1人は欲しかったと店長が言っていた。ここに来たときも1人いたので潰しといた。普段なら放っておくがそいつらを潰すのも仕事のうちだからな。(店長は追い払ってほしただけで少し違う)。ちなみに俺は、プライベートでは人とあまり関わらないようにしているが、仕事での接客や営業スマイルは完璧だ。これができないときつい仕事もたくさんあったからな。おっ客が来たな。店長がうちは元気が大事だと言っていたからな元気よく行きますか。

「いらっしゃいませ」

そう言った時、俺の時間が一瞬止まった。あれ？こいつ見覚えがあるのだが。

「くっ黒井先輩。」

そうそう、昨日生徒会室で見たんだった。椎名真冬だったわけ？バイト一目で知り合い？に見つかるなんてどんだけ早いんだよ。だが、知り合いがバイト先に来ることなんざたくさんある。接客業じやなおさらだ。俺は次の瞬間には気にせず仕事に戻った。にしてもこいつがゲームシヨップに来るとは少し驚きだ。もっと、本とか読んでるイメージがあったのだが。

真冬side

今日は新作ゲームの発売日です。今まで発売延期が何度あった作品だから楽しみです。早く買って家でやらなくては。そう思ってお

店に入ったら昨日生徒会に来た黒井先輩がいました。向こうも一瞬驚いていましたがすぐに仕事に戻って行きました。どうしましろう、黒井先輩はレジにいます。ゲームを買うには声をかけなくてはいいけません。でも、真冬はあの人少し怖いです。ただでさえ男の人が苦手なのに、黒井先輩は目が怖いです。とりあえず他のゲームでも見ながら気持ち落ち着けるとします。できるだけ早く帰ってゲームをしたいです。そしたら、

「おっこの子可愛くね〜。」

「ホントだ。ここに来るガキから金でももらおうと思ってきたのにラッキ〜。ねえ彼女、俺らと遊ばね〜。」

はわわわ、知らない男の人に声をかけられました。どうしましろう、いつもならお姉ちゃんに追い払ってもらってるのですが今日はひとりです。

「ええつとそのあの。」

「とりあえずこんなところじゃなんだからどこか別の所にいこうぜ。」

「そうだな。」

まっまずいです。このままだどこかに連れて行かれてしまいます。でも逃げ切れる自信ありません。誰か助けてください〜。

真冬side end

何やら入口で変な声が聞こえる。ナンパでもしてるのか？とりあえず入口やられると邪魔だからどっかに行ってもらうか。そう思って入口行くと絡まれているのはあいつだった。

「はっ離してください。真冬は行く気はありません。」

「おいおいそう言わずに行こうぜ。金は俺たちが出すからさ。」

「そうそう。とりあえずカラオケにでも行こうか、楽しいぜ。」

ん〜どうやら嫌がつてる椎名妹を無理やり連れて行こうとしているが、たまに見かけるがあれは誘拐の一種にはならないのだろうか。合意の上なら問題はないが嫌がつてるのを無理やり連れて行くんだ

からな。とりあえず追ひ払うか。

「すいませ〜ん。入口だとほかのお客様の迷惑になりますので場所を移動してもらってもいいですか。」

「あっなんだお前。こっちは取り込み中なんだ邪魔するな。」

うぜ〜こっちはすぐに殴りたいのを我慢して師も手に出てるのにこの態度。殴っちゃおうかな〜。でも、暴力沙汰は面倒だし、せめて正当防衛になるように相手から殴ってくるまで我慢だな。

「せつ先輩。たっ助けてください。」

「あっこいつが先輩？おいおい先輩、この子を助けに来たのか。痛い目見る前に帰った方がいいぜ。」

あれ？こいつら上から目線？マジうぜ〜。さっさと挑発して殴らしてから潰すか。

「いえいえ。そう言うわけではございません。ただ、あなた方みたいな醜い方達が入口におられますとほかのお客様が近づけなくなるので。」

「なっ醜いだと。」

「こいつ調子に乗りやがって。おらっ。」

バキッ。

「先輩！」

あっさり挑発に乗って殴りかかってきた。って言うか全然痛くね〜。店長から正当防衛ならいいといわれているし、さっさと片付けますか。

「口で言っても聞かれないのならこちらもやらせてもらいます。」

バキッ。

「ぐっ」

…1分後

不良2人は目の前でのびていた。いや〜弱かったな〜。まあストレス解消になったからよしとしよう。さて、ゴミ捨て場に捨てに行くか。

ゴミ捨て場から戻ろうとすると椎名妹が待っていた。

「あつあのありがとうございました。」

「いや助けたかったわけじゃないし。入口でいろいろやられても迷惑だったから。」

「それでも助かりました。何かお礼がしたいのですが。」

「いや別に……」

「お礼をさせてください。」

こいつとんだだけお礼がしたいんだよ。昨日や今日店に来たときはビビってたくせに。あれか？吊橋効果かなんかか？まあありえないな。しかしどうするか？別にお礼なんかいらないし。食いもんでもおごつてもらうか？いや待てよ、こいつが学校終わって生徒会室にも行かずにここに来たということはもしかしたらゲームが好きなのかもしれない。

「椎名妹はゲームが好きなのか？」

「？はい好きです。それはもうBLと同じくらい。真冬はゲームがないと生きていけないと言っても過言でもありません。」

どうやら予想以上に好きらしい。途中聞いてはいけない言葉があった様な気がするがスルーしよう。

「じゃあ明日何かゲームを貸してくれ。」

俺は、バイトをしているがそのお金は生活費などに消えるためあまりゲームを買えない。なので、ゲームをやるには人から借りるか、ネットで無料のゲームをやるしかない。

「先輩もゲームが好きなんですか！？」

なんか椎名妹のまとうオーラが変わった気がする。何か変なスイッチでも押したか？

「ああ大好きだ。だがゲームを買う金がなくなてな。」

「バイトをしてるのにですか？」

「バイトは生活費に使ってるんだ。」

「そう言うことなら分かりました。それでいいならお安い御用です。真冬の一押しの作品を持って行きます。」

「ああ頼んだ。後、もしかしたら寝てるかもしれないからその時は起こしてくれ。どんなゲームかすぐに見たいんでな。じゃあ俺はバイトに戻るから。」

「はい分かりました。あっ忘れてました。予約したゲームをもらいに来たんですが。」

「分かった。」

店に戻りゲームを渡すと椎名妹はもう一度お礼を言い帰って行った。それにしても予想外のところでゲームをゲットすることができた。あの様子だとたくさんのゲームを持ってそうだしこれからも世話になるかもな。俺は、明日新しいゲームができると思うと楽しみだっ

真冬side

今日は予想外の所で黒井先輩と出会ってしまいました。最初は怖かったのですが不良さんから助けてもらいました。本人は助けたかったわけじゃないと言ってましたがホントに助かりました。あの時の黒井先輩少しかっこよかったです。はっ違いますそうではありません。それにしても黒井先輩がゲームが好きというのには少し驚きました。ゲームがしたいのにできない苦しみは痛いほど分かります。真冬も前に1週間ゲーム禁止と言われた時は死ぬかと思いました。今日はホントに助かりましたし真冬のオススメのゲームをいくつか持っ

っていいこうと思います。生徒会にゲーム仲間ができるかも知れないと思うと明日が楽しみです。

真冬side end

バイト先で（後書き）

真冬に軽いフラグが立ったかもしれません。

凶夜は好きなことになるかと少し冷たい態度が柔らくなります。

今日は間に合えばもう一話更新しようと思います。

それではまた次回。

ゲームとテスト（前書き）

今回は生徒会のメンバーと少しやり合います。

ゲームとテスト

- - 教室 - -

よし放課後になった。今日は椎名妹がゲームを持ってきてくれるからさっさと生徒会室へ行つて待とう。久々の新しいゲーム、楽しみだ。おそらくまだいないだろうから少し寝るか。楽しみでなかなか寝れなかったから少し寝不足だ。まあ、午後の授業は寝てたがな。

鍵 s i d e

「あれ？」

「どうした鍵。」

「いや、もう凶夜がないなと思って。あいつまた帰ったのか？」

「なんか用事でもあるんじゃないかねえか？」

「そうかもな。じゃあ行こうぜ。」

「おう。」

- - 生徒会室 - -

ガラッ

「あっ」

生徒会室に入るともうそこには凶夜がいた。新しくできた席で寝ていた。

「なんだもういるじゃねえか。」

「入口で二人とも何してるの？」

後ろから会長と知弦さんが来た。

「いや、もう凶夜が来てたから少し驚いて。」

「へー今日はいるんだ。会長である私より早く来て待ってるなんて感心ね。」

「でもアカちゃん。寝ているようだから特に待ってたとうわけではなさそうよ。」

「うつ。そつそんなことより杉崎、早く入ってよ。」

「ああ、すいません。」

そうして俺らもそれぞれの席に着いた。

「じゃあ今日はまたみんなで勉強について教え合いをしましょう。」

会長が以前にも聞いたことがあるようなことを言い出した。そう言えはもう少してテストだった。前回と違うことはテストが直前じゃないことぐらいだろう。会長も前回のことで少しは学んでるらしい。「そついえばアカちゃん先生に言われてたものね。もう少してテストだけどちゃんとやってるかって。」

「そつそんなこと関係ないもん。私が考えてたんだもん。」

どうやら先生に言われて思い出したらしい。

「えゝあれまたやるのかよ。会長さん以外必要ねえだろ。」

「そつそんなことないよ。私は必要ないんだけど、結局前回はコツとかがみんな分らなかつたでしょう。だから今日は勉強の仕方についてきちんとかえ合うの。」

おそろくやつても前回と変わらないような気がするが、それをも聞かないだろう。

「だから杉崎、黒井を起こしなさい。彼も協力し合わないと。」

「はゝい、分りました。おい凶夜起きろ。」

鍵side end

「おい凶夜起きろ。」

ユサユサ

ん？どうやら誰かに起こされたらしい。それより誰だ人の名前をなれなれしく呼び捨てにする奴は。

「おっ起きたか。会長が勉強会をする…。」

バキッ

「ッ！」

『！！！』

「触るな、カスが。」

どうやら起こしたのはあのクズらしい。っち、勝手に触ってんじやねえよ、気持ちわるい。ついうっかり殴っちまったじゃなか。

「いつつ。いきなり何すんだ。」

「あ？お前こそ何やってんだよ。関わるなってこの前言ったばかりじゃねえか。それと気安く名前を呼んでんじやねえ。虫唾が走る。」あゝム力つく。どうやら椎名妹はまだ来てないらしい。もう少し寝るか。

鍵side

凶夜を起こしたらいきなり殴られた。殴られるとは思ってなかったから驚いた。

「いつつ。深夏のパンチほどじゃないけどきいた。」

「余計なお世話だ。」

「杉崎大丈夫？。」

「大丈夫ですよ会長。」

「それにしてもいきなり殴るとは思わなかったわね。」

それは誰もが思っただろう。まさか起こすだけで殴られるとは。

「とりあえずもう少し様子を見ましよう。あんまし問題ばかり起こすようなら真儀瑠先生に言えば何とかしてくれると思うわ。」

「知弦さんじゃ無理なんですか？」

「まだ情報が少なすぎてなんとも言えないわね。」

「そうですか。ではあんまし刺激を与えないようにして様子を見ましよう。」

生徒会ではしばらく様子を見ることにした。こっちから何もしなかったら向こうも何もしてこないだろう。してくるようなら、生徒会からの除外も考えて真儀瑠先生に相談すればいい。ここはみんなの大切な場所なんだ。それを壊させたりしない。

「遅れました。」

真冬ちゃんが来たようだ。

「おっ真冬遅かったな。」

「はい。今日は日直だったの。」

「そうだ、真冬ちゃんにも凶夜に刺激を与えないように決めたことを言わなくては。」

「真冬ちゃん…」

「あれ？黒井先輩寝てるんですか？起きてください。せんぱい。」

「えっちょっつ。」

いきなり凶夜を起こしていた。男が苦手な真冬ちゃんが自分から話しかけるなんて。確かこの前まで怖がってたような。ってそんなことを考えてる場合じゃない。真冬ちゃんを殴るようなことはないと思うが万が一のことがある。いつでもかばえるようにしとかなくては。深夏もいつでも動けるようにしていた。さすがの深夏も心配らしい。

「んっ？またか今度は誰だ？」

「先輩、真冬です。頼まれたもの持ってきました。」

「おお！待ってたぞ。」

「あれ？」

なんか俺のときと態度が違うような。みんなも啞然としている。真冬ちゃんがなんともなくてよかったが、またいろいろな謎が出来てしまった。

鍵side end

もう一回寝てたらまた誰かに起こされた。またあいつなら本気で殴ってやるうかと思っただが、そこにいたのは真冬だった。

「先輩、真冬です。頼まれたもの持ってきました。」

「おお！待ってたぞ。」

とうとうゲームが、俺のテンションはだいぶ上がっていた。他のやつらが何やらポカンとしているがどうでもいい。

「とりあえず真冬のお勧めのこの3つを持ってきました。」

「3つも悪いな。おっしかもこの3つはすごい好評だったやつじゃないか。」

「やっぱり先輩も知っていましたか。真冬の中でもこの3つはお勧めの作品です。」

そう、この3つの作品はそれぞれ今年のゲーム売り上げでもトップランクを誇るゲームだ。中古でも値段がほとんど落ちてなくて俺だとかなかなか手の出ないゲームだ。

「まさかこんなに早くこのゲーム達ができるとは思わなかったぜ。悪いな椎名妹。」

「いえ、助けてもらったお礼ですから。それに、ゲームができない苦しみは真冬分かります。なので、これからも真冬の持つてるゲームならいくらでも貸してあげます。」

「まじか！ホントすまねえ。」

やっべー椎名妹マジいい子だ。こいつなら他のゲーム話もできるだろうし、ゲームも貸してもらえる。生徒会に入ってよかったぜ。紗鳥にも感謝だな。

「どのゲームからするか悩むぜ。」

「真冬の中での一番のオススメはこれですよ。」

「なるほど。しかし、こつちもなかなかよさそうだ。」

俺たちがそうゲームについて話していると、

「その二人、今日は勉強会だって言っただでしょ。」

チビ会長がなんか言っていた。っていうか俺はそんな話は聞いてない。

「そういえば、会長さんそんなこと言ってましたね。」

「そんなことって、なんか最近私の扱い悪くない？」

なんか会長が落ち込んでいた。

「そんなことないですよ会長。」

「ええ、私の中ではいつでもアカちゃんが一番よ。」

みんなで慰めてるようだがどうでもいい。俺はさっそくゲームを始めた。

「ちよつと凶夜！勉強会だって言ってるでしょ。」

っち、こいつも人の名前を気安く呼びやがって。しかしこいつはこ

れでも上級生だ。そこは我慢しよう。しかし、勉強会？今やる必要なんか全然ないだろ。ああ、そういえばこの会長バカだったな。それでテストが近くなってきたからこんなこと言い出したのか。そんな面倒なことやってたまるか。

「勉強会？何でそんなことしないといけないんだ？」

「もう少しでテストだからみんなでコツを教え合っのよ。生徒会たるもの常に成績はトップじゃないといけないんだから。」

予想通りだ。

「会長はこんな勉強会をしないといけないほどバカなんですか？」

おそらくこういえば強がって来るだろう。

「そっそんなことないじゃない。私は別に必要ないんだけどみんなのためによ。」

かかった。

「ふん。会長以外の全員は勉強会が必要なほどバカなんだな。」

そう言って他のやつらを見ると、

「それは…」

みんな口ごもっていた。なるほど、バカなのは会長だけなのだろう。

「分かった。ちょっと聞いてみる。」

そう言って俺は携帯でリリシアに電話した。こいつの情報はなかなかバカにならない。

「リリシアか、ちょっと前回の生徒会のテストの順位を知りたい。」

ああ、ああ、分かった。じゃあな」

どうやら予想は当たっていたらしい。

「会長さんよくどうやら会長さん以外みんな上位にいるんだが。そしてアンタ فقطと下だ。どういことなのか説明できますか？」

「うっ前は調子が悪かったのよ。」

まだあんなこと言っやがる。

「紅葉先輩実際のところどうなんですか？」

「ふう。あなたの想像通りよアカちゃん。毎回成績は下の方だわ。」
「やっぱりな。」

「知弦。」

何やら会長が恨めしそうな顔で紅葉先輩を見ている。

「ごめんなさいアカちゃん。でもたぶん誤魔化しきれないとおもうわ。」

その通りだ。俺には新聞部からの情報と紗鳥からの情報が入ってくる。いざとなったら自分でも調べることができる。

「つまりアンタは自分のために生徒会を私物かして、勉強を教えろとそう言いたいわけだな。」

「うっ。」

「おい、凶夜そんな言い方ないだろ。」

バキッドゴツ

「気安く名前を呼ぶなといっただろ。クズ。一回で学べ。」

「つて。じゃあ黒井そんな言い方ないだろ。」

「じゃあ何といえればいいんだ。事実だろ。それともこのバカに付き合って勉強会をしろと？ハッ、あほらしい。」

「そこまでいつてるがお前の成績はどうなんだ。上位は表示されるがそこで黒井なんて見たことないぞ。」

そう椎名姉が言ってきた。どうやらこの生徒会のメンバーはどうしても会長をかばいたいらしい。

「俺か？俺は前回と前々回のテストは受けてないから最下位だ。」

「なっ。」

確か前回は紗鳥が急に旅行に行くとかで連れて行かれて、その前はインフルエンザにかかって受けられなかった。まあ両方とも後日テストを受けてそこで全教科満点を取ったから成績に問題はない。っていうか教師がテストの日に旅行に連れていくなよ。本人いわくテストの日は暇になるから旅行にちょうど良かったらしい。

「それなら会長の成績のことをとやかく言う必要なんかねえだろ。」

「このバカの成績なんかどうでもいい。会長だからって生徒会を私物化するなって言ってるんだよ。生徒会は生徒のための会であって、会長のための会ではないんだからな。いい点を取りたいなら日々勉

強でもしてな。」

「俺たちが了承してるんだからいいじゃないか。」

「あつそ。じゃあそれに俺を入れるな。俺は了承なんかしてないんだからな。」

ああ気分悪。せつかく気持ちよくゲームやろうと思ってたのに。帰って家でやるか。

「やるなら勝手にやってろ。俺はもう帰る。椎名妹、ゲームありがとな。じゃあな。」

俺はそう椎名妹にのみ軽く微笑み帰った。

鍵side

「くそ」。黒井のやつ。」

あいつのせいで生徒会室の空気が悪くなってしまった。

「うつつグスツ。」

会長は半泣きだった。あそこまでボロクソ言われたらさすがにきついだろ。

「それにしても会長さんがいろいろ言われてたのに知弦さんが何も言わないなんて珍しいな。」

そう言えばそうだ。知弦さんなら会長のためなら相手を完膚無きままに叩きのめすのに。

「だって彼の言うことはほとんどが正論なんだもの。確かに私たちはアカちゃんのわがままにいろいろ乗ってきたけど、周りから見たらああ見えることもまた事実よ。私も前に言っただでしょ、テストでいい点とる方法は日々の努力って。」

確かに言われてみればそうだ。だが、これからあいつがこの調子で生徒会の空気を悪くするなら俺は何としてもみんなを守ってやりとりあえず今日はみんなで会長をなぐさめることになった。

鍵side end

ゲームとテスト（後書き）

凶夜の中での真冬の評価がだいぶ高いです。

それと、凶夜は天才なわけじゃなく小さなころからの努力の成果です。

生徒会のメンバー全員がいてみんなをしゃべらすのが難しい。どうしてもしゃべらないキャラが出てきます。何とかしなくては。

それではまた次回。

まさかの事実（前書き）

今回は予想外の事実が…。

それを抜いたら普通の日常っばい感じですよ。

それでは駄文ですがどうぞ。

まさかの事実

- 生徒会室 -

俺は今日も早くに生徒会室に来てゲームをしていた。話題の作品と
いうだけはある、なかなか面白い。おかげで今日も寝不足だ。
ガラッ

俺が楽しくゲームをしていると扉が開く音がした。どうやら誰かが
来たようだ。

「あつ黒井先輩早いですね。」

このゲームの提供者の椎名妹だった。

「さっそくゲームをやってくれてるんですね。どうですか？」

「ああ、期待通りの満足のいくゲームだよ。シナリオもなかなかだ。」

「先輩もそう思いますかっ！真冬もそのゲームはシナリオがいいと
おもってますよ。その上グラフィックやゲームシステムもなかなか
なんですよ。」

「椎名妹のオススメってだけはあるな。」

これは話題性もあつたゲームだから確信はできないが、俺の予想だ
とゲームに関しては椎名妹の目は確かだろう。これからこの子の
オススメのゲームには期待しよう。

「そんな照れますよ。そういえば先輩はどんなゲームが好きな
んですか？」

「俺か？俺の好きなゲームはだな……」

もうそこからはずっとゲームについて話していた。いや、ここまで
ゲームについて話したのは久しぶりだ。俺の周りに今までゲームに
ついて話せるやつはいなかったからな。

「後、ネットで無料オンラインゲームとかもやってるな。知ってる
か……。ってやつ。」

「あつそれは真冬もやってます。今度一緒に冒険に行きませんか。」

真冬はユキってハンドルネームなんですよ。」

あれ？ユキ？そのハンドルネームは聞き覚えがあるな。」

「先輩？どうしました？もしかして、真冬と行くのは嫌でしたか？」
椎名妹が目をウルウルさせながら上目づかいで見てくる。

「いや、そういう訳じゃない。ただ驚いてしまっただけ。」

「驚いたですか？」

「ああ、俺のハンドルネームはキョウだ。」

「……え〜〜〜〜。えっキョウってこの前も一緒に冒険に行きましたよ。あれが先輩だったんですか！」

さすがに俺も驚いた。こんな偶然ってあるんだな。

「ああ、それは俺だ。確かに一昨日ユキと行った。」

もちろん他にも何人かいたが。

「ふえ〜。まさかあれが先輩だったなんて驚きました。あっ確かに雑談の時にお金がないって言ってたような気がします。」

そういえばそんなこと言った気がする。まさかそこで納得されとは思わなかったが。あっそういえば忘れてた。

「そうそう、椎名妹。俺があそこでバイトしてるって、何で椎名妹と話すようになったかとかは他のやつらには言わないよ。」

「えっ何ですか？」

「俺は自分の信じないやつらに自分のことを知られたくない。もし話す必要が出来たら自分で言う。まあそんなことないと思うが。」
「っていつか出来てほしくない。」

「ん〜先輩がそこまで言うなら分りました。」

少し納得できてないようだが約束してくれた。

ガラッ

俺が椎名妹に口止めをしたところで他の奴らも来たようだ。

「あれ？今日も凶夜は早いわね。それに真冬ちゃんも。」

「なにやら二人で話してたようだけど何を話していたのかしら？」

「なんだ、バ会長と紅葉先輩か。」

「会長さん、紅葉先輩こんにちわです。」

「誰がバ会長よ。全知全能である私に対する侮辱だわ。」

俺はその言葉こそ全知全能に対する侮辱だと思う。

「ていうか私の何を話してたについては無視なの？」

「無視じゃないですよ。ただ特に話すこともないと思ったただですよ。」

「あら、そう。フフフフフ。」

「ハハハハハハ。」

「なんか二人が怖いです…。」

ガラッ

「チーッス。」

「おはよう。おっ今日は俺のハーレムが全員集合してるな。」

「だからハーレムじゃないっていつも言ってるでしょ。」

椎名姉と変態も来たようだ。まじハーレムハーレムうるさいのだが他の奴らが本心どう思ってるのかは知らないが、口ではやめると言ってるのだし警察にでも通報するか？

「ダメよ、そんなことしちゃ。」

どうやら読まれたようだ。やはり侮れない。さて、他の奴らも来たことだし、またゲームでもするか。

「何話してたんだ？」

「いえ、私たちが来たとき凶夜と真冬ちゃんが何か話してたからそれについて聞いてただけよ？特に何もないらしいけど。」

「ふーん。そういえば昨日も思ってたんだけど、二人ともいつから仲良くなったんだ？真冬が自分から男に話しかけるなんて珍しい。」

「えーと、それは。」

どうやら返事に困ってるらしい。ついさっき口止めをしたばかりだからな。ここは助けとくか。

「別に、ただ趣味が一緒だったただだよ。」

「趣味？まさか、お前もBLを。」

「はっ？黙れ変態しゃべるな。」

「なっ誰が変態だ！」

変態が何か言っている。ハーレムハーレム言ってるやつが変態じゃなければ誰が変態なんだ。とりあえず無視だ。

「俺も椎名妹もゲームが好きだからな。」

「おいっ無視するな。」

まだ何か言ってるがもうどうでもいい。

「なるほどな、それなら真冬が話すのも納得だ。こいつは趣味に関しては饒舌になるからな。」

「そういうことだ、じゃあ俺はゲームをするから邪魔をするなよ。」

「ああ、悪かったな。」

どうやら椎名妹が少し心配だったらしい。姉としては当然か。

「じゃあ今日の会議は…」

会議を始めたらしい。ゲームをしながら少し聞いてみたが、どう聞いてもただの雑談だった。議題もどうでもいいようなことだったし。どうやらここの会議は会議という名の雑談らしい。おそらくバ会長の欲求を満たすための。

「…輩、黒井先輩。」

「ん？」

「やっと気づいてくれました。」

どうやら椎名妹がずっと呼んでいたらしい。俺は集中すると周りの音が聞こえなくなるからな。

「どうした？」

「ええっと、今日の会議は終わって、時間もだいぶたってるので今日は解散です。」

「ああ、分かった。」

「ったく、会議中に何回も声をかけたのに無視して。会長を無視するなんて、あるまじき行為だわ。」

バ会長がなんか言っている。

「あゝそりゃどうも。あまりにもどうでもいい内容で聞かなくていいのかと思って。」

「どうでもいいって何よ！この小さい会議が学校を少しずつよくしていくんだから。」

「はいはい、そうですね。」

「もゝむかつく。」

ガキの戯言にいちいち付き合ってられるか。

「さて、じゃあ帰るかな。」

「私たちも帰りましょ。キー君は今日も残るの？」

「はい、俺を待ってくれてる女の子がいるんで。」

「うわゝきもつ。何言ってるんのあいつ。引くわ。」

「あつ黒井ちよつと話が…」

バキッドゴツボコッ

「うぐつ。」

「話しかけるなって何回も言ってるだろ変態。んじゃ。」

そう言い俺は帰った。

鍵side

「大丈夫？キー君。」

「ははは、大丈夫ですよ。」

「お前最近殴られてばかりだな。」

確かにそうだがその中には深夏のも入っている。

「ケガはありませんか杉崎先輩。」

「ありがと、真冬ちゃん。たく、あいつも真冬ちゃんには優しい

のに何で俺には…」

「杉崎に真冬ちゃん相手と同じ態度で接する人がいるわけないですよ。」

「ひどいですよ会長。」

「それにしても話って何を言ってるんだの？」

「それはですね、この前みたいに生徒会の空気を悪くするなら許さないぞって言おうと思ったんですよ。」

そう、俺はそう言っつもりだった。最悪、生徒会をやめてもらつと

も。

「でっでもでも、黒井先輩は優しい人ですよ。」

「真冬、そう思ってるのはこの中ではお前だけだと思っぞ。」

「あうう。」

真冬ちゃんにかばってもらうなんて何てうらやましい。やっぱりあいつは俺の敵だ。

「とりあえずアイツはお前を嫌ってるみたいだから、話しかけないほうがいいんじゃないか？」

「しばらくはそうするよ。でも、あそこまで嫌われるなんて、俺何かやったか？」

まさか今日も話しかけるだけで殴られるとは。

「杉崎は存在が罪ね。」

「ひどっ。」

「まっそれは後々考えるとして、とりあえず今日は帰りましょ。それじゃねキー君」

「んじゃな。」

「さようならです。」

「じゃあね。杉崎。」

「はい、それじゃまた。」

みんなが帰った後、少し考えていた。何でアイツが俺にあんな態度をとるのか。俺はMじゃないから殴られてもうれしくない。でも美少女になら……。いや何でもない。さて、仕事するか。

鍵side end

まさかの事実（後書き）

まさかの凶夜と真冬ちゃんはネットゲではすでに知り合いました。

いまさらですが時系列はめちゃくちゃです。

今後どういふ話にするのか悩み中です。やはり大まかな流れは決めとくべきだったか…。もし、こういう話がいいとかがあったら感想の方によりしくお願いします。

それではまた次回。

生徒会役員なのに（前書き）

今回は生徒会役員にあるまじきことが起きます。

それではいつも通り駄文ですがどうぞ。

生徒会役員なのに

――生徒会室――

「……なのよっ！」

んつまた寝てたか。今日も遅くまでゲームをやってたからな。バイトがあるからどうしてもゲームをやる時間が夜になってしまうのがきつい。まあ最低限の睡眠はとってるから倒れることはないが。そういうえばまたバ会長が名言？を言ってるようだ。口じゃなく行動で示せてんだ。

「あっ起きましたか黒井先輩。」

「ああ、っで？今日はあのバ会長は何をするって？」

「バ会長って…アハハ…。それは、これから…」

「っというわけで、今日は身を守るための方法について話し合うわ。」

身を守る？何を話したいかよく分らなかった。

「身を守るですか？どうして急に？」

「それについては私から説明するはキー君。どうやら最近近くの学校が荒れてるみたいなの。その生徒の絡まれたりしてケガをしたうちの生徒も何人もいるわ。なので、それについての対策と絡まれた際にどうするかを話し合うわ。」

いつもに比べたらまともな会議らしい。おそらく他の先生にでも言われたのだろう。このバ会長がそんなこと思いつくはずもない。

「絡まれたりしたら、真冬怖いです。」

椎名妹はこの前絡まれてた時も抵抗があまりできてなかったからな。そついうのになれてないんだろう。

「安心しろ。その時はお姉ちゃんが守ってやる。」

「お姉ちゃん。」

椎名姉の戦闘力はすさまじく高いらしい。どうしてこの姉がいるのに妹はこんななんだ？いや逆か？こんな姉だからこんな妹になった

のか？まあどうでもいいか。

「対策ですか。下校時は一人で帰らないようにするとかですかね？」

「それもあるわね。でも、それだけだと厳しいでしょう。」

「ひらめいたわっ！一人に一人ずつボディーガードをつけましょう。テレビではみんなそれで守られてるわ。」

アホかこいつは。そんなことできるはずはない。

「それは無理よ、アカちゃん。一人ずつ雇うお金がないわ。それに、常にそばにいるのよ。そんなのいやでしょ？」

「うっ。たしかに。」

「大丈夫です会長。俺が家まできちんと届けてあげますから。」

「そっちの方が怖いよ。」

「俺って、そんなに危険ですか…。」

この変態にそんなことをさせたらそのまま襲われそうだ。

「相手の学校に注意を呼びかけてもらえばいいんじゃないか？」

「それはもうやってるわ。でも、それでも暴力沙汰が減らないらしいのよ。」

「真冬ちゃんはあるかな？」

「そうですね…。すみません、真冬には分かりません。」

そりゃそうだろ。それが分っていれば、もう少しこの前も少しは対処できただろう。

「知弦は？」

「襲ってくる相手に二度とそんなことしたくなくなるようにトラウマを…」

「知弦の方がよっぽど危険だわ。」

「ひどいわ、アカちゃん。」

危険ってことについてはバ会長と同意見だ。並みの人なら本当にトラウマを作られるだろう。それこそ再起不能になるまでに。

「凶夜は？」

はあ、俺にまで聞くのかよ。

「どうでもいい。」

「ちょっとどうでもいいって。あなたも生徒会の一員なんだから、もう少し考えなさいよ。」

いつも自分がしていることを棚に上げてなんか言ってるやがる。めんどくさ…。

「あゝ、じゃあ絡んできたやつ全員殺す。以上。」

「殺すって。ちゃんと考えなさいよ。」

「あつ？紅葉先輩だって似たようなこと言ってたたるこのバカが。」

「うっ、私バカじゃないもん。」

こいつがバカじゃなかったら誰がバカなんだ？前から思ってたがこいつ自覚なしか。

「はいはい、そこまでよ。」

相変わらずめんどくせえな。会議が終わるまで寝るか。

「椎名妹、会議が終わったら起こしてくれ。」

「えっあつはい。分りました。」

さて、寝るとする…、

ブウンブウンブウンブウン

「オラッどけやコラッ！」

ザワザワ

何やら外が騒がしくなった。人がせつかく寝ようとしているのに。

「ちよっ何よあれっ！」

「あれは…、どうやらさっきまで話していた人達のようなね。まさか、学校にまで来るなんて。」

「なんだあいつら、あたしがやつつけてやろうか。」

「ダメよ深夏。下手なことしたら暴力沙汰で停学になるわ。」

「くそっ。」

「何なんだよあいつら。こうなったら俺がつ。」

「ちよっと杉崎落ち着きなさいよ。」

何やら問題児たちが来たようだ。学校に乗り込んでくるなんて今の時代にもいたんだな。まあどうでもいいや。寝よっつと。

「おいコラっ、ここに黒井凶夜がいるだろ、出てこいやゝ。」

グーグー。

「ちよっ凶夜呼ばれてるわよ。って寝てる！起きなさいっ！」

「ちつうるせえなあ。なんだよバ会長。」

「バ会長じゃない！あいつらあんたのこと呼んでるわよ！どういう関係よ。」

「知らねえよあんな奴ら。」

「黒井凶夜っ！ここにいることは調べがついてるんだ。このうちのやつらが世話になったそうじゃねえか。借りを帰してやるから出てこいやっ！」

ちよっと見てみたが誰だかさっぱりだった。

「知らねえ。じゃっそういうことで。」

「そういうことでじゃない！どうするのよ。」

「ンなもん知るか。じゃああんたは俺にあいつらとケンカして停学になれと？」

「そういう訳じゃないけど…。」

外の奴らもうるせえなあ。人の名前をギャーギャー言ってんじゃねえよ。ボコってこよ！かな？

「あっ。」

「どうした真冬？」

「えっ？ええと、その、黒井先輩ちよっと。」

そついうと椎名妹に部屋の前で隅に連れて行かれた。

「どうしたんだる真冬ちゃん？」

「さあ？」

後ろからそんな声が聞こえた。

「どうした？椎名妹。」

「真冬思い出しました。あの人達この前のゲームショップの人達です。」

ああ、あいつらか。言われてみればそうかもしれない。

「どうしましょう。こうなったら真冬が事情を話して…。」

「いやっいい。どう俺のことを調べたかは知らねえが、あれがあい

つらならこの場を何とかしてもバイト先に来るだろう。バイト先に迷惑がかかるのはあれだからな。ここで潰す。」

「でも、そんなことしたら先輩が停学に。」

「今までも何回もしてるからどうでもいい。それよりもあいつらは言っつなよ。」

「うっ、分りました。真冬のせいですみません。」

「あっ？別にお前のせいじゃねえだろ。お前は絡まれたただで。さて、行くかな。」

「じゃあせめて気を付けてください。」

「分かった。」

そっくり俺は外に向かった。

鍵side

「真冬、あいつと何を話してたんだ？それにあいつどこ行っただ？」

「それは…、何を話してたかは言えません。先輩は外に向かいまして。」

「なっあいつ一人で行ったのか！それにこのままじゃ暴力沙汰で停学になるぞ！」

「今までも何回もなってるから気にしないそうです。」

「くそっあいつ一人で、こうなったら俺も…。」

「ダメよキー君。」

「でもっ！」

「彼が行ってしまった以上私達にはどうしようもないわ。」

「くそっ」

あいつ一人で行きやがって。この人数相手に一人は無茶があるだろ。「私達は彼に何かあったときにすぐに対処できるようにしとくべきだわ。」

「分かりました。」

俺達がそう話していると、あいつが校庭に現れた。

鍵side end

- 校庭 -

あゝめんどつ。

「おつ来たな黒井凶夜。こいつらが世話になつたそうじゃねえか。」
「あゝそんなのどうでもいい。つつかさっきまで忘れてたし。それとてめえら、人の名前をギヤーギヤー叫んでんじゃねえ。虫唾が走る。」

「なんだとつ、てめえ。おい囲めつ。」

そういうと周りにいたやつらが俺を囲みだした。手にはバットや鉄の棒とかを持っている。殺す気がよこいつら。

「なんだ、ビビって声も出ねえか。」

「どうでもいいから来るなら来いよ。めんどくせえ。俺はお前らみたいに暇じゃねえんだ。」

「つち、口の減らねえ。やつちまえ。」

一斉に周りにいたやつらが殴りかかってきた。さて、ストレス解消に付き合ってもらうか。

- 生徒会室 -

鍵side

あいつらが少し何か話した後、黒井が囲まれた。

「やばいですよ。あいつらの持つてるもの最悪死にますよっ!」

「これは…まずいわね。」

「こうなつたらあたしが。」

俺らがそう話してるうちに周りの奴らが殴りかかった。みんながやばいと思った次の瞬間、目を疑うものを見てしまった。あいつ、あの大勢の攻撃を全部かわしやがった。大勢の奴らがそのせいで自滅してしまったようだ。大丈夫だったやつも黒井に殴られて意識を失っていた。

「あいつ、つええ。」

みんな、あの知弦さんですら啞然としていた。

鍵side end

- 校庭 -

ふう、やっぱりザコはザコか。

「さて、ほかの奴らはダメだったようだな。次はお前だ。」

「っ、クソが。」

そう言い殴りかかってきた。遅い、俺はそのパンチをかわし、相手の懐に潜り込んだ。

「死ね。」

ドコッ！

「グッ」

バタッ

どうやら一撃で気を失ったようだ。はあだるかった。さて、こいつらの処理は教師どもに任せて戻るか。

- 生徒会室 -

ガラッ

生徒会室に戻るとみんな呆然としていた。しかし、しばらくすると動き出した。

「先輩っ！大丈夫でしたか。」

「んっああ、平気だ。」

椎名妹は本気で心配だったらしい。顔色が少し悪くなっていた。

「にしてもお前強かったんだなあ。今度あたしと勝負してくれよ。」

「めんどいから拒否。」

椎名姉からは勝負を挑まれた。めんどいから拒否ったが。

「あんた、あんな無茶して何かあったらどうするのよっ！」

「別に。」

バ会長の言うことはどうでもいい。

「会長の言う通りだっ！お前ひとりで行って何かあったら…」

バキッドゴッボコッドカッ

「学べ変態。」

変態の声は聞きたくなかった。

「それよりこれからが面倒よ。」

「そうっすね。」

おそらくもうすぐで、

ピンポンパーンポン

「2年B組黒井凶夜君、2年B組黒井凶夜君、いますぐ職員室に……」
ほら来た。

「さて、行ってくるか。」

そついい俺は職員室に向かった。

簡単にいえば停学になった。教師たちも何もできなかったためと紗鳥のおかげで重い処分にはならなかったが、暴力沙汰であるには違いないため3日間の停学になった。まあ、停学だろうとバイトには行かせてもらうが。それ以外はゲームができる。停学も悪くねえじやねえか。

生徒会室に戻ると、

「どうだったの凶夜？」

バ会長が声をかけてきた。言わなくてもいいが一応言っておくか。

「3日間の停学。」

「そう、やっぱり停学は避けられなかったのね。」

「まあその分家でゲームができるから構わないけど。」

「それはどうかと……。」

さて、帰るか。カバンを持って帰ろうと生徒会室を出ると椎名妹が追いかけてきた。

「あのっ先輩。真冬のせいで……本当に……。」

まだ、気にしているらしい。別にこいつのせいじゃねえのに。

「だからお前のせいじゃないって。」

「でもっ」

「俺が勝手にやったことだ、気にするな。俺が絡まれることはよく

あることだ。お前を助けてなくてもそのうちこうなっただろう。」

「はい…。」

顔はまだ納得してなかった。はあ、仕方ない。

「じゃあ俺が停学の間、毎晩俺の満足するまでネットゲに付き合ってもらおう。寝不足は覚悟しとけ、それでチャラだ。」

「…はっはいっ！」

俺がそういうと笑顔で元気な返事が返ってきた。さて、こいつも元気になったし帰るか。そろそろバイトの時間だ。

「じゃあな。」

「はい、さよならです。」

そう言い俺は帰った。

鍵side

凶夜を追って行った真冬ちゃんが上機嫌で帰ってきた。

「どうしたの、真冬ちゃん。」

「えっ何がですか？」

「いや、なんか機嫌がいいと思って。」

「そんなことないですよ。真冬はいつもこんな感じです。」

真冬ちゃんはそう言っていると、鼻歌を歌いながらゲームを始めた。うん、やっぱり上機嫌だ。

「おい、深夏どう思う？」

「さあな？おそらく凶夜と何かあったんだろう。」

「あの二人仲がいいよな。くそ俺のハーレムなのに。」

「だからハーレムじゃないって言ってんだろ！」

「もう深夏の照れ屋さん。」

「うぜー殺意だらけだよ。」

「まあまあ、でもほんと何があったんだろう。ゲーム好き同士って言ってたけど。」

「二人がそう言ってるんだしそうなんじゃねえか。あたしは真冬に危害を加える気がないなら別にいいよ。」

どうやら深夏はあまり二人を気にしてないらしい。真冬ちゃんや黒井のいい性格から付き合うとかはないと思うけど…。だが、ハーレムの主たる俺としては二人の仲が良くなりすぎるのは面白くない。でも、あいつとは話すことできないし、忠告することもできない。はあ…。

鍵 side end

生徒会役員なのに（後書き）

生徒会役員がまさかの停学になりました。

ケンカの所は上手く書けないのでだいぶ少ないです。申し訳ありません。

次回は停学中の話でも書こうと思います。

それではまた次回。

停学中（前書き）

停学中の出来事です。

一部を除いて特に何もなく平凡な休日みたいなものです。

では、駄文をどうぞ。

停学中

- - 家 - -

1日目

「んっ、もう昼か。」

俺は今日から3日間の停学だ。停学中に椎名妹から借りたゲームをすべて終わらせるのが目標だ。夕方からはバイトがあるから、今のうちにやっておくか。

…数時間後

ふう、1つ目のゲームが終わった。やはりなかなかのシナリオだった。最後のどんでん返しには驚いた。他のゲームにも期待だな。さて、そろそろバイトの時間だな。準備していくか。

- - ゲームシヨップ - -

「おっ凶夜君、今日も頼むよ。」

「はいっ！」

ここの店長はなかなかいい人だ。俺の履歴書とかはあまりいいとは言えないのにそれでも面接をしてくれて、自分の目で見た上で合格にしてくれた。この人には迷惑をかけないようにしないとな。

…またまた数時間後

今日は特に何もないみたいだな。まあこの前みたいなことが毎日あるわけでもないだろう。

「いらっしやいませ。」

「えっ先輩？」

どうやら椎名妹が来たようだ。この前来たばかりなのにゲームを買いに来るなんて金持ちなのか？

「どうしてここに、先輩は停学中じゃないんですか？」

「たしかに停学中だが、シフトが入ってるからには来ないとな。バイト先に迷惑はかけられん。」

「それはそうかもしれませんが、停学中には家にいないともし学校に見つかったら。」

「安心しろ。そう簡単に見つかるほどバカじゃない。」

俺は今までも学校をサボってバイトをしていたこともあるがばれたことは一度もない。まあ何回かばれそうになったときもあるが、そういう時のための変装道具も常に持っている。いざとなれば変装すればばれない。

「っで？今日は何を買いに来たんだ？」

「あっそうでした。今日も新作のゲームを買いに来たんです。」

「ああ、これか。」

「はい、そうです。これはなかなか期待ができそうなんですよ。なぜなら…ペラペラ。」

椎名妹が根拠を話した。少し聞いたがなかなか納得のいく根拠だった。だが、これ以上聞いているとバイトに影響が出る。

「悪いな椎名妹。そろそろバイトに戻るわ。」

「あっすいません、では真冬もこれを買って失礼します。」

そついい椎名妹はゲームを買って帰って行った。あんなに新作ゲームを買う金があつていいな、とか思ったり思わなかったり。さて、バイトに戻るか。

…再び数時間後

「それじゃあお疲れ様でした。」

「はい。お疲れ。」

ふう、今日は特に何事もなく終わった。ちよつとうるさいゴミを1つ処分しただけだ。あれ？これって何もなかったことになるのか？まあ、どうでもいいや。さて、帰るか。

- - 家 - -

家に帰り晩飯を食い、風呂に入るとだいぶ遅くなっていた。普段ならあと少ししかゲームができないけど今日の俺は違う。なんたって、停学中だからな。寝坊して学校に遅れたりすることはない。だから

今日はたつぷりゲーム三昧だ。さてどうするか。1本目のゲームはクリアしたし2本目でもやるか？ふゝゝむ、いや、2本目は明日いつきにやろう。ということでネットゲでも…

ブッブッ

ん？携帯か。誰からだ？まあ俺の番号を知ってるやつなんか少ししかないから想像はつくが。見てみるとやっぱり紗鳥からだった。

「もしもし、どうした？」

「おお凶夜か、いやなんだ、停学中どうするのか聞こうと思ってな。おとなしく家にいるわけでもないだろう？」

やっぱり紗鳥は俺のことはお見通しらしい。

「ああ、まあ今回は新しいゲームがあるからな。バイトの時以外は家にいると思う。バイトの時間になったらバイトに行くが。」

「バイトをするのもいいが、お前は停学中だ。くれぐれも見つかるなよ。」

「分かってるよ。」

「まあお前なら大丈夫だろう。それと、新しいゲームか。椎名妹にでも借りたか？」

「ッ！よく分かったな。」

「奴のゲーム好きは筋金入りだからな。お前とは気が合っんじゃないかと思ってたよ。」

そこまでお見通しだったらしい。

「ああ、あいつはあの生徒会の中では一番だ。」

「他の奴らとはどうだ？うまくやってるか。これでも顧問だからな、今の状況でも聞いておこう。」

もしかして、こっちが本題だったんじゃないのか？

「おいおい、ここで顧問の権限かよ。まあいいや。そうだな、あまり関わらないようにしている。」

普段寝るかゲームしかやってないからな。

「やはりそうか、お前の場合特に杉崎とはぶつかりそうだな。」

「分かってるじゃん。あいつみたいなやつは反吐が出る。ハーレム

ハーレム言いやがって気持ち悪い。」

「フフフ、やっぱりそうか。」

そこまで分かっているのになぜ紗鳥が俺を生徒会に入れたのかも若干気になるが。

「そうだいいことを思いついたぞ、お前が逆に全員を落としてみるんだ。きつとおもしろいことになるぞ。」

「冗談、一人ならまだしも全員つて、そんなんじゃ誰も幸せにならないよ。」

「相変わらず杉崎とは正反対のことを言うな。杉崎はハーレムは全員が幸せになれる。お前はハーレムみたいなのは全員が不幸になる。」

あいつは全員が幸せとか言つてやがるがありえない。そんなことをしても全員が不幸になるだけだ。

「親父を見るからな。あいつはハーレムとは言わないが複数の人と付き合っていた。まあこいつの場合はただの浮気だが。だが、そのせいで俺と母さんが不幸になった。おそらく他の付き合ってた相手も不幸になってるだろう。」

そう、決して幸せになんかなれやしない。

「経験者のお前がそう言うならそうなのかもな。」

「いやな経験だな。それでも今はそれなりにやってるがな。」

「そうか、何か困ったことがあればいつでも言うんだぞ。すぐに助けに行くからな。」

「今でも十分助けてもらってるさ。」

「それでもだ、また新しい問題が起こるかもしれないだろ。」

「ああ、何かあったら連絡するよ。」

「それでいい。それじゃあな。問題だけは起こすなよ。」

「ああ、お休み。」

そう言い電話を切った。にしても久々の電話だったな。あそこまで堂々と暴力沙汰を起こしたのも久々だったからな、何か心配にでもなったんだろう。迷惑かけないようにしないといけないのにこれじ

やあ本末転倒だ。まあ、俺が取り繕っていい子になってもあいつは喜ばないからな、あくまで自然体で迷惑をかけないようにしよう。

「さて、ネトゲネトゲ。」

そこからしばらくはネトゲで遊んでいた。途中から椎名妹も来て遅くまで付き合わせていた。

2日目

結局朝まで付き合わせてしまった。途中で切り上げようかと思ったが、その後の予定がないことはばれてるので満足のいくまでやれと言われて、その結果朝までプレイした。一応大丈夫かと聞いたら徹夜ぐらいよくあることらしい。ほんとゲームに関してはたくましいやつだ。さて、今日は2本目のゲームを一気にプレイだ。だが、その前に……

「凶夜〜めし〜。」

なぜ紗鳥が家にいるんだ。

「それはだなそこに御飯があるからだ。」

「心を読むな！それと言ってることめちやくちやだ。」

このままだと遅刻するだろうしさつさと作るか。

「ほらよ。」

「ん〜、やっぱり凶夜の作る飯はうまいな〜。よし、これから毎日

……」

「頼むからやめてくれ。」

飯をうまいと言ってくれるのはうれしいが毎日来られるのは勘弁。

「仕方ない。だが、たまには来させてもらうぞ。」

「ああ。」

「よし、では行って来る。」

「行ってら〜。」

そうして、紗鳥は出て行った。ほんとに飯を食いに来ただけだったんだな。よし、今度こそゲームだ！

… 数時間後

むっ、もう夕方か。ゲームも半分くらいか？このゲームもなかなかだな。さて、バイトバイト。

…バイト後

ふー今日もよくなぐっ…ゴホン、よく働いたな。よし、今日はネトゲはせずに朝までにこのゲームをクリアしてやる。

3日目

よし、2本目クリアだ。しかし、これだと今日中に3本目をクリアするのは無理だな。まあいい、今日はバイトは休みだし、できる限りやってみるか。

…昼

そういえば腹が減ったな。朝飯を食ってないせいか。徹夜明けで朝飯抜きはつらいものがある。飯でも食うか。その後は再びゲーム三昧だ。

…夜

ふむ、ゲームも一区切りついたし、そろそろ勉強でもするか。3日間まったくやってないからな。このままだと成績が落ちてしまう。

カキカキカキ

ん？もう0時か。少しネトゲでもやって寝るか。ネトゲに入ると椎名妹がいた。昨日どうしていなかったのかと怒られてしまった。どうやらいつ来るのかが分からなかったから割と遅くまで待っていたらしい。それは、悪いことをしてしまった。その後は謝罪をして、椎名妹が行きたがっていたステージへ行った。敵がなかなか鬼畜だったか、それ以上に椎名妹は敵がかわいそうと思えるほどのプレイだった。こいつどんだけやりこんでるんだよ…。今回は3時までプレイしてお開きとなった。明日からまた学校か…。めんどい、もう一回停学なるか？いや、迷惑がかかるからやめておこう。はあ、だる…。

停学中（後書き）

電話での会話でなぜ杉崎を嫌うのかが少し明らかに。
まあ設定でも書いてるけど。

凶夜はハーレムは周りを不幸にすると考えています。

さて、今回は2日目と3日目がネタがなく短くなってしまった…
もっとしっかりやらなくてはと思う今日この頃。

次回はこういう風にしよう。

杉崎とケンカでもさせるか、椎名姉とバトル、会長いじり、知弦さんとの心理戦。

どうするか…

まったく上にはない別なものになる可能性も。

それでは、また次回。

V S 杉崎（前書き）

少し杉崎とやり合います。

別に殴り合いとかじゃないよ。

それじゃあいつもに増して駄文ですがどうぞ。

VS 杉崎

- - 教室 - -

「えゝ、今日の授業はここまで。」

ようやく授業が終わって放課後だ。この後呼び出しがあったわけ。おそらく停学明けだからもう一回注意でもしとくんだろ。まったくめんどくせゝ。

「凶夜、呼び出しがあったよな。今日は生徒会室には来るのか？」
また変態だと思つて殴ろうと思つたが、声の感じから明らかに違つた。確認してみると椎名姉だった。別に俺が行こうが行くまいがどつちでもだろ。

「さあな。」

「そつか。じゃあ先に行つてるぜ。」

「ああ。」

呼び出しかゝ。すぐに終わってくれば楽なんだが。

鍵side

「やつぱり深夏が話しかけても殴つたりしないんだな。」

「おつ鍵か。でも別に好感をもたれてるとかはなさそうだぞ。むしろあたしも嫌われてるような気もするぜ。」

深夏が嫌われてるわけはないだろ。熱血で若干百合な感じもあるが、持ち前のリーダーシップや面倒見の良さから周りには好かれているからだ。

「そんなわけないだろゝ。」

「うゝん。まあ生徒会室に行こうぜ。」

「そうだな。」

- - 生徒会室 - -

「どもゝ。」

「ちっす。」

みんな相変わらず自由に過ごしていた。会長はうさまろを食べ、知弦さんは勉強、真冬ちゃんはパソコンで何かしているようだった。BLだけは止めてほしいところだ。

「凶夜は今日は来るって？」

「どうだろうな？聞いてみたけど分からんって行ってた。」

「ふん。今は何してるの？」

「呼び出しがあつたみたいだ。」

「じゃあそれが終われば来るかもね。杉崎はちよっかいかけないよ
うにね。」

「ちよっかいなんかかけてませんよ。」

「でも杉崎が話しかけるたびに殴られてるじゃない。」

たしかにそうなんだよな。今日あたり本気で何でか聞いてみよう
かな？

「きつと俺のハーレムっぷりに嫉妬してるんですよ。」

「はいはい。」

とうとう流されてしまった。案外流されるのってダメージ多いな…。

「まっ杉崎が話しかけなければいいだけよ。」

「いや、会長今日こそはなぜあそこまで殴られるのか聞き出してみ
ますよ。いつまでも殴られるわけには行かないですからね。」

「だから杉崎が話しかけなければそれで終わるんだよ。」

「いいえ、それは俺の気がすみません。」

「あら？キー君はマゾっ気があつたのかしら？」

「ちよつと知弦さんっ！いきなり話に入ってきて変なこと言わない
てください。」

「殴る黒井先輩、喜ぶ杉崎先輩。ありますっ！」

「ちよつと真冬ちゃん、何目を輝かせてるのっ！」

いきなり空気がアウエーになってしまった。たまにみんな一気に攻
めてくるよな…。とりあえず話を変えなくては。

「ところで会長テスト勉強ははかどってますか？」

「えっ、もっもちろんよ。前もって勉強することは当たり前じゃない。」

「あら？じゃあ今回はノートは必要なさそうね。」

「えっそんな。」

「だって前もって準備できてるんでしょ。」

「うっ。」

ふっ何とか話をそらすことができた。それにしても目がうるんでる会長かわいいな。知弦さんも、

「はあ、かわいいわアカちゃん。」

とか言ってるし。

ガラッ

おっ黒井が来たみたいだ。

鍵side end

ガラッ

はあ、予想通りのことしか言われなかったな。あんなこと言われなくても分かってるつつうの。さて、ゲームでもするか。

「あっ。」

しまった。今朝ゲームやってそのまま持ってくるの忘れた。くそっ。

「どうしたんですか？」

「ああ、ゲームをやるうと思ったら忘れててな。」

「それは、お気の毒です。」

さて、そうなるとどう過ごすか。寝るか？帰ってもいいが生徒会に入った以上ある程度はいないと何か言われたときの言い訳が減るかな。やはりここで時間を潰すべきか。本でもないか探してみるか。ガサゴソガサゴソ

ん？鞭が出てきた。なかなかいい感じの鞭だな。

ペチペチ

「あっあの。その鞭どうするんですか？」

「いや、色々見てたらなかなか上等な鞭が出てきたもんでな。」

「あら、見る目があるじゃない。その鞭なかなか高かったのよ。」
やはりこの人のものだったか。前から思ってたがこの人は色々危ない面がありそうだ。

「へ〜なかなかいいもの持ってるじゃないですか。」

「それほどでも、フッフッフ。」

さて、もう少し探してみるか。

ガサゴソガサゴソ

おっ、凶夜は本を見つけた。っとRPG風に言ってみた。そういえば、RPGの主人公って不法侵入罪とか窃盗罪が絶対あるよな。人の家に勝手に入ってタンスをあさり金をゲットって、どこの泥棒だよ。っとそんなことより、何の本かな。

「何々、B L…。ふう、これは驚きだ。」

「あつ先輩。それは真冬の自信作ですよ、是非読んでみてください。」

「

おお、椎名妹自作の品だったらしい。これを見つけた時より驚いた。以前B Lって言ってたのは聞き間違いじゃなかったのか。

「いや、興味ないから。」

「ガーンです。先輩なら分かってもらえと思ってましたのに。裏切られた気分です。」

「いや、俺はそんな風に思われてたことに裏切られた気分だよ。」

さすがにB Lには興味はない。それにしても椎名妹がB L好きだったとは意外だ。さてもう少し見てみるか。

ガサゴソガサゴソ

これはっ！7つ集めれば願いが叶えられるという…、いらねっ。

ガタッ

「凶夜っ！それはまさか。」

「んっ、欲しいのかほい。」

ポイツ

「おお、これで残りは後1つ。サンキュ。」

すでに5つ持ってたんだ。謎の多い姉妹だ。それよりここにはこれ

以上暇をつぶせそんなものはなさそうだ。さて、次は何をしよう。

「おい黒井、話が…」

ドカッバキッボコッドゲシッ

変態の声が聞こえたような、きつと気のせいだな。

「ぐっ、おい話が…」

ドカッバキッボコッゲシッ

ったくしつこい。話しかけるなって言ってるのに。

「ウゲッ。」

「ちよっ杉崎大丈夫、凶夜やりすぎよ。」

「はあ？話しかけるなって前から言ってるのに、それを聞かない変態が悪いと思うんだが。」

「キー君があなたに話したいことがあるそうよ。それを聞くのもダメなのかしら？」

「ああ、嫌ですね。変態の声なんか聞きたくありませんから。」

「今聞かなくてもここに来るたびに毎回話しかけられるわよ。それでもいいの？」

それはそれでうざいな。殴ればすめばいいがそれでも話しかけられたら…

ゾゾゾッ

最悪だ。

「分かりました。今回は話を聞いてもいいでしょう。ただ、今回だけつてのが条件です。」

「どうかしら？キー君。」

「はい。それでいいです。」

「だそうよ。」

「分かりました。ただ、もしこの条件を無視したら、この生徒会をぶつつぶしてやるから覚悟しろ。」

「ひっ。」

どうやら少し殺気が出ていたようだ。バ会長がおびえていた。

「大丈夫よアカちゃん。キー君が約束を守ればいいんだから。」

「そつそうよね。杉崎、ちゃんと約束は守りなさいよ。」

「分かってますよ。」

「じゃあ早くしろ変態。俺は変態などとは話したくないんだ。」

「じゃあ、まず誰が変態だ。誰が。」

「杉崎以外にいないじゃない。」

俺が言う前にバ会長が答えてくれた。

「ちよつ会長。ひどくないですか。」

「何よ。あんたみたいにギャルゲばかりして、それに影響されてこの世界をギャルゲと混同しているあんたは変態でいいのよ。」

「うわ、そこまでだったんだ。この世界をギャルゲと混同って、もう末期だな。」

「早くしろ変態。」

「くつ、まあそこは我慢しよう。」

何様だこいつ。

「次だ、なぜお前は俺をそこまで嫌う。俺がお前に何かしたのか？」

「お前がうざいから。」

「その理由を聞いてるんだ。」

「変態を嫌わない理由がどこにある。むしろ変態が好かれると思ってるのかクズが。」

「うっ。」

「まあそれ以外にもあるがな。」

「あら？それは何かしら？」

「美少女が好きだの、ハーレムだのがうざい。虫唾が走る。」

「たしかに。」

変態以外全員の同意を得た。

「ちよつ、みんな。」

「美少女が大好き。美少女は正義。お前がいつも言ってることだが、これって顔以外興味ないってことだろ。まずそこがうざい。」

「違う。たしかに美少女が大好きだがそれ以外の子だって。」

「次に、この生徒会はお前のハーレムとか言ってるみたいだが、そ

「こが気持ち悪い。つーかこれが一番きもい、うざい。」

「なっ。」

「口を開ければ美少女だのハーレムだの頭のいかれた変態以外に何とさえいい。しかも本人たちは拒否している。それなのにそれを言いまくってるって、訴えても勝てるんじゃないか？名誉棄損には当てはまるのか？まあいいや。」

「それはみんなが照れてるだけで。」

『それはない。』

「ほらな。まあ本心は知らないが今の状況的に口では嫌がってるから、はたから見ればただのアホだ。」

「うぐっ、俺がお前に嫌われてる理由は分かった。じゃあ次が最後だ。お前はなぜ生徒会に入った。ここは俺達の家みたいなものだ。それを壊すようなら絶対に許さない。」

「うわっ、最後の最後で変な発言が来たよ。」

「俺が生徒会に入った理由？内申点が上がるからだよ。それ以外にこの生徒会に入る理由が何がある。」

「まあ今は椎名妹にゲームを借りたりするのも入ってるが。」

「なっそんな理由だと。」

「ああ。」

「そんな理由なら、この前の勉強会のと看みたいにここの空気を悪くするのはやめろ。それだけは絶対に許さない。」

「あゝうざい。ちょっと切れそうかも。」

「何言ってるんのお前。俺の理由を言うならお前なんかハーレムのために入ってきたんだろ。そのほうが論外だと思うが。」

「たしかに理由のほうは俺の方が悪いかもしれない。だが、俺はこの空気が大好きなんだ。それを守るためなら何だってやってやる。」

「いい加減にしろよお前。勘違いもほどにしろ。ここは何だ、部活か仲良しサークルか。違うよな、生徒会だよな。家だの空気だの何言ってるやがる。生徒のための活動もほとんどせずに遊んでるば

かりの奴らが偉そうなことぬかしてるんじゃないよ。」

「仕事はちゃんとやっている。」

「ああ、そのようだな。だがやってるのは誰だ？ 雑務とかはほとんどお前がやってるんだろ？ 他の奴らは何をやっている？ 普段の時間は遊んでばかりだろ。たまにやる会議もバ会長の気まぐれのへんな議題ばかり。会議ごっこなら他でやれ。」

「お前だってゲームしたりしてるだろ。」

「そうだな。俺はゲームをしてるし、そもそもこの生徒会に入ったのも仕事がないからだ。仕事があれば内申点が上がるうが誰が入るか。」

「なら……。」

「だが、仕事をしてない生徒会に何言おうが自由だよな。仕事をせずに自分の気まぐれの議題を出すバ会長に何言おうがいいよな。そのせいで空気が悪くなるからやめろだのそんなアホな話はないよな。」

「それは……。」

「ここはお前たちの仲良しごっここの場じゃないんだよ。仲良しごっこがしたきや適当に部活でも作ってそこで遊んでろ。生徒のためになにもせずに自分たちが楽しむことの何が生徒会だ屑が。」

さて、言うことはいったし帰るか。

「さっきのが最後だったよな。じゃあ俺は帰るから。条件を無視したらこの生徒会は潰すからな。こんな仕事をしてない生徒会なんか潰そうと思えば潰せることを覚えとけ。」

ガラッ

鍵side

ガラッ

黒井は帰って行ったようだ。最後の方は言い返すことができなかった。どっちが正論かと言えればあっちなんだろうな。普段は仕事をせずに自由にしてばかりだからな。だが、それでも俺はここが好き

なんだ。話しかけなければ潰されることはないと思うが、もし潰されそうになっても全力で守ってやる。

鍵side end

V S 杉崎（後書き）

生徒会のメンバーに凶夜が思ってたことの一部を言いました。
この後はどうなるのか。

書いてる本人もわからない。

今更だけど生徒会の一存や杉崎が嫌いなのではないよ。

それではまた次回。

インタビュー（前書き）

新聞部からのインタビューです。

生徒会の一存のアニメを見てたら書きたいと思って書きました。

では駄文をどうぞ。

インタビュー

――家――

ブーブーブーブー

ん？メールか。未登録だが誰からだ？椎名妹からか…、あれ？アドレス教えてないよな。メールを見てみると紗鳥から教えてもらったそうだな。明日は絶対に生徒会に来てほしいと伝えるのを忘れてたそうだな。明日か、まあバイトもその時間はないしいいか。

…次の日

――生徒会――

ガラッ

「来たわね。」

そこには腕を組んだバ会長がいた。もちろん他のメンバーもいたが。しかし、

「バ会長よ。子供が虚勢を張ってるような格好にしか見えないぞ。」

「誰が子供よ！」

「お前以外にいないだろ。鏡でも見て考えろ。」

「うゝ、やっぱりム力つく。」

「事実を言われて起こるな、カスが。」

「凶夜、アカちゃんをあんまりいじめると許さないわよ。」

おつ、紅葉先輩からドス黒いオーラが。

「別に、見たままの事実を言ってるだけだ。そんなやつをいじめても面白くも何ともない。」

「知弦。」

「よしよし、まずは牛乳を飲んで大きくなりましょうね。」

事実と言うことは向こうも思ってたらしい。それより、

「おい、バ会長。用事は何だ。今日は絶対に来いと言われたぞ。」

「そうだった。ゴホン。新聞部からインタビューをしたいと言われ

たのよ。新聞部の頼みなんか聞きたくなかったけど、ブツブツ。」
最後の方は聞こえなかった。

「真儀瑠先生が許可したそうよ。それで私達も何も言えなくなったの。」

紗鳥か、おそらく面白そうでも思ってたんだろう。まためんどくさいことを。

「でも、あたしたちも凶夜のことをあんまし知らないから、このインタビューで少しは分かるんじゃないのか。」

事実を話す保障などないぞ。まあ、よほどのこと以外は嘘を言う気はないが。

「そう言えばそうですね。」

「ふふふ、これで凶夜の弱みが握れれば。」

そう言うのは口に出さない方がいいぞバ会長よ。それにしても新聞部か、リリシアが今更俺を記事にして……いや俺だからの可能性も。

「そう言えば、凶夜とリリシアさんは知り合いじゃなかったかしら？」

「そうなの？」

「ほら、前に電話してたじゃない。」

「へー、あれってリリシアにしてたんだ。」

よく覚えてたな。もしかしてこいつも会長みたいに俺の弱みでも握りたいのか？まあ、いいや。

「ああそうだ。」

「意外です。」

「そうか？あいつは結構いい奴だからな。情報を得たいときとかに役に立つ。」

「あんな奴のどこが。」

「少なくとも仕事をしないバ会長よりはマシだ。」

「なっ、あんな奴より下って言われるなんて屈辱だわ。」

自分のことをただだけ上に見てるんだこいつは。バカなのか？あつバカだったんだ。

ガラッ

「オッホッホッホッ。インタビューに来ましたわよ。」

「来たわね藤堂リリシア！ノックくらいしなさいよ！」

「あら？忘れてましたわ。ホホホホ。それで、新人さんはどこかしら？」

「俺だ。」

「ッ！凶夜。あなたでしたの。」

あゝ、どうやら知らなかったらしい。たまに抜けてるからなこいつ。

「まあいいですわ。あなたのことを調べつくしてあげますわ。」

このメンバーと同じ考えを持ちやがった。

「インタビューを受けてやってもいいが…。」

「やっぱり来ましたわね。あなたがタダでインタビューをしてくれるとは思ってませんわ。それで何の情報ですか？」

勘のいい奴だ。

「そうだ、どうやら以前にこの生徒会のインタビューをしたそうだな。」

「確かにしましたわ。」

「その時のインタビュー内容とその時に書いた記事を持ってこい。それが条件だ。」

「あら？この前生徒会の情報は言いませんでした？」

「あの時は電話だったからな。ちゃんとした情報をよこせ。」

「分かりました。持ってきますわ。その変わり嘘なく答えてもらいますわよ。」

「分かっている。」

俺がそう言うと、リリシアはいったん出て行った。

「凶夜、そんなこと知ってどうするんだ？」

「自分のいるところの情報ぐらい欲しいだろ？」

「それで私達の弱みでも握りたいのかしら？」

「お前じゃないしそんな訳ないだろ。ただの判断材料だ。」
ガラッ

「持ってきましたわ。」

「んっ、見せる。」

インタビュー内容と新聞記事を見てみたが。（内容はアニメ版を参照）

「二股疑惑？はっ、クズだな。」

「ちよっ凶夜、それは…ごによごによ。」

バ会長の口ぶりからすると何かここにはない情報もありそうだが、そんなのはどうでもいい。このインタビューで認めてるんだからな。

「なんだ、バ会長。ここでちゃんと認めてるぞ。ならばこれが真実だ。他には…、ほう、バ会長はリリシアに会長を譲りたいのか。」

「それはそいつが勝手に書いたのよ。」

まあおそらくそうだろう。俺的には確かに譲ったほうがいいと思うが、それをこのバカが言う訳がない。

「椎名姉は…、熱血。」

「おい、それだけか。それだけなのかあたしは。」

「冗談だ、何だそこにいる変態と付き合ってたのか。」

ガタッ

「付き合ってたねーよ。」

またリリシアが勝手に書いた情報らしい。

「椎名妹は、やはりゲームとBLか。ん？病弱そうなのはキャラづくりだったのか。」

「それは…、ちよっとした冗談です。」

本人はそう言ってるが、病弱っていうのはあながち間違いじゃなさそうだ。

「紅葉先輩は…、特に何も無いな。どうしたんだリリシア。」
ガクガクブルブル

聞いたらずいらしい。こりゃトラウマもんだな。本人に聞くか。

「紅葉先輩、この時に何があったんですか？」

「特に何も無いわ。ただ、私のアカちゃんのいる生徒会に色々ちょ

つかいをかけてくる新聞部さんに、おいたが過ぎるとどうなるか教えてただけよ。」

「ふうん、安心しろリリシア。このバ会長のいる生徒会は周りが見えてる以上にクズだからな。」

「そこまで言いますのね。」

「何言ってるのよ凶夜。」

「事実だろ、黙ってる。」

「うう。」

「相変わらず自分の気に入った相手以外厳しいですわね。」
「当たり前だ。」

「変態は…、この前言った通りのクズっぷりか。しかも過去に二股した上で今ハーレムなんて言ってるなんてもう救えないな。」
過去の経験から学べよ。それとも別の答えにでもたどり着いたか。それでハーレムだとしたらとことんクズだ。

「そろそろインタビューを受けてもらいますわよ。」

「いいだろう。」

情報もだいたい見終わつたし。

「それでは自己紹介からお願いしますわ。」

「黒井凶夜。役職会計補佐。」

「こんな途中に生徒会に入ることになった経緯は。」

「知らん。」

「知らんって、ではなぜ入ろうと思ったんですの。」

「内申点上がるからだ。ちなみに今のの記事にしたら潰す。」

「うう、分ってますわ。ほんと相変わらず容赦がありませんわ。答えも最小限ですし。」

当然だ、余計なことまで話す必要はない。

「では、以前からスキャンダルだらけであるこの生徒会に入ってみてどう思いましたか。入ったばかりの第三者の目から。」

「クズ。」

「なるほど、生徒会は仕事をせずに遊んでばかりだと。」

1を言つて10を知ってくれとありがたい。

「ちよつとリリシア、凶夜はそこまでは言つてないじゃない。」

「リリシアの言つてゐる通りだ。」

「ちよつ凶夜。」

「事実だろ、遊ぶかお前のくだらない議題ばかりだろ。」

「では、次の質問ですわ。あなた前回と前々回はテストの時何をしていたの？」

「どうということよ。普通に最下位だったんでしょ？」

「あら、何を言つてゐるんですの？凶夜が普通に受けたら最下位のはずがないでしょ。」

「だからどうということよ。」

「凶夜は入試以来受けたテストは全て満点ですわ。」

『えっ！』

「前回と前々回はテストを受けてなくて最下位だっただけですわ。

その後に受けたテストでは全教科満点取ってますし。」

「凶夜、あんた頭よかつたの？」

「お前と一緒にするなバ会長。」

「ウゝ。」

「前回は旅行、前々回はインフルエンザだ。」

「インフルエンザはともかく旅行つて、信じられませんか。」

「親戚が急に行くと言ひ出したんだ。」

「なるほど。では、最後の質問ですわ。」

「まさか、凶夜の頭がよかつたなんて意外だね。」

向こうで何か言つてゐようだ。

「あなたから見てこの生徒会のメンバーをどう思いますの。」

「リリシア、そんなことも記事にするのっ！」

「当り前ですわ。既存の生徒会メンバーの意見じゃなくて、新たに
入った第三者からの目が欲しいんですわ。」

「うう、凶夜がちゃんとしたこと言つはすないわ。」

心外だ、俺はちゃんと事実を言つ。

「バ会長は、バカ、ガキ、さぼり、無能、だがそれら全てに自覚なしの無駄な自信家。」

「ちよつと言いすぎよ。」

「黙れ。」

「うう。」

「よしよしアカちゃん。凶夜、あまりおいたが過ぎるとほんとにお仕置きをするわよ。」

「俺の思った事実を言ってるだけです。文句を言われる筋合いはありません。どれか一つでも違うものがあるなら言ってください。」

「たとえそれが事実でも本人を前にして言うことじゃないわ。」

「ほら、あんただって事実って認めてるんでしょ。それでもそいつが好きなのは構いませんが、事実を言ってそれでお仕置きって、そこから変にいるすぐに暴力をふるうクズと変わりませんよ。」

「知弦さんにクズって言ってる。あいつは命知らずか。」

「真冬そんなこと言って生きる自信ありません。」

よほど紅葉先輩は恐ろしいらしい。しかし、ほんとにやってきたら返り討ちにするだけだ。

「次は紅葉先輩だが、おそらくドS。」

「確かにそれは言えてますわ。」

「何か言ったかしらリシアさん。」

ビクッ

「なっなんでもありませんわ。」

こいつ以前によつぽどの目にあつたんだな。

「椎名姉は、妹思い。」

「お姉ちゃん。」

「真冬、お姉ちゃんが何があっても守ってやるぜ。」

「あなたの言葉に影響されて向こうで何かやっていますわ。」

おそらく気にしたら負けだろ。

「椎名妹は、ゲームの話をしたり、ゲームを貸してくれたりする生徒会の中で一番いいやつだ。」

「あなたがそんなこと言うなんてよっぽど気に入ってるんですね。ああ、そういえばあなたもゲームが好きでしたわね。」

「そんな。」

「おお、真冬が赤くなってる。」

「騙されちゃダメよ真冬ちゃん。あいつは私を侮辱したんだから、悪いやつに決まってるわ。」

「うおー真冬ちゃんが赤くなってるだと、黒井貴様俺の真冬ちゃんを……。」

ドカッバキッボコッゲシッボキッ

「グハッ。」

「毎回黙れと言ってるのを理解しろ。それに誰がお前のだって？お前何様だ、本気で殺すぞ。」

『ッ！』

おつとまた殺気が出てたようだ。こういう話題になるとつい殺気が出てしまうな。

「最後に変態か。この世の有害物質。早く死んでほしい。」

「ウゲッ。」

「……また、予想はついてましたけどきついことを。やはりよっぽど嫌ってるようですね。」

そう言えばこいつは俺の過去を少し知ってたな。だから俺の変態が嫌いな理由も予想がついてるんだろう。

「当然だ。」

「なるほど、ありがとうございましたわ。これで次の記事ができますわ。題して、新たな生徒会メンバーあらわる。彼の語る生徒会の実態とは！ですわ。」

「口止めたことは記事にするなよ。」

「分かってますわ。私も命は惜しいですもの。」

別に本人の命は奪わないが。

「では、失礼しますわ。」

ガラッ

「バ会長、用はこれだけだな。終わったなら帰らせてもらっ
ガッ

「あ、ちょ…。」

何か言ってるような気もしたが、まあどうでもいいか。

鍵side

「帰りましたね。」

「呼び止めて何を言うつもりだったの？」

「いやただ反射的に。」

ただ声が出ただけのようだ。

「それより思ってたより黒井のこと分かりませんでしたね。」

「分かったのは頭がいいってことかしら。」

「真冬もびっくりしました。」

「ああ、同じクラスだったのに知らなかったぜ。」

「俺もだ。」

「後、凶夜がこの生徒会のことどう思ってるかよく分かったわ。」

「会長さん、結構ボロボロに言われてたもんな。」

「つたく、私の偉大さが分かってないわ。」

「…」

誰も何も言わなかった。

「ちょ、ちよつと黙らないでよ。」

「いや、その通りだな。会長さんは偉大だもんな。」

「そうですね。」

みんな会長の機嫌を損ねないようにしていた。

「予想通りだったが真冬の評価は高かったな。」

「えっ、そっそんなことありませんよ。」

「真冬ちゃんの評価が低かったら私達どん底な気が。」

「えっと、真冬達は趣味が同じですから。」

「でもそれだけじゃない気がするのよね。それに深夏はともかく他の私達は個人的に嫌われてる部分があるから。」

「確かに深夏と真冬ちゃん以外はいい評価じゃありませんでしたね。」

知弦さんはドSってだけだったな。黒井は椎名姉妹が好きなんだろうか。いや、真冬ちゃんに対してはともかく深夏に対してはなさそうだな。

「そういえば、鍵が俺の真冬って言ってた時だいぶ怒ってたな。」

「あの時は怖かったです。」

「確かにあの殺気には驚いたわ。」

「やっぱりあいつは真冬ちゃんに気が。」

許せん。

「そっそんな訳ありませんよ。」

「そうよ、真冬ちゃんに凶夜なんて釣り合わないわ。真冬ちゃんがかわいそうよ。」

「あらあら、アカちゃんつたらずいぶん凶夜を嫌ってるのね。」

「そうよ、私をバカにして。」

「でも、黒井先輩が言ってることも事実な気が…」

「何か言った、真冬ちゃん。」

「なっなんでもありません。」

真冬ちゃん、今のが会長に聞こえてたら危なかったぞ。

「新聞部の部長さんとも仲が良さそうでした。」

「そっといえばそうね。リリシアもゲームが好きなのかしら。」

「会長、それは違うと思います。」

「何か彼なりの基準があるのかしらね。」

「でも、もし真冬と話してくれるのが趣味が同じだけなのだとしたら少し悲しいです。」

確かにそれだけだと悲しいだろう。でも、

「大丈夫よ真冬ちゃん。それだけとしたら他にも仲のいい人がもう少しいるはずだから。でも彼が他の人と話してるのは見たことはないからそれだけじゃないのよ。」

「そうですね。なら安心しました。」

やっぱり真冬ちゃんは凶夜のこととは嫌ってはないようだ。まあ、あいつは真冬ちゃんにはやさしいからな。やっぱり狙って…、いやまさかな。その後は凶夜のことやいつもの雑談をして過ごした。

インタビュー（後書き）

凶夜の生徒会の個人的な評価が出ました。

知弦と深夏はあまり話してないのでまだ評価が曖昧でした。

凶夜は気に入った人としか話さないから日常会話がやりずらいです。
もう一人ぐらい話せる人を増やそうか考え中です。

ではまた次回。

怒られ探られ（前書き）

ネタがなくて非常に困ってきました。
今回は知弦が出番多めになるかな。

それではいつも通り駄文ですがどうぞ。

怒られ探られ

- - 生徒会室 - -

「ちよつと凶夜聞いてるの！」

ピコピコ

「おいおい会長さん少し落ちつけよ。」

「これが落ち着ける訳ないでしょ！」

さつきからバ会長が騒いでいる。どうやらこの前のインタビューの記事が気に食わなかったらしい。周りも少し落ちつけようとしているが、さつきからほとんど効果がない。

「凶夜、悪いけど少しアカちゃんの話を聞いてもらえないかしら。そうしないと落ち着かなさそうなの。」

「何で俺がバ会長を落ち着けるのに協力しないとダメなんですか。」

「はあ、それはあなたのインタビューのときの発言のせいでアカちゃんが怒ってるからでしょ。」

リリシアは俺のこの生徒会が遊んだりしていると聞いた俺の発言を見事に記事にした。それを見つけたバ会長が起こっているのだ。だが、ほとんど事実なので他のほとんどのメンバーはバ会長のように怒ってはいない。せいぜい変態がバ会長の味方して怒ってるくらいだ。

「事実を言っただけだ。」

「頼むぜ凶夜、これじゃあ当分落ち着きそうにないんだ。」

「黒井先輩、真冬からお願いします。」

「バ会長の相手をするほど暇じゃないんだ。」

何しろ椎名妹から借りた3本目のゲームも終盤に近づいている。一気にクリアしたいところだ。

「あんた暇人じゃない。いつもゲームするか寝てるんだから。来ない日もあるし。」

あんたほどの暇人もいないと思うぜ。口に出したりはしないが。

「分かりました。話を聞いてくれたら真冬、。。。のレアアイテムをひとつプレゼントします。」

「よし、話を聞こう。」

「それで聞くのかよ！」

何を言う。レアアイテムだぞ。話を聞くだけでレアアイテムをゲットできるなら安いもんだ。あのネトゲはレアアイテムのゲット率がありえないほど少ないからな。

「それで、話って何だ。」

「だから、あんたのせいでこの生徒会の評価が下がったじゃない。先生たちにも注意されたわよ。」

「事実を言われて怒るなんて、ほんと見た目通りガキだな。」

「だれがガキよ。」

お前だよ。

「だが、あの記事は少し言いすぎだ。あそこまで俺たちは遊んでない。」

「なあ、椎名妹。レアアイテム貰うには変態の話も聞かなきゃダメか。変態の声なんか聞きたくないんだが。」

「できればお願いします。」

「だが、それだとこの前言った条件を破ることになるぞ。」

「レアアイテムをもう2つ付けるので。」

「いいだろう。例外として認めよう。」

「だからそれでいいのかよ！」

レアアイテムが2つも貰えるんだ。死ぬほど嫌だが、我慢しよう。マジ嫌だが。ところで今日は椎名姉はつつこみが多いな。

「っで、何だっけ。ああ記事の話か。記事については新聞部に言え。俺が作ったわけじゃない。」

「でも、ほとんどお前が言ったことだろ。」

「じゃあ、俺がここに来てからお前らが俺の前で仕事をしたか？俺は最後まで残ってないから、その変態がやってる仕事すら見たことないぞ。」

「ちゃんと会議してたじゃない。」

「ガキの思いつきの会議ごっこなんか仕事とは言えない。」

「何ですってっ！」

「あの会議の結果どうなった。何かしたのか。お前の自己満で終わったんじゃないのか。」

「それは、してないけど。」

「ほら見る。」

「なっ、何もしない結果になったのよ。」

「はっ、それは最初から何もしないのと似たようなもんだ。少なくとも他の生徒には何もしてもらえない結果になった会議などどうでもいい。」

「うつつ。」

「会長……。お前は俺達を困らせて何をしたいんだ。そんなことばかりするなら生徒会から出て行ってくれ！」

「困る？それはお前達がバレたら困ることをしていたからだろ。俺は事実を言っただけだ。それに出て行くかどうかは俺が決める。お前には関係ない。」

「それでも、俺達は今まで楽しくやってたんだ。」

「前にも言っただよな。楽しくやりたいならここでするな。別の所へ行け。」

「たたく、ついこの前言ったばかりだというのに。」

「話はそれだけか、ならもう終わりだ。記事にされるのが嫌ならちゃんと仕事をするんだな。まあガキには無理だろうがな。」

「うつつ、ひっく。」

別に泣くほど言っただつもりもないんだが。これで泣くってどんだけ甘やかされてたんだか。

「よしよし。凶夜、私とも少し話してほしいんだけど。ちょっとついてきてもらえないかしら。」

「っち、はいはい分りましたよ。」

目が逆らったら何かされそうな気がした。本気で対応すれば脅威に

もならないと思うが面倒だからついていくことにした。

――屋上――

「つで、話って何ですか。」

「前から思ってたけど別に敬語じゃなくてもいいわよ。何か無理してそうだし。」

ほんとに敬える人になら自然に敬語は使えるがそれ以外は苦手だ。最近ではバイト先の店長ぐらいか。

「それじゃあ遠慮なく。それで用件は。」

「そうね、1つはあまりアカちゃんをいじめないでほしいの。」

「いじめてるつもりはない。」

「確かにそうかもしれないけど、現にアカちゃんは泣いてるもの。」

「それはあいつがガキなだけだろ。」

「それがアカちゃんの魅力じゃない。」

「俺はそうは思わん。」

相変わらず危ない趣味だ。

「確かに泣いてるアカちゃんもかわいいけどね。」

「俺はあんたの趣味がわからん。」

「私はかわいいものが好きなだけよ。」

「別に俺から相手をしてるわけじゃない。あいつが関わってこなければ話すことなどない。」

あんなガキに興味なんかないしな。

「そう、じゃあアカちゃんにも言っておかなければね。」

案外あっさり引いたな。こいつの目的は何だ。あの生徒会の中で一番読めないからな。

「じゃあ、2つ目。何で生徒会に入ったの。」

「前にも言っただろ。内申点のためだ。」

「ほんとにそれだけ？」

「当たり前だそれ以外にあんな所に入る必要はない。」

「じゃあ、停学騒ぎとか何回か起こしてるのにどうして今更内申点

を気にするの？内申点が大事なら停学になんかならないようにすると思うけど。」

こいつやりずれ。迂闊に話すといろんな情報持つて行かれそうだ。停学になってるからこそ内申点を上げときたいんだ。」

「停学にならないようにする選択肢はないの？」

「ない。」

「こっこれはまたあつさり。」

すぐに言うとし少し啞然としていた。こんなにすぐに答えを返すとは思ってなかったのだろう。この人のこんな顔は珍しい気がする。

「じゃあ最後に、あなたは生徒会で何をするつもり？」

「別に何も。俺は内申点を上げるために生徒会にいるだけだ。それ以外のことをする気なんかない。」

「そう。分ったわ。時間をとらせて悪かったわね。」

この質問に対してはあつさりだったな。

「結局あんたは何がしたかったんだ？さっきからの質問の答えのほとんとは分かってたはずだぞ。」

「ちよつと確認したくて。」

「俺のどう答えるかか？それとも、生徒会に害が出るかどうかの確認か？」

こいつも変態のように生徒会が大事みたいだから可能性としては後者のほうが高いはずだ。こいつはずつと俺の目を見ながら様子を探ってたみたいだな。

「勘がいいのね。後者よ。」

「やはりか。つで確認した答えを聞いてみても。」

「ええ、あなたがいることで生徒会に害が出るかもしれない。でもあなたは害を与えにきてるわけではないわ。誰かに何かを言われたときだけ自分の思ったことを答える。それが時として生徒会に害なただけ。もし、あなたが生徒会に害を与えるために来てたりしたらこっちにも考えがあつたけど、そうじゃないみたいね。」

「当たり前だ。あんな生徒会手を出すまでもない。興味がないしな。」

」

「ふう、あなた相手に探るのは疲れるわ。あなたも途中からは分かってたんじゃないかしら。」

「うつすらな。」

「疲れるのはこっちも同じだ。もしかしたら余計な情報も与えたかもしれないが、まあ大丈夫だろう。」

「じゃあ戻らせてもらうぞ。」

「ええ、戻りましょう。」

――生徒会室――

「知弦、何を話してたの。」

「ちよつとした世間話よ、フフフ。」

「何かちよつと楽しそうですね。」

「あら、そんなことないわ。」

向こうではそんなことを話してるようだが、興味がないな。ゲームの続きでもするか。

…1時間後

さて、ちようど区切りもいいしこのくらいにするか。これなら今日中にはクリアできそうだな。

ガタッ

「あれ？先輩もう帰るんですか。」

「ああ、ゲームも一区切りついたしな。」

「そうですね。あつ先輩、今日の夜少し手伝ってもらっていいですか。どうしても一人じゃできない所があるので。レアアイテムもそのとき渡しますので。」

椎名妹ができないなんて珍しいな。

「分かった。じゃあ11時頃にな。」

「はい、分かりました。」

今日は9時にはバイトが終わるからそのくらいがちようどいいだろう。

「なあ、深夏。」

「どうした鍵。」

「ゲームの話のはずなのにまるで夜どこかで会うみたいな会話だな。」

「確かにな。」

「実際ネットゲで会ったが、そういうのは会うとは言わないのか？まあ、とりあえず、

バキッ

「人の会話に対して横でごちゃごちゃ言うな変態。」

「何か一回は殴らないといけない気がした。さて、帰るか。」

その日の夜もらったレアアイテムは幻級のレアアイテムだった。こいつどうやって手に入れたんだ。しかも3つすべて幻級だし。相変わらずすげえやつだ。そして椎名妹ができないと言ってた所はなかなか鬼畜だったが、他にも協力者を呼びなんとかクリアできた。

怒られ探られ（後書き）

知弦の評価が少し上がった。

凶夜はあまり興味がないようですが、知弦は少し興味を持ったようです。

少し知弦と話させてみました。

この二人が話すとおそらく探り合いになると思います。

それではまた次回。

エリス登場（前書き）

アニメ第8話のエリスが来る話です。

エリスと凶夜によって生徒会室がどう荒れるか。

では、駄文ですがどうぞ。

エリス登場

――廊下――

「凶夜、頼みごとがありますの。」

放課後生徒会室に行こうとしていたらリリシアに話しかけられた。

「どうした？」

「実は……」

リリシアの後ろから小さい子が出てきた。

「にいさま。」

「ああ、エリスか。」

「久しぶり、にいさま。」

そついうと抱きついてきた。

「あいかわらずエリスは凶夜になつてますのね。」

「ねえさまだついていつも家ではに……」

「ええええっと、今日はちょっとこの子の面倒を見てほしいんですの。」

何かエリスが言おうとしていたが、まあいいか。

「なぜだ。というかなぜエリスがいる。」

「エリス、にいさまに会いに来たの。」

「ということらしいの。」

「ふん。」

さて、どうするか。ただの子守だと面倒だがエリスはいろんな意味で面白いからな。

「まあいいぞ。」

「助かりますわ。」

「つで、録音とかはしてるのか。」

「当然ですわ。」

そこまで堂々と言うのもどうかと思うが、こいつなら当然か。

「エリスの録音したことを記事にするのはいいが、俺のバレたら問

題になるようなことは記事にするなよ。そしてそれについての音声は削除しろ。それが今日の条件だ。まあそんな発言しないと思うがな。」

「分かってますわ。もともとそうしようと思ってたのでそれが条件ならありがたいですわ。」

「よし、じゃあエリスと生徒会でも荒らしに行くか。」

「荒らしについて、相変わらずですわね。では頼みましたわ。」

リリシアは部室に戻って行った。

「じゃあ行くぞエリス。」

「はいっ！」

――生徒会室――

ガラッ

「遅かつ…。」

『っえ！』

メンバー全員が驚いていた。当然か。だが、今日はこいつが生徒会を荒らすということは分かってないだろう。エリスの場合は天然だが毒舌だからな。だからこそ気に入ってるのだからな。

「凶夜、とうとう誘拐を。」

「おい、バ会長。名誉棄損で訴えてもいいということだな。」

「めいよきそん？」

「はあ。」

「にいさま。この子は？」

この子と言ってる時点でこいつもバ会長を子供と見てるということだな。さすがはエリス。

「凶夜、ロリコンになってしまったのね。」

「あんたまで何言ってるんだ。」

小さいこといるだけでロリコンになるならこの世はロリコンだらけだ。

「ところで黒井先輩、この子は誰ですか？」

「こいつはリリシアの妹のエリスだ。つで、エリスこいつはバ会長だ。」

「誰がバ会長よ。私はここの生徒会長よ。それより何でリリシアの妹がここに居るのよ。」

「面倒見ると頼まれた。」

「お前がそういうことするなんて意外だな。」

「以外か。確かに俺も普通のガキなら面倒は見ないがな。ガキじゃなくても見ないが。」

「別にこいつは面白いからな。」

「にいさまに褒められた。」

「凶夜が人を褒めた。」

「こいつらが俺をどう見てるか大体分かってきた。まあいつものことくどうでもいいが。」

「じゃなくて、ここは生徒会室よ。子供の来るところじゃないわ。」

「にいさま、あの子自分も子供なのになんか言ってるよ。」

「ほんとだな。」

「子供じゃないわ。」

「アカちゃん、落ち着いて。」

「うゝ、じゃあ会議をするわ。今日は…。」

「にいさま、あの子偉そうだね。」

「私は偉いの。この中で一番偉いの。」

「小さいのに偉いだって。おもしろい。」

俺はお前の天然発言が面白い。

「エリスちゃん。会長が起こりそうだから静かにしようね。」

「つち、変態がしゃべりだした。おとなしくしとけばいいものを。こいつもエリスにボロボロにされるがいい。」

「にいさま。この人は？」

「変態。」

「誰が変態だ。俺はここのハーレムの主、杉崎鍵だ。」

「だからハーレムじゃなくて生徒会よ。」

今の発言って俺も入ってるんだろうか。あつ、想像したら鳥肌が。

「変態のおにいちゃんなんだ。」

「あゝこんな小さい子にまで変態と。エリスちゃん、せめて普通におにいちゃんと。」

「へゝ、変態はこんな小さい子におにいちゃんと呼ばせたいんだ。前から思ってたがロリコンだったんだな。」

「誰がロリコンじゃ。」

「エリス、怖い。」

「キー君、こんな小さな子をいじめるなんて最低よ。」

「杉崎ってロリコンだったんだ。」

「真冬は失望しました。」

「鍵、あまり近づくんじゃねえぞ。」

「だから、ちがゝゝゝゝう。」

ドカツ

「ぐつ。」

「黙れ変態。」

「にいさま、変態のおにいちゃんどうしたの。」

「さあ、病気じゃねえの。頭の。」

「そうなんだ。かわいそう。」

変態がかわいそう発言で落ち込んだ。頭がかわいそうって言われたもんだからな。ざまあ。

「にいさま、エリスとあそぼ。」

俺としてはもう少し荒らしてほしかったが。

「別にいいぞ。なにするんだ。」

「じゃあ、お医者さんごっこ。エリスがお医者さんにいさまが売り込みに来た人ね。」

「分かった。」

相変わらず配役がすさまじい。

「知弦さん。あの二人このままやらしといていいのか。会長さんはプルプルしてるし。」

「あの二人は面白そうだからこのままにしときましょう。アカちゃんは…、私かなだめとくわ。」

「でも、黒井先輩が小さな子の面倒を見るなんてほんとに意外です。」

「だよなあ。」

相変わらずごちゃごちゃ言ってるやがる。さて、お医者さんごっこだったか？という展開になるのやら。

「じゃあ始めるよ。ゴホン。あゝちみちみ、渡すものがあるんじゃないかね。」

「はい、実はこの…。」

『スト~~~~プ。』

全員からストップ発言が来た。まだほとんど始まってないのに。

「先輩、さすがに教育的にまずい気がします。」

「そうよ、あなたがその役をやると冗談にならない気がするわ。」

「じゃあ、あんたがやるか？」

「あら、それは面白そうね。」

「知弦さん。それはもっとまづくなりそうなんでやめてください。」

おい変態。それだと俺はその人よりも下ってことじゃねえか。心外だ。

「にいさま、どうする？」

「周りがうるさそうだし別のにするか。」

だが、その後も人形ごっこをやれば過激だとか、あやとりをやれば二人でギヤラクシーを作ったとこで、他のみんなが宇宙の神秘とか言ってる涙を流し始めたとか、全然二人で遊べなかった。んで今はにらめっこ中。

「ん~~~~。」

「…。」

「ん~~~~。」

「…。」

「ポッ。」

あつ赤くなつた。

「ねえ知弦。これっていつになつたら終わるのかしら。」

バ会長の機嫌も少し治つてたようだった。

「そうねえ、たぶん終わらないわよ。」

「これが杉崎だつたら通報するけど。した方がいいのかしら。」

「やめといたほうがいいぜ会長さん。」

「真冬もそう思います。」

にらめっこは結局決着がつかなかったのでやめた。俺が笑うことなどそうないからな。

「凶夜、そろそろ会議をしたいんだけど。」

いつもは俺がいなくてもやるクセに。

「にいさま行っちゃうの？」

「めんどいから却下。」

「じゃあエリスとこのまま遊ぶ。」

「ダメよ。ここは遊ぶところじゃないんだから。」

「うゝ、エリスねえさまから聞いているもん。会長さんいつも遊んでばっかで会議なんかしてないって。」

「ムカツ。」

「ちよつと会長落ち着いてください。」

「話さない杉崎。」

「相手は子どもなんですよ。」

「子供相手に何ムキになつてゐるんだか。しかも事実じゃねえか。」

「ほら、会長さんだつて遊んでるんじゃない。」

「だいたいここは子供の来るところじゃないんだから。」

「会長さんだつて子供のくせに。」

「誰が子供よ。こうなつたら生徒会長がすごいってところを見せてあげるんだから。」

その後バ会長は自分の体のことを自慢し始めた。

「ねえ、何がすごいかわエリス分かんない。」

普通理解できなくても流れとかそんなですごいとか言いそうだが、

俺とリリシアの影響で頭は並以上だからな、理解した上で分からないと言ってるのだろ。まあそんなこと知らないバ会長は、「ふっ、子供には私のすごさが理解できなかったようね。」とか言ってるが。

「そうなのにいさま。」

「いや、俺も何がすごいかわからないからな。お前が正しい。」

「やっぱりそうなんだ。あんなよく分かんないことを自慢げに言うなんて会長さんは頭悪いんだね。」

「知弦さん。あそこにもう一人の小さい黒井がいるような気が。」

「あら偶然ね。私もそう思うわ。」

勉強を教えたのは俺だが、この毒舌はこいつの素なんだがな。

「なっ何を言ってるの。会長は学校で一番頭がいいんだから。」
あつ墓穴掘った。

「へーそうなんだ。」

そして、

「アカちゃん、いいの?」

「もっもちろんよ。会長は頭がいいんだから。」

エリスにバ会長の頭の良さを見せることになった。

「分かったわ、じゃあ行くわね。794年に日本であったことは?」

「う。う。なくよ、なくよ...。」

「おお。」

「さすがの会長さんでもこれはいけるか。」

こいつらバカか。このバ会長がそんなこと分かるわけないだろ。

「あつ、鳴くよレーニン理想郷。」

「あ。」

「歴史が歪んだわね。」

「にいさま、今の正解?」

「全然。」

「ちよつと凶夜。」

「はあ、お前はあつてるとでも思ってるのか。エリス、このガキに

「答えを教えてやれ。」

「誰がガキよ。だいたいこんな小さな子に分かるわけが…。」

「鳴くようぐいす平安京だよねにいさま。」

「正解だ。」

『…』

全員が驚いているようだ。

「これはワザとよ。ちっ知弦、次。」

「じゃあ、1192年。」

「ん〜と、ん〜と。いい国、いい国。」

「そこまでは出てるんだよな。」

「あつ、いい国だったね邪馬台国。」

「ああつ。」

「どう、正解でしょ。」

「会長さん違うよ。1192年はいいい国作ろう鎌倉幕府だよ。」

「うう、こんな小さな子に教えられるなんて。」

「あつでも、いいハコ創ろう鎌倉幕府つてもエリス聞いたことあるよ。1185年。」

「1192年は教えたが1185年の方も知っていたか。えらいぞ。」

「

「えへへ〜。」

今の歴史教科書では1185年の方が採用してあるらしい。（本当かどうかは確認してないので分かりません。）

「バ会長のバカさが目立つことになったな。」

「れっ歴史は苦手なのよ。次、漢字行くわよ。」

「ねえ凶夜。」

紅葉先輩が小声で話しかけてきた。だいたい予想はできるが。

「どうした。」

「どうしてあの子あの年であんなこと知ってるの。」

「俺が以前に暇つぶしで教えた。リリシアから聞くと時々一人でもやったるみたいだな。」

毎日やった方が頭はよくなるが、まだ小さいから問題ないだろ。小さい頃は遊ぶのが大事だ。俺はそんなことしてる暇がなかったがな…。

「もしかして他の教科も。」

「少なくともあのバ会長よりはできると思うぞ。」

何しろあのバ会長の頭は小学生並だからな。よく進学できたなと思うぞ。

「とめた方がいいかしら。」

「聞くと思うか？」

「…無理ね。」

んっ漢字は椎名妹がやるんだ。

「さすがに漢字はやめといたほうが。」

「簡単のなら大丈夫。この子の年じゃどんな漢字も読めないから、私が勉強できるってはつきり分かるでしょ。」

さっき歴史でボロ負けしたのをこいつの頭でどう処理してるんだろうか。そして、簡単のなら大丈夫ってことは自分のことバカっとうとう認めたか？

「では、これを。」

流星

「り、る、うゝん。」

こんぐらいすぐに読めよ。自称頭のいいバ会長さんよ。

「ヒントは真冬が少し前に言いました。」

「分かった。ストーンストリーム。」

「なんか魔法みたいで素敵です。」

そんな漢字あるわけないだろ。それにそれをいつ椎名妹が言った。どこまでバカなんだこいつ。

「エリス。」

「はい、にいさま。さすが、だよね。」

「せっ正解です。」

椎名妹もエリスが答えるとは思ってなかったらしい。だからさっき

歴史で頭がいつて見たばかりだろうに。

「では次はこれです。」

五月蠅い

椎名妹、こいつが読めるわけないだろ。

「むむ。」

「ヒントは会長さんです。」

うわゝ、案外こいつも毒舌かも。

「私？あつ、何だそっか。」

「答えは？」

「全知全能。フフ。」

キモッ。しかもどの口が全知全能をほざいてるんだ。

「紅葉先輩。吐き気が。」

「あなたもほんとひどいわね。」

だが、あんな顔されてあんなこと言われたら当然だろ、と言いたい。

「せつ正解です。」

それでいいのか椎名妹。だが、ここにはエリスがいる。それで終わ

るわけがない。

「にいさまにいさま。これってうるさいじゃないの？」

言うと思つてたがよくそこまで頭が良くなつたものだ。物覚えは良

かつたがここまでとは。

「エリスが正解だ。椎名妹、エリスに嘘を教えるな。」

「すつすみません。つい。」

「よかつた。会長さんはうるさいし、それに全知全能なわけないも

んね。」

「なっなんですつてゝ。」

「黙れば会長。」

「何よ、だつてこの子が。」

「何言つてるんだ。俺だつて吐き気がしたぞ。どの口が全知全能を

言ってるんだ。クスが。」

「うつ。」

「今まで出てきた問題だって、すべてお前は不正解。ついでにエリスはすべて正解。それで全知全能を語るなんてどれだけ全知全能のレベルが低いんだ。それだどこににいる全員が全知全能かよ。自分の低能レベルを知れ、クソガキ。」

「うつつひつく。知弦。」

「はっ、すぐ同級生に泣きつくとかどこまでガキなんだか。」

「凶夜、そこまでにしときなさい。」

「エリスの勝ち。」

「よかったな。それにしても何でこんなことまで知ってたんだ？俺は教えてないぞ。」

「だってにいさまが勉強教えてくれたとき楽しかったから勉強好きなの。それにたくさん勉強してくれれば褒めてくれると思って。」

「よしよし、えらいぞ。」

「えへへ、エリスにいさま好き。」

ピシッ

おっ、空気が凍った。

「黒井。俺よりお前の方がよっぽどロリコ。」

ドガッバキッポコッ

「グハッ。」

「黙れ変態。好きって言われたら変態か。アホじゃねえのか。」

「にいさま、エリスのこと嫌い？」

「別に、少なくともこのバ会長や変態よりは好きだぞ。」

「えへへ。でもその二人のことにいさま嫌ってるから基準が分かんない。」

こいつ、こんなところまで頭が良くなりやがった。大きくなったら別の意味で苦労しそうだ。

「あゝはいはい。好きだぞエリス。」

「えへへ。」

「凶夜、やっぱりお前。」

「ちよっと黙ろうか椎名姉。」

「おっおう。」

「深夏がビビってる。」

「まさか、あの深夏が。」

「さて、エリスそろそろ時間だ。帰るぞ。」

「うん。じゃあねバカの会長さんと変態のおにいちゃんと、ええつと、その他のおねえちゃん。」

ピシッ

あつ、また空気が凍った。そう言えば他のメンバーの紹介してなかったな。まあいいや。

「行くぞ。」

「うん。」

知弦side

「あつあんな小さな子にバカつて。バカつて言われた。」

「変態つて。変態つて…。」

『その他…。』

あらあら、みんな固まっちゃったわね。でも、今日の様子を見てると凶夜つて案外面倒見よさそうね。アカちゃんをいじめるところは頂けないけど、やっぱり面白そうな子ね。フフフ。エリスちゃんや真冬ちゃん、アカちゃんやキー君への態度からすると、気に入った相手にはやさしいけどその他はどうでもいいってところかしら。たぶん私はその他つてところでしょうね。さて、今後生徒会はどうなるのかしら。とりあえず今はみんなをどうにかしなくちゃね。

知弦side end

- - 新聞部部室 - -

「リリシア、エリスを連れてきたぞ。」

「あら、ご苦労ですわ。」

「別に、エリスは面倒をかけるようなやつじゃないからな。」

「えへへ。エリス褒められた〜。」

「良かったですわね。ところで何か記事になりそうな面白いことはありました？」

「ああ、録音されてると思うが、エリスとバ会長が勉強で勝負してエリスが勝ったことだな。」

「あらあら、次の記事は、生徒会長子供に勉強で敗北！に決まりですわね。」

「ふっ、楽しみにしてるぞ。じゃあな。」

「ええ、それではまた。」

「にいさま、またね。」

その後リリシアの出した記事でバ会長がキレたのは言うまでもない。

エリス登場（後書き）

エリスは杉崎じゃなくて凶夜に懐かせました。
そしてエリスは天才になってしまいました。

エリスは今後も出していきたいと思ってます。

今後もアニメの話とかを使っていくと思います。

流れが一緒なだけで無茶苦茶にする可能性は大ですが。

それではまた次回。

暑い（前書き）

最初だけアニメ第5話です。

文章に区切りをつけたほうが見やすくなるんじゃないかという意見をもらいましたので、区切りをつけてみました。

他にも何かありましたら感想のところにお願いします。

それではいつも通り駄文ですがどうぞ。

暑い

- - 生徒会室 - -

その日、俺が紗鳥に頼まれた用事を終わらせ、少し遅れて生徒会室に行く、

「ぎゃ~~~~~」。

悲鳴と、

「言っただしょ、マスクを外そうとすると激痛が走るツボをついたわよって。」

それを見ている変質者がいた。

「誰が変質者よ。」

口に出していたらしい。

「お前ら以外に誰がいる。こんなところでそろって水着姿なんて、ただの変質者だろ。」

なぜか変態以外の奴らは水着になっていた。そして、変態はアイマスクが付けられていた。

「あらあら、遅かったから今日は来ないと思ってたのに。」

「凶夜、あんたも杉崎みたいにアイマスクをつけなさい。」

こいつらは今日は俺が来ないと思って変態にだけアイマスクをつけて水着姿でいたようだ。

「却下。何が面白くてアイマスクなんかつけないといけないんだ。」

「私達が水着姿なんだから当然でしょ。」

何が当然か分らない。自分たちだけの部屋でもなくせに、勝手に水着姿になって俺にアイマスクをつけろだと？

「勝手にそんな恰好をして何を言っている。だいたい、なぜよりもよってお前が言うんだ？」

「よりもよって何よ。」

本気で分かってないらしい。

「他の奴らと違ってガキのお前の水着姿何か見てもうれしくも何ともない。こっちから願い下げだ。」

「何ですって。」

「ガキはおとなしく幼稚園のプールにでも入ってろ。」

ちなみに他の奴らの水着姿も何とも思わない。前にプール監視員のバイトをしていたことがあるが、そんなこと考えてたら勤まらないからな。

「入らないわよっ！借りに私にはそれでもこんな女子が水着になっ

てるところに男子がいるなんてあつたらいけないわ。」

「だったらお前らが着換えろ。」

「でもよく、制服だと暑いんだよ。」

「冷房はどうした。」

「壊れたの。直しに来れるのは明日だそうよ。」

なるほど。それで扇風機を出してきて、それでも暑いから水着姿になつてゐるわけか。うん、意味分らん。水着姿になる意味分らん。

「その恰好でいるのは勝手だがアイマスクはつけんぞ。」

「ダメよ。」

「なら着換えろつって言つてんだよ。お前らの都合で出て行けだとふざけるな。どこまで自由にやれば気が済むんだクソガキ。」

ほんとこいつだと話にならん。何回同じことを言えはいんだ。

「アカちゃんそこまでよ。」

「何だよ。」

「何でも何も、勝手に水着姿になつてるのは私達だもの。もし、このことを先生方に言われたらこの生徒会はおそらく解散よ。」

まあ、そうなるだろうな。興味ないけど。っていうか、他の生徒会

になって仕事を普通にやるメンバーになったらやめないといけなくなるからむしろ却下だ。内申点が落ちてしまう。

「でも…、深夏や真冬ちゃんはそれでいいのっ！」

「別に鍵みたいになるわけないだろうしいんじゃないか。」

「真冬もそう思います。確かに恥ずかしいですけど。」

「うっ、分かったわよ。その変わり、こっちを見るのは禁止よ。」

「興味ないって言ってるだろ、自意識過剰のクソガキが。借りに見たとしてもそんな恰好しているお前らの自業自得だ。」

男がいると分かっているのにそんな恰好をするって、下手すれば見にくれと言ってるようなもんだと思うが。

「何で黒井はよくて俺はダメなんだ。せつかく俺のハーレム達の水着姿になってというのに。」

ドカッポコッ

「うぐぐ。」

いきなり目の前で叫ばれてうざかったから殴ってしまった。

「だから、ハーレムじゃなくて生徒会。」

「あっ、アカちゃんポロリ。」

「えっ、何だ…ギャーーーー。」

アイマスクを取ろうとして激痛が走ったようだ。あんなガキのを見て何が嬉しいんだか。

「うっ、分かりました。俺も水着になります。裸同士の付き合いに目隠しなんかありません。」

お前の水着姿何か見たい奴などいないと知れ。

「杉崎が本棚に熱く語っている。」

「目隠しして、正解だったな。」

「杉崎先輩には申し訳ないですけど、男の人に見られるのは恥ずかしいですから。」

だったらそんな恰好するなよ。それに俺も男だ。

「今日一日杉崎はそれていること。」

「嫌だ、ギャーーーー。」

「意外と面白いな。」

「でしょ。」

ほんとバカばつかだ。自分たちで勝手に水着になり、見られるのを拒否する。どこまで自分勝手なんだか。俺に関係ないからどうでもいいが。にしても熱いな、これだとゲームに集中できない。

ガタッ

「どこに行くんですか？」

「熱いから涼しくなるもの持ってくる。」

ガラッ

鍵 side

くっ、黒井のやつみんなの水着が見放題なんてうらやましい。

「にしても何を取りに行っただけでしょう。」

「さあ、何でしょう。」

「うちわとかか？」

「それならここにもあるわよ。」

「食べ物ということも。」

「アイス食べたい。」

「前まではここにも少しはあったんだけどね。」

そう、この前までは冷蔵庫もここにはあったのだ。なぜあるかだつて？俺にも分からんっ！だが、確かにあったのだ。だが、この前壊れてしまった。さすがに冷蔵庫を買う金はないから新しいのはいない。あれさえあればもう少し過ごしやすいかったのだが。それよりも今

んなどんな格好をしてるんだ〜〜。

「そろそろこれ外してくださいよ〜。」

「ダメよ。」

「まったくお前は黙ってることはできねえのか。」

「俺最近静かだよ。黒井がいるとき割と静かだよ。」

「それ以外で騒ぎまくってるじゃねえか。」

「杉崎先輩は黒井先輩がいる時に騒ぐと怒られますからね。」

くく、あいつが来てから殴られてはっかだからな。体が危険を察知して少し静かになってしまっただよ。こんなことではハーレムの主失格だ。だが、あまり怒らすとこの生徒会がなくなりかけない。くつ、俺はどうすれば。

鍵side end

案外あっさり見つかったな。扇風機はあれ一台とだと俺には当たらないから新しいのを新聞部から借りてきた。ついでにアイスやかき氷を食ってたから少しもらってきた。この前の記事が好評だったのか機嫌がよかった。

ガラッ

「凶夜、何を持ってきたの？それは扇風機見ただけ。後、クーラーボックス？」

「明らかにその扇風機だけだと俺のところには風が来ないからな。」

ちなみに俺の席は椎名姉と椎名妹の間だ。

「そのクーラーボックスは何だ？」

「アイスやかき氷。」

「アイス、頂戴。」

バ会長が目を輝かせてきた。だが、

「却下。」

「何だよ。」

「何でおれを追い出そうとしたやつにそんなことしなくてはならない。」

「うぐつ。」

そう言うと俺は自分の席に戻った。もちろん扇風機は俺にだけ当たるようにした。なぜならもとの扇風機は他の奴らには当たるようになっていたからだ。まっ俺が来ないと思ってたみたいだし当然か。

「何か黒井先輩の所だけ涼しそうです。」

「そうね。扇風機を一人で使って、その上アイスを食べてるからそ

「見えるわね。」

「うう。う。」

「はいはい、アカちゃん泣かないの。」

「アイス。」

「そうねえ。凶夜、アカちゃんにひとつもらえないかしら。」

「却下。」

「だって、アカちゃん。」

俺が渡さないことは予想済みだったみたいだ。あれ？俺はたから見
たからいじめっ子？まっ、いいか。

「先輩、真冬もほしいです。」

「ん。」

そう言っ一本やると、

「えっ、いいんですか。」

なぜか驚いていた。自分から欲しいと言っというて。

「いらんのか。」

「いえ、いります。」

「ちょっと、何で私がダメで真冬ちゃんはいいのよ。」

「逆に聞くがお前は椎名妹と同じ扱いがされってるのか。」

「私は会長よ。」

「っで。」

「会長は一番偉いの。だからその会長命令は絶対なの。」

「勝手に言ってる。」

前から思ってたが、こいつは将来生きていけるのだろうか。どこにも就職できないだろ。そこにいる変態か紅葉先輩が養う以外に生きる道が見つからねえ。どこに行っても私は偉いのよ、とか言うてそう。

「凶夜、私や深夏は貰えるのかしら。」

「却下だ。椎名妹以外やる意味がない。」

「あら、残念。」

また予想済みの顔だ。予想がつかうなら言わないでほしい。答えるのが面倒だから。

「真冬いいなあ。」

「真冬、これ食べていいんでしょうか。」

他の奴らが貰えないのに自分だけ食べていいか悩んでるようだ。もうあいつにやった物だからどうしようが関係ないけどな。

「気にするな。食いたいんだろ。お姉ちゃん達は気にしないでいいから。」

「分かりました。それではいただきます。」

椎名姉の説得で食べることにしたようだ。

「知弦や深夏はそれでいいの。」

「貰えないのは残念だが、もともとあいつのだしな。」

「そうね、それに私は最初から彼が気に入っている真冬ちゃん以外は無理だと思ってたし。」

「うっ…。いいなあ、真冬ちゃん。」

ガラッ

「ふう。」

「あれ、真儀瑠先生どうしたんですか？」

「いや、ちょっと面倒な仕事を頼まれそうになったから逃げてきた。」

相変わらず不真面目な奴だ。

「真儀瑠先生、少しは仕事をしてくださいよ。」

「無理。おっ、いいもん食ってるな、くれ。」

「ん。」

どうせ拒否っても食う癖に。拒否る気はないが。それにしてもこいつら水着姿にはスルーだったな、恐るべし。

「先生の言うことは聞くのね。」

向こうでそう言っていた。紗鳥以外のやつだったらやる気はないがな。

「ん、これは新聞部にあつたやつだな。」

なぜ分かる。

「よく分かったな。」

「この前行った時に食べたからな。」

100%勝手に食ったんだろうな。どんまいリリース。

「さて、私は奥で寝てるから起こすなよ。」

そう言うと奥へ入って行った。この暑さでも平気で寝れるあいつがうらやましい。さて、そろそろゲームでもやるかな。

…数十分後

「ねえ知弦。今なら食べないかしら。」

「そこまで食べたいの。」

「だって、暑いんだもん。」

「やめといたほうがいいぜ、絶対ばれるから。」

「うう。でも…。」

「アカちゃんがそう思つのも無理ないけど、無理よ。」

「わが妹ながら恐ろしいぜ。」

「何で真冬ちゃんばかり。」

向こうでそう話していた。俺もまさかここまでやるとは思わなかった。

「もぐもぐ。」

俺がゲームをやってる間何回かクーラーボックスが開けられた。椎名妹だから気にしなかったが数十分で5本以上は食われた。腹を壊したりはしないんだろうか。恐るべし、椎名妹。

パカッ

ボタン

ビリッ

「もぐもぐ。おいしいです。」

まったくの遠慮なしだ。

暑い（後書き）

前書きでも書きましたが区切りをつけました。

他にも気づいたところやアドバイス、そしてこういう話が見たいとかがあれば感想のところをお願いします。

近いうちにリリシアとの出会いや凶夜の過去の話も書かなくちゃと思ってるけど、どう書こうか悩み中。

それではまた次回。

???登場（前書き）

新キャラが登場します。

???登場

- 校庭 -

???side

ふふふ、キヨウちゃんに内緒で学校に来ちゃった。きっと驚くわよ。

???side end

- 生徒会室 -

ガバツ

キヨロキヨロ

「えっと、どうしたんですか黒井先輩。」

なんだ今の感じは。何か嫌な予感が。

「いや、ちょっと変な気配を感じただけだ。」

「気配？あたしには強いものの気配など感じなかったけど。」

強いものって、バトルマニアかこいつ。あ、バトルマニアか。

「気のせいならそれでいいが。」

「ちょっと、今会議中なんだけど。」

「あつそ、勝手にやつてろ。」

何か寝れる気がしないからゲームでもやるか。

「あんたも起きてるなら会議に参加しなさい。」

「却下。」

「却下じゃない。会長命令よ。だいたい凶夜は不真面目過ぎるのよ。もつとちゃんとしてもらわなくちゃ。」

「黙れ。普段不真面目なお前に言われたくない。」

「私のどこが不真面目だつて言うのよ。」

「はあ。」

あれでいつも真面目だったとでも言いたいのだろうか。

「何よそのため息は。」

「別に。」

何を言っても無駄か。

「アカちゃん、続きをしましょ。」

「でも…。」

「いいのよ。別に邪魔をされるわけじゃないんだから。」

「分かったわよ。」

さて、ゲームゲーム。

- - 廊下 - -

??? side

ふう、結構でかい校舎ね。迷子にまっちゃいそう。あれ？私の目的地ってどこだろう。キョウちゃんのいる場所だから…、そうそう、生徒会に入ってたって言ってたわね。じゃあ生徒会室に行けばいいのよね。あ、あれは、

「さっちゃん。」

「なっ、誰だ！」

あれ、気づいてないみたい。周りの子たちが驚いてる。

「さっちゃん、私よ私。」

「あっあなたは。なにをしてるんですか。」

「ちょっとキョウちゃんに会いに来ちゃった。」

「来ちゃったって…。」

困らせちゃったかしら。

「まあ、来たものは仕方ありません。凶夜は生徒会室にいますよ。」

「あつ、やっぱりそうなんだ。」

目的地も改めて分かったし、これ以上は迷惑になるわね。向こうはまだ仕事中だし。

「じゃあまたね。」

「ちょ、ちょっと。」

「ん？何？」

「生徒会室がどこにあるか分かるんですか？」

「ん、分かんない。」

「やっぱり。ほんとには私が連れていきたいんですが、これから職員会議があるので他の誰かに案内を。」

「別にいいわよ。」

「ダメです。あなたはどこに行くのか分からないんですから。」

「ぶ。」

「そんな顔してもダメです。おつ、藤堂！ちょっと。」

「あら、先生。どうしました。」

「あらあら、かわいい子。」

「ちょっとこの人を生徒会室に連れて行ってほしいんだ。私はこれから職員会議があるのでな。」

「分かりましたわ。では行きましょう。」

「うん、お願いね。またね、さっちゃん。」

「さっちゃん？」

「藤堂。言ってくれるな。」

「何やらありそうな気がします、分りましたわ。では。」

これで生徒会室までちゃんと行けるわね。驚いたキョウちゃんの顔、楽しみだな。

??? side end

- - 生徒会室 - -

鍵side

「だから、もつと生徒会としての新しい活動をするべきなのよ。」

今日もいつも通り俺のハーレム達と雑談を入れた会議をしていた。議題はこの生徒会ができたところにもやっていた、新しい活動についてだ。なぜいまさら？、とも思うが会長のことだ、昨日でも思い出したんだろう。

「というわけで…、ちょっと杉崎聞してる。」

「ええ、聞いてますよ。会長はかわいいってことですね。」

「そそそ、そんなこと言っただけいい。」

赤くなつて、今日も会長はかわいいな。

「恥ずかしがつてるアカちゃん、かわいいわ。」

知弦さんもうれしそうだな。やっぱり俺のハーレム達は最高だ。

ガラッ

「失礼しますわ。」

おや、リリシアさんが来たようだ。今日は取材とかはなかったはずだが。

「何の用よりリシア。っていうかノックぐらいしなさい。」

「あらすみませんわ、おほほほ。今日は生徒会室に用があるって方を連れて来ましたの。」

「しつれいします。」

そこにいたのは、

「美少女キタ~~~~~」。

「わっ杉崎うるさい。」

「あつすみません。」

俺としたことが興奮してしまった。リリシアさんの後に来たのは、ここにいる俺のハーレムメンバーに負けず劣らずの美少女だった。身長は会長より少し高めで、髪は腰まである黒髪。まだ幼さの残っている顔立ち。まさに美少女。誰に用があるんだ。まさか俺！いつの間にフラグを立ててしまったんだ。やべー興奮してきた。人は第一印象が大事だからな。ここでしっかりしとかなくては。

「先ほどは失礼しました。俺はこのハーレムの主の杉崎鍵です。お名前を聞いてもよろしいでしょうか。」

そう言つて手を握ろうとしたら。

ドカツバキッボコツベキッグシャツボキッ

「グハッ、ウツ。」

「何かいつもより協力ですね。」

「そうね、いつもの数倍はありそうね。」

なぜ俺が。

「何しやがる！」

今日はまだ何もしてないはずだ。

「何しやがるだと。てめえ誰にさわるうとしてやがる。」

「今日の黒井先輩いつもより怖いです。」

確かにいつもより強力だった。まさかこいつの知り合いか。

「キョウちゃ~~~~ん。」

『キョウちゃん!』

キョウちゃんって、まさか黒井のことか。まさか、こいつの彼女。

「あんたもこんなところで何してるんだ、母さん!」

『母さん!』

まさか、この美少女が黒井の母親だと…。そんな、バカな。

鍵side end

いや、リリースの後に現れたときはマジびびった。まさかこんなところ来るとは思わなかった。

「せつ先輩。」

「なんだ椎名妹。」

「聞き違いでしょうか。今、母さんって。」

「聞き違いじゃない。俺の母親だ。」

「どうもはじめまして。キョウちゃんの母の黒井優子です。」

『え~~~~~~~~。』

まったく、うるせえやつらだ。

「ええ、ちよつと待ってよ。この人が凶夜の母親。ありえないわ。」

「そうだが、似てるところがまったくねえ。」

「ありえないわ。まさか突然変異。それとも他の要因が。」

「嘘だ。こんな美少女があゝの黒井の母親なんて、嘘だ。」

紅葉先輩まで動揺してるよ。確かに見た目はまったく似てねえが。母さんの性格は…、

ドコッ

「うぐつ。」

バタ

「杉崎！」

「キョウちゃんをバカにしたのは誰かしら。潰すわよ。」

自分の大切なものをバカにされたらすぐに殴る。見た目で騙されただめの見本だな。本気でやりあっても俺は勝てる自信はない。それほど母さんは強い。普段は気絶するほどの威力で殴ったりはしないが今回は、

「それと、さつきハーレムとか言ったかしら。寝言は寝て言いなさい、このクソガキが！」

ハーレムといったのが原因だ。俺と同じでそういうのを嫌ってるかな。若干性格が変わってしまっ。

「黒井先輩のお母さんです。」

「そうね。」

「ああ。」

ああ、今の見て俺の母親だと認めるんだ。ちなみにバ会長は、

ツンツン

「杉崎。大丈夫。」

ツンツン

いたずらをしながら変態の様子を見ている。他のメンバーは知らない。これは本当に変態のこと好きなんじゃねえのか。

「キョウウちゃ。ん。」

「ん？うわっぷ。」

いきなり飛びついてくるとは思わなかった。

「びっくりした。びっくりしたよね。さつきそいう顔してたもん。」

「

見られてたか。他のやつらは気づかなかったが、俺の表情は固まっていたはずだもんな。

「あ、ああ驚いた。」

「やった〜。サプライズせいこ〜う。」

怒ったときは誰よりも恐ろしいが、それ以外はほんと子供みたいだよな、見た目も。

「あの〜、わたくしはどうしたらいいのでしょうか。帰ってもいいのかしら。」

おお、リリシアのこと忘れてた。

「連れてきてくれてすまねえなリリシア。」

「あ〜、あなたがりっちゃんなんだ。キョウちゃんから何回か聞いてるわよ。」

「りっちゃん？えっ、ああどうも。」

「リリシア、母さんの呼び方は諦めが肝心だ。」

「わ、分かりましたわ。」

「今後もキョウちゃんをお願いね。」

「はっはい、こちらこそ。ではわたくしはこれで。」

「うん、ばいばい。」

ガラッ

リリシアは帰ったようだ。ってか自己紹介ぐらいここに来る前にしとけよ。

「それで、今日は何しに来たんだ。」

「驚かせようと思って。」

「それは聞いた。それだけじゃねえだろ。」

それだけなら家でもできる。ここに来たってことは別の用もあるはずだ。

「そうそう、キョウちゃん今日バイトないでしょ?」

「ああ。」

「だから久々にお外でお食事しようと思って。」

「金は大丈夫なのか?」

「大丈夫大丈夫。あまり高いところじゃないから。」

「分かった。じゃあ行くか。」

「あれ？生徒会は？」

「問題ない。どうせまともな活動はしてないから。」

「そうなんだ。じゃあ行こっか。」

ガラッ

鍵 side

「んっ。」

「あっ気がついた？」

「あれ、俺は。」

「凶夜のお母さんに殴られて気絶してたのよ。」

「そっいえばそんな気がする。」

「あれ？二人は？」

「食事に行くために帰ったわ。」

「そうですか。それにしても黒井の母親があんなだったとは意外でした。」

「真冬もです。」

「さすがの私もあれは驚いたわ。」

「あたしもだぜ。」

「そうよね。」

みんな驚きだつたみたいだ。そりやそうだろう。あの黒井の母親が
あんな美少女だとは誰が予想できたか。それより、何で俺は殴られ
たんだ？

鍵side end

- - 帰り道 - -

「キョウちゃんとお外でお食事なんて久しぶりだな。」

「あんまりはしゃぎすぎると転ぶぞ。」

「転ばないもん。キョウちゃんのいじわる。」

そついいながらも転んだことが今まで何回もあるから信用できない。

「にしてもあれがキョウちゃんの入った生徒会か。やめない？」

「やめない。」

「えゝ、変な人いたよ。あれだとキョウちゃんにも悪影響が。」

「大丈夫だ。関わらないようにしてるから。」

「ほんとに？あんな人に関わったらだめだよ。」

「大丈夫大丈夫。」

変態もずいぶん嫌われたようだ。まっ、ハーレムとかほざいてたし当然か。

「それにしてもお食事楽しみだな。」

「そうだな。」

「ほら、行こう。」

そう言つと手をつかんで走り出した。周りから見たら兄妹に見えるんだろうな。ほんと、こんな小さい体で今まで俺を支えてくれてたんだもんな。これからは俺が支えてやらないとな。

「早く早く。」

「はいはい。」

口にはしないがあんただけは何があろうと守ってやるよ。まあ、守る必要もないかもしれないけどな。

???登場（後書き）

凶夜の母親登場。

設定などは次回に公開します。

最後の方は今までの凶夜とは少し違いかもかもしれませんが、凶夜は母親をすごく大切にしているのでああいう感じになります。

それではまた次回。

新キャラ設定（前書き）

新キャラである凶夜の母親についての設定です。

新キャラ設定

名前

黒井 優子

性別

女

性格

能天気

外見

少し幼い顔つき

黒髪で髪の長さは腰ぐらい

身長は杉崎は会長より少し高いと言ったが、実際はだいたい真冬と同じくらい

詳細

凶夜の母親

少し子離れができてない

子供っぽい部分もあるが、凶夜いわく力などは凶夜以上

人懐っこくて大抵の人とはすぐに仲良くなれる

人の名前をちゃん付けで呼ぶことが多い

怒るとすごく怖い

凶夜は見た目や性格、客観的に見た様子から年齢を疑うことがあるが、ちゃんと凶夜を産んだ母親である

好きなこと・もの

凶夜

かわいいもの

料理

嫌いなこと・もの

凶夜に害をなすもの（凶夜の悪口を言う、バカにするなども含む）

元夫

元夫を連想させるもの

生徒会にいる変な人

新キャラ設定（後書き）

凶夜の母親についての設定を載せました

凶夜大好きのお子ちゃまみたいな人です。

出せる機会がたくさんあるといいな〜。

黒井家の晩ご飯（前書き）

黒井家 + α の晩ご飯の様子です。

それではいつも通りの駄文をどうぞ。

黒井家の晩ご飯

- 家 -

「ふう、何とか間に合った。」

バイトが終わって空を見たら曇ってて焦った。天気予報では降るなんて言ってなかったから傘なんか持ってない。後少し遅かったらずぶ濡れだった。

「あつ、降ってきた。」

だが問題はない。すでに俺は玄関にいる。俺は雨に勝ったのだ。：何言ってるんだろ。にしても、

「すごい雨だ。」

一気に豪雨になってしまった。冗談抜きで後少し遅かったらずぶ濡れだった。風邪をひいたら金がかかるからな。それだけは避けないと。おつ、誰かがこの雨の中走ってる。傘がなかったんだな、ご愁傷様。さて、いつまでも玄関にいずにさっさと入るか。ってあれは、

「まずいです。まさか雨が降ってくるとは。真冬としたことが、不覚でした。」

まさかの椎名妹だった。どこかに買い物でも行ってたんだろ、紙袋持ってるし。あいつ、病弱そうだしほっといたら風邪ひくかもな。んっ？病弱はキャラ設定って言ってたっけ？まあいいや。他の奴ら

なら放置だがあいつはゲーム仲間だからな。

「おい、椎名妹。」

「はっ、誰かが真冬を呼んでいるような気がします。」

この雨で聞こえてないのか？ だったら足もとにある石でも。

ブンッ

コツッ

「あいた。」

よし、ヒット

「おい、椎名妹。」

「いたた、あつ先輩。」

「とりあえずこっちに來い。風邪ひくぞ。」

「は、はい。」

とりあえず玄関に入れた。

「ここって先輩の家ですか？」

「他の人に家なわけないだろ。それより家はここから近いのか？」

「徒歩で30分ぐらいですね。」

だいぶあるな。っていうかこいつがそんなに歩けるとは思わなかった。ここらへんはバスが通ってないからな。

「雨がやむまでうちにいろ。」

「えっ、でもご家族の方に迷惑が。それに男の人の家なんて。」

「家族はこの前いた俺の母さんだけだ。問題はない。それが無理なら帰るしかないが貸してやる傘なんかないぞ。」

うちには必要最低限の傘しかないから母さんのと俺の合計2本しかない。それを貸すと明日が雨のときに困るからとてもじゃないが貸す気にはならん。

「でも…。」

「それに、お前が持ってるのゲームだろ。あまり濡れると壊れるぞ。」

「お世話になります。」

変わり身早え。

「とりあえず拭くもの持ってくるからそこで待ってる。」

真冬side

今日はまた新しいゲームが出たので買いに行ったのですが、まさか雨が降るとは思いませんでした。ゲームが濡れないように走ってた

ら先輩に声をかけられました。正直助かりました。そして、助けてくれるとは思いませんでした。迷惑かと思ったのですが、この前生徒会室に来た方以外はいないから問題ないということです。先輩のお父さんはどうしたのでしょうか。何か事情があるかもしれませんから真冬は聞きません。そう言うことは分かる子なのです。

「ほら、タオル。」

「あつありがとうございます。」

なのにもしかしたら顔に出てたのかもしれませんが。たぶん出てなかったと思いますが。

「ちなみにうちに父親はいない。この話題は出さないでおけ。それと、うちに父親がいないこと、うちの家がここだということは他言無用だ。もし破ったら、潰す。」

「わっ分かりました。」

先に言われてしまった。他言無用ですか、潰されるのも怖いですが先輩が困りそうなので絶対に言わないようにしないといけません。
真冬side end

さて、どうするか。雨はしばらくやみそうにないな。

「椎名妹、晩飯は食っていくか?」

「えっ、そこまで迷惑になるわけには。」

「食うのは迷惑じゃないんだが、お前の家の方は?」

「家は連絡すれば大丈夫だと思いますけど、雨のほうは？」

「しばらくはやまないと思う。最悪明日まで。」

「どっ、どうしましょう。」

「明日は学校が休みだから泊って行ってもうちは問題はないが。問題があるとすればお前の方だろ。」

「ええっと。どうしましょう。」

「知るか。」

ピーッピーッピーッ

「風呂わいたけど。どうする？服濡れてるだろ。そのままじゃ髪とか拭いても風邪ひくぞ。」

「ええっと。ええっと。」

ダメだこりゃ。パニックってる。仕方ない。

「行くぞ。」

ズリズリ

「引きずらないでくださーい。」

「黙れ。そのままじゃ動かないだろ。」

ポイツ

「あうつ。」

「とりあえず入れ。着替えとタオルは置いておく。服は俺の母さんのだが、たぶん着れるだろ。入るまでそこから出さん。」

「そんな〜。」

こうでもしないとマジで風邪をひく。

「じゃつ。」

次は晩飯はどうするか。もう少しで母さんが帰ってくるから任せるか。

「ただいま〜。ふう〜、急に雨が降ってきたよ。傘持ってた良かった。」

行ってるそばから帰ってきた。ご都合主義ってやつだな。

「あれ？誰か居るの？彼女？キョウちゃんの彼女？」

帰ってくるなりうるさいやつだ。

「後輩。この前生徒会室にいた一人。」

「えっ、あの変な人？ダメだよ。そんな人と付き合ったら。」

「あんたはどうやったたらあれが女に見える。」

「あつそつか。」

「濡れてたから風呂に入れといた。服は乾かすから母さんの服借りるぞ。」

「うん。いいよ。っでどの子？私の服入るかな？。」

普通の家ならもつと追及とかがある気がするが、うちが軽いのか？

「俺から見て右の方にいた、ひ弱そうな奴。」

「あつ、あの子ね。あの子なら似合いそうなのがあるよ。ちょっと待っててね。」

バタバタ

ん、いくら母さんの見た目が幼くても、高校生の子供がいる母親が高校生に似合う服を持つてるのはどうだろうか。それにしても相変わらず記憶力いいな。一回見ただけなのによく覚えてたな。

バタバタ

「じゃあこの着替えとタオル、置いてくるね。」

椎名妹の着替えはこれで安心だな。あいつが変な服を出す以外。さて俺も着替えるか。

…数分後

「上がりました。」

「ん、出たか。変な服じゃなかったか？」

俺に対してはたまに変な服を出す時があるからな。

「はい、かわいい服でした。」

見てみると結構似合っていた。椎名妹のはかなげな見た目にあっていた。

「似合ってると思うぞ。」

「あっありがとうございます。」

しかし、マジでこんな服持ってる母親ってどうなんだろうか？

「あっ出たんだ。うん、似合ってる。かわいい。」

「あっありがとうございます。」

さっきも同じこと言ってたな。

「ご飯食べていくよね。」

「えっと、でも迷惑に。」

「食べないの？」

ウルウル

「うっ、ごちそうになります。」

「良かった。」

あの顔に落ちたか。

「飯を食つのは決まったようだが、どうする。雨はやみそうにないぞ。泊まるか帰るか。」

「泊ってこよう。それで夜にお話しよう。」

こいつは子供か。

「でも…。」

「ねっ。」

ウルウル

「…はい。」

あつまた落ちた。案外弱いなこいつ。

「なら家に連絡してこい。友達の家泊まるとでも言っとけ。誰の家か聞かれたら優子ちゃんの家って言っとけ。」

「優子ちゃんって?。」

「私の名前だよ。この前言ったの忘れたの？ひどいな、プンプン」

プンプン言っな、怒ってないくせにわざとらしい。

「すっすみません。あつ、私は椎名真冬です。」

「よろしくね、ふゆちゃん。」

「ふゆちゃん？」

「そう、真冬だからふゆちゃん。」

「母さんの呼び方は諦めが肝心だ。」

「そうですか…。」

「といわけで優子は母さんの名前だ。だから嘘ではない。男の家とは言えないだろ。」

「そうですね、分かりました。」

パタパタ

「じゃっ、ご飯作ってくるね。キョウちゃんも今のうちにお風呂に入っといで。」

「分かった。」

真冬side

「うん、雨が降ってて帰りそうにないから今日は友達の家泊っていくね。うん、うん、分かった。それじゃ。」

何とか説得できました。真冬が誰かの家に泊まるなんてなかったから少し驚いてましたが。

「ご飯今作ってるから待っててね。」

「すみません。あれ？先輩は？」

「キョウちゃん？キョウちゃんは今お風呂に入ってる。」

「そっそですか。」

さっきまで真冬が入ってたお風呂に先輩が入ってるなんて、少し恥ずかしいです。

「真冬ちゃんはカレー好き？」

「あっはい。大好きです。」

「良かった。今日は寒いからシチューと悩んだんだけどね。私力レーの方が好きなんだ。」

「そうなんですか。真冬もどちらかとカレーの方が好きです。」

どうしてでしょう。先輩のお母さんのはずなのにまるで同級生の友達みたいです。

「あっ、学校でキョウちゃんってどんな感じ。なかなか学校のこ

と話してくれなくてさ。」

「先輩ですか？先輩は…。」

なんて言えはいいでしょ。

「その感じだと自由にやってるみたいだね。周りに何か言われても口論で負かしちゃうんでしょ。いつもそうなんだ。」

「はい。だいたいそんな感じです。」

話してると友達でもやっぱりお母さんです。先輩のこと分かってるみたいです。

「あの子口は悪いけど嫌わないでね。ほんととはとてもいい子なんだから。」

「はい。先輩が優しいのは分かってるつもりです。」

「良かった。分かってくれてる人いたんだ。あの子を見ると見た目から怖がる人が多いからね。」

真冬も最初は怖かったです。

「あの子の話はこれでいいとして、次はふゆちゃんの話をしましょ。」

真冬side end

「ふ〜。」

「あつ、上がったみたいだね。もう少しでご飯できるからね。」

「分かった。」

「ふゆちゃんももう少しだからね。」

「はい、分かりました。」

うん。なんだか二人が仲良くなってる気がする。俺が風呂に入ってる間に何か話したんだろうな。母さんは人と仲良くなるのがうまいからな。

「はい。できたよ。キョウちゃんお皿出して。」

「分かった。」

「真冬も手伝います。」

「ありがとう。」

こいつら友人か？

「それじゃあいただきます。」

『いただきます。』

「あつ、おいしいです。」

「そうなんだ、良かった。キョウちゃんはそういつのあまり言うてくれないの。」

「あゝうまいうまい。」

「そんな気のない言い方、ひっどい。」

ひっどいって、誰か母さんのほんとの年齢を教えてほしい。絶対俺の知ってる年じゃないだろ。

「先輩、おいしいものはおいしって言わなくちゃ。」

「そうだよ。」

「だから、うまいうまい。」

「も」。それより聞いたよ、キョウちゃんの学校での様子。いつも通りみたいだね。少しは周りの人とも話さないとだめだよ。」

「へー、じゃああの変態とも話さないといけないんだ。」

「変態？誰それ？」

「あの生徒会室にいた男。」

「キョウちゃんはいつも通りでいいわ。あんな人とは話しちゃだめよ。」

「杉崎先輩の扱いって…。」

「気にするな。」

「気にするなって、先輩も同じじゃ…。」

「気にするな。」

「…はい。」

「おかわり。」

「はい。」

「先輩はやっ。」

「そうでもないだろ。」

「ふゆちゃんもいっぱい食べてね。」

「はい。」

「私もおかわりしよつと。」

やっぱり俺が早いんじゃないかって椎名妹が遅いだけじゃ…。

…数分後

「ごちそうさま。」

「真冬ももうお腹いっぱいです。ごちそうなまです。」

「はい。お粗末さまでした。」

「真冬片付け手伝います。」

「ありがとう。」

あくまで俺の予想だが、絶対にこいつは家ではこづいづことしない気がする。

「ふゆちゃんはほんとにいい子ね。うちの子にならない？」

「ええっ！いえ、それは、ちょっと。」

「そう、残念。あっそうそう、今日泊まるのは私の部屋でいいよね。いっぱいお話しようね。」

「じゃ、俺部屋に戻るから。」

「え、キョウちゃんは一緒にお話しないの？」

「しない。」

「ケチ。」

「はいはい。じゃ、おやすみ。」

「おやすみ。」

「おやすみなさい。」

これでやっと落ち着ける。明日は朝からバイトが入ってるし今日はゲームは少しだけにするか。にしても、椎名妹はもしかしたら寝れ

ないかもな。母さんは時間を忘れることがあるから、朝までずっと話しかねない。」愁傷様だ。

…次の日

今日は昨日とはま逆にいい天気だな。それにしても、やはりか。

「それで朝まで話してて寝てないと。」

「はい。」

「でもまあ、普段ゲームで徹夜とかしてるんだろ？」

「それはそうなんですけど。ずっとしゃべってたんで少し疲れました。」

「どんまい。」

俺にはそれ以外に言いようがない。

「あゝ楽しかった。」

こっちは注意しても無駄だろうから。

「たくさん話したおかげでふゆちゃんとも仲良くなれたし。いいこと尽くしだったな。」

疲れはないのだろうか、この超人め。

「もう帰るんだろ？寝てない分は家で寝ればいい。」

「そうですね。新作のゲームをやったんですけど、一回寝てからにします。」

「そうしろ。それじゃあな。」

「ふゆちゃん、またいつでも来てね。またお話とかもしたいし。」

「はい、それではお邪魔しました。」

バタン

「ほんとにいい子だったな。」

「母さんも少しは相手のことを考えろ。朝まではやりすぎだ。」

「はい。」

「一応注意はしといたが、おそらく無駄だろう。」

「キョウちゃんもバイトで出るんでしょ。」

「ああ。」

「頑張つてね。」

「ああ。母さんは少しは寝ろよ。疲れがたまつてるとまずいからな。」

「うん。」

「じゃあ、行つてきます。」

「行つてらっしゃい。」

ボタン

椎名妹に家を知られたり家に上げたのは予想外のことだったが、母さんに新しい友人ができたと思えば今回のことはおそらく良かったんだろうな。さて、今日もバイト頑張らないとな。

黒井家の晩ご飯（後書き）

+ αは真冬でした。

ホントは真儀瑠も出そうと思ったのですが、カオスになりそうな気がしたので不参加でした。

真冬は凶夜のお母さんに気に入られました。

凶夜のお母さんはかわいいものが大好きなので、かわいいと思った真冬もなかなかのお気に入りみたいです。

真儀瑠の出番も作らないといけないな～と思っています。

それではまた次回。

奴が返ってきた（前書き）

今回は特に何もなく平凡な話です。

それでは駄文をどうぞ。

奴が返ってきた

- - 生徒会室 - -

「ふわぁ。」

今日は眠いしバイトの時間まで寝るとするか。

ガラッ

「アカちゃん、正座。」

「はい…。」

「ん？」

生徒会室の中はバ会長をみんなが正座をさせるといふ異様な光景だった。

「椎名妹何があつた。」

「あつ、黒井先輩。実はですね。」

「真冬ちゃん、凶夜には言っちゃダメ。」

「えっでも。」

「いいの。凶夜には関係ないんだから。」

なんたる。関係ないのは事実だろうし特に興味があったわけでもないが、こいつに言われるとすっぱいムカつく。

「別に興味ないしどうでもいい。どうせ、そのバ会長がテストで悪い点でも取ったんだろ。」

「ぐっ、何でそれを…。」

…適当言っただけだったんだが。そういえば今日テストが返ってきた。興味ないから忘れてた。机の上を見ると、バ会長のらしきテストが置いてあった。言っなって言っならちゃんと隠しとけての。点数はっつと、

「うわ…。」

「えっ？あっ、わ…。」

机の上にあったのに気づいてあわてて隠していた。

「見た？」

「別に興味ない。お前がバ力ってことは最初から知っている。」

むしろ点が取れてたのにびっくりだ。

「そ、そういうあんたはどうなのよ。」

「テストに興味がないから見てない。」

「ふん、どうせ全教科0点とかで見せられないんでしょ。」

全教科0点か。見てみたい気もする。一回やってみるか？いや、内申点が落ちてしまう。内申点を無理をしてまで上げる必要はないが、わざわざ下げる必要もないからな。

「おい、会長さんやめとけて。」

「何よ深夏。凶夜を追いこむチャンスなのよ。さあ凶夜、テストを出しなさい。」

コソコソ

「知弦さん。会長は前にリリシアさんが言ったことを忘れてるんでしょうか。」

「おそらくね。たしか100点以外に取ったことがないだったかしら。それが事実なら今回も100点のはずよ。」

「それより、仮に凶夜の点数が悪くても自分の点数もあれなのにどうしてあんなに自信満々でいられるんだ？」

「お姉ちゃん、きっとそれは会長さんだからだよ。」

『納得。』

「ん、どうしたのみんなそんなところで。」

「別に何でもないですよ。」

「そうそう、アカちゃんは気にしないで。」

「そう？それより凶夜、テストを出しなさい。」

うるせえな。あんな点数取ってるくせに偉そうにしてんじゃねえよ。

「めんどい。」

「会長命令よ。」

そして、しつこい。いつも言ってるけどなんだよ会長命令って。

「凶夜、たぶん出すまで聞かないと思うわよ。」

「うち、めんどくせえな。」

だが、いつも一緒にいるこの人が言っただからおそらくそうなんだろう。まったく、どこにしまったっけな。

ガサゴソガサゴソ

「あっ、あつた。」

「…丸いです。」

「…確かに丸いな。こう、グチャグチャにした感じ。」

適当にカバンに入れただけだからな、勝手にグチャグチャになったんだろう。

「もう、点数が悪かったからってグチャグチャにするなんて。それ

で、点数はつと…。」

「どうした会長さん。」

「お姉ちゃん、先輩のテスト。」

「ん？ああ、なるほど。」

「やっぱり１００点みたいね。」

「１００点だったか。」

ほんとに点数なんか見てなかったからな。まあミスってない自信はあったが。

「なっ、何であんたが１００点なのよ。」

「はっ？こんくらいできて当然だろ。授業でやった内容だろうが。」

「先輩。それでも普通１００点はちょっと。」

「そうか？習ってない問題ならまだしも全部習ったことだ。できて当然だろ。」

「えゝん、知弦ゝ。」

「よしよし。凶夜、アカちゃんをいじめちゃダメよ。」

「いや、いじめてねえし。」

自分でケンカ売ってきて、勝手に見て泣いてるし。めんどくさいやつ。

「それにしてもほんとに１００点取るなんてすごいな。」

「はい、真冬もつらやましいです。」

「いいもん、人間テストが全てじゃないんだから。」

「そうねアカちゃん。でもとりあえず…正座。」

「…はい。」

「アカちゃんはもつと今回のことについて反省をしないといけないわ。」

ああ、今日はバ会長の説教だったのか。

「私だつてちゃんと勉強したもん。」

「何をしたんですか？」

「えっ、マーカ―の線は紫もきれいだな〜とか。」

これ真面目に言ったら人としてどうかと思う。

「どうします？知弦さん。」

「これはとことんいじめ、じゃなくて説教をしなくちゃね。」

絶対今いじめるって言おうとしたな。顔が楽しんです。まっ、関係ないいいか。さて、寝るとするか。

真冬side

先輩は寝てしまいました。寝ててもだいたい決まった時間に起きれるのがすごいです。

「それにしても、さっきも言ったがまさかほんとに100点取ってなんてな。鍵は今回どうだったんだ？」

「俺か？俺は少しミスって全教科満点は無理だった。」

「やっぱり前回の全教科満点は奇跡だったんだな。」

「奇跡でも何でもいい。そのおかげでこうしてハーレムを手に入れたんだからな。ハハハハ。」

「だからハーレムじゃなくて…。」

「はいはい、アカちゃんはまだお話の途中よ。」

「もう許して〜。」

「会長さん泣いてますね。」

紅葉先輩は少し楽しんでいるようにも見えますが。

「お姉ちゃんはテストどうだったの？」

「あたしか？あたしはいつも通りってとこだな。」

いつも通りつてことは上位つてのは決まっていますね。運動もできてやっぱりお姉ちゃんはすごいです。

「深夏、保健体育ならいつでも教えてやるぞ。」

「おう、じゃあ頼むぜ。」

「な、何っ！それじゃあさっそく。」

杉崎先輩は喜んでるみたいですが、想像してるのとは絶対に違うと思います。

「じゃあ、ボクシングでもしようぜ。」

「…、悪い急に調子が。」

「んだよ。仕方ね〜な。」

「わ、悪いな。」

お姉ちゃんつてたまにすごい素直です。今は真冬でも嘘つて分かりました。今日もいつも通りの生徒会です。黒井先輩が入ってきたばかりのときはどうなるのかと思ったのですが、あまり変わる事なくやっていけてます。時々問題が起きたりしますけどそれでも大きな問題になることなく過ごすことができてます。でもそれは黒井先輩がゲームをしたり寝てたりして、生徒会に参加してないからだと思います。黒井先輩にももっと生徒会の皆さんとお話とかをしてほしいと思ってるのですが、これを実行してもらうのは難しそうです。先輩はみんなを、特に杉崎先輩をよく思ってないみたいです

し。それに先輩のお母さんも。みんなが仲良くできるのが理想ですが、無理を言っても仕方ありません。せめて生徒会がめちゃくちゃにならないことを祈りましょう。……って、真冬何を考えてるんですよ。

真冬 s i d e e n d

「……ん、もうこんな時間か。」

思ったより時間がたってしまったな。バイトに遅刻するような時間じゃないがのんびりもしてられないな。

「アカちゃん私の言うことを何でも聞くのよ。」

「はい。」

「キー君もよ。」

「はい。」

紅葉先輩は何やら洗脳をしていたようだ。そんなバカ共を従えてうれいのだろうか。この人のことはまだ分からんな。案外ずっと分からないかもな。まあいいや。

ガタッ

「先輩、帰るんですか？」

「ああ、それじゃ。」

「はい、またです。」

ガラッ

…バイト後

- - 家 - -

「ただいま。」

「おゝ帰ったか。」

「紗鳥来てたんだ。」

リビングで自分の家のようにくつろいでいた。

「久々にここで飯を食おうと思ってな。」

「ふゝん。」

「私の料理が食べたくなったの？うれしくな〜。」

「うまいのを頼むぞ。」

「任せて、さっちゃん。」

「だからさっちゃんは…。」

「ん？」

「いや、何でもない。」

紗鳥もたまに抵抗するが結局は負けるんだな。やっぱり母さんは最強か？

「そうそう、凶夜はテストどうだったんだ？」

「もう知ってるんじゃないのか？」

「いや、今回は私の担当じゃないから知らないんだ。」

「えっ、キョウちゃんテスト返ってきたの？どうだった、どうだった？」

「いつも通り全教科満点だった。」

「へへ、すごい。」

「さすがだな。」

「別に、学校のテストぐらいなら普通だろ。」

「お前にとってはそうでも他の奴らにとってはそうじゃないと思うぞ。」

「そういう奴らは勉強してないだけだろ。」

「キョウちゃん、勉強頑張ってるもんね。」

そこまで言われるほどやってるつもりもないんだが。ゲームだってやりまくってるし。

「とにかくだ、その調子で頑張れよ。」

「ああ。」

「さて、優子さん。飯だ。」

「はい。キョウちゃん準備手伝って。」

「分かった。」

ガチャガチャ

「いただきます。」

『いただきます。』

「ほう、今日はハンバーグか。」

「うん。お肉が安く売ってたの。」

「うん、うまいな。さすが優子さんだ。」

「えへへ。」

母さんの料理は趣味にしているだけあってうまいからな。俺が口にしているとなぜだか信用してもらえないが。

「そつだ凶夜。生徒会のことについてだが、思ったより生徒会室には行ってるみたいだな。」

「ああ、バイト先が学校からの方が近いからな。家に戻るより残ってる方が効率がいいんだ。」

「そういうことか。もしかしたら少しは生徒会の奴らと仲良くなっただかと思っただが。」

「それは…。」

それはないと言おうと思っただが。

「ダメだよキョウちゃん。あんな変な人と仲良くしちゃ。」

「変な人って。」

「あの変態のことだよ。この前母さんが生徒会室に来たときにいきなり声をかけてな。」

「なるほど。優子さんもあいつのことはお気に召さないか。」

「当然だよ。あんな人と仲良くするくらいなら生徒会なんかやめさせるんだから。キョウちゃんも分かった？」

「分かってるって。」

「まっ、あいつもあいつでいろいろあるみたいだな。」

「さっちゃん？何か言っただ？」

「いや、何でもない。」

「そう?。」

「ああ。」

「そつか。とりあえずキョウちゃん、仲良くする人は選ばなきゃダメだよ。この前のふゆちゃんみたいな子はOKだよ。」

「ふゆちゃん? 椎名妹のことか?。」

「ああ、この前いろいろあってうちに泊まったんだ。」

「その時に仲良くなったんだよ。一晩中お話ししちゃった。」

「そのいろいろが若干気になるが、まあいい。それで優子さんに気に入られたわけか。」

「ああ、寝むそうだった。」

「文字通り一晩中だったんだな。」

「そうらしい。」

「椎名妹と仲がいいのは知ってるが、ほかの奴らとはどうだ?。」

「特には。必要以上は話してない。それに興味もない。」

「相変わらずか。」

「悪いな、心配掛けて。」

「いや、気にするな。お前のことだ、大丈夫だとは思っている。」

「そうか、すまない。」

「ああ。」

ほんと、いつも心配掛けてるな。紗鳥も口ではこう言ってるが、いつもいろいろ考えてくれてるんだろ。…どうでもいいことも考えてることがあるかもしれんが。

「ん、ごちそうさま。さて、今日はもう帰るかな。」

「え、もう帰っちゃうの。もう少しお話しようよ。」

「私もそうしたいが、仕事も残ってるんでな。また来たときにするよ。」

「そっか、仕事ならしょうがないね。じゃあ、また来てね。」

「ああ、それじゃ。」

「じゃあな。」

「また学校でな。」

「ああ。」

ボタン

仕事があるか。今日は様子を見るために来てくれたんだろうな。料理を作るのが面倒だったつてのもあると思うが。ほんとにいつもすまないな。恩に報いるためにも明日から、また頑張らなくちゃな。
…でもその前に、

「さっちゃん、帰っちゃったか。…じゃあ変わりにキョウちゃん、一晩中お話しよ。」

これからどう逃げるか考えなきゃな。

奴が返ってきた（後書き）

テストをまだやってなかったなのでテストを返しました。

前にリリシアが言ってたように凶夜はいつも100点です。

家でも予習復習は結構やってる案外真面目な子です。

何もしなくてできるわけではありません。

今回はまたエリスちゃんが出てきます。

それではまた次回。

尾行（前書き）

久々の更新です。

更新が遅くなったのとは関係ありませんが、今後の展開を考えたりしてましたが、思いつきませんでした。

やっぱり見切り発車はダメだと思い知らされました。

なので今後も思いつくまでは普通の日常を書いていこうと思います。

久々なのでいつもより駄文かもしれませんがどうぞ。

尾行

- - 生徒会室 - -

「ああ、先輩そっちお願いします。」

「分かった。…おいそっちに行つたぞ。」

「分かつてます。ここで仕留めます。えいつ。やりました、真冬達の勝利です。」

「よくやった。」

今日は生徒会室で椎名妹とゲームをしている。お互い一人でやるゲームをやることが多いが、協力プレイができるものもあるので協力プレイをして遊んでいた。なのに、

「ちよつとそこ！話を聞きなさい。」

とか言つてやがる。うるせえな、俺は気にしないが椎名妹が気にしてしまつてゲームに集中できてない。今日はここまでか。

「椎名妹、続きはまたにしよう。あのバ会長がうるさくて集中できない。」

「分かりました。ではまた今度にしましょう。」

そうしてゲームを切り上げた。っち、久々に有意義に過ごしてたのに。これで話がクソだったらどうしてくれよう。…ああ、別に俺話

聞く気なかった。寝よつかな。

「フッフ、今日は何とっ！」

バ会長がすごいことを言うぞと言わんばかりのポーズをとった時、

ガラッ

「にいさま~~~~。」

『…えっ？』

俺のことをにいさまと言う奴は一人しかいない。

「エリスか。」

「わたくしもいますわ。」

リリシアも一緒だったか。何のようだろうか。この前と一緒にエリスの面倒を見るとかか？

「ちよつと藤堂姉妹、何の用よ！」

「あなたなんか用なんてありませんわ。」

「何ですって！なんかって何よ！」

「凶夜、あなたに用がありますの。」

「何の用だ？」

「にいさま、お買い物に行こう。」

「買い物？何で俺が行く必要がある。」

「エリスと一緒にいきたいと言いまして、わたくしは別にどっちでも…。」

「えゝ、ねえさまだって…。」

「そっそれでどうしますの。行きますの？それとも行きませんか？」

どうするか、椎名妹とのゲームも終わってしまったし暇であることは確かだ。だが、この二人と行くと面倒事になるような気もする。

「買い物するところはどこだ。」

「。。。商店街辺りを適当に見て回りますわ。」

。。商店街辺りか、そこらへんならバイト先にも近いしそのままバイトに直接行けそうだな。

「分かった。」

「わゝい。にいさまといっしょ。」

「ちょっと凶夜、これから私の話があるのよ。」

「どうでもいい。」

もともと寝る気だったしな。

「それでは行きますわよ。」

「分かった。」

ガラッ

真冬side

黒井先輩は買い物に行ってしまいました。そのままいつも通り先輩
がいないまま会長さんが話をすると思ってたのですが、

「お姉ちゃん、どうしましょう。」

「どうするって言われても。」

お姉ちゃんも困ってます。

「アカちゃん、落ち着いて。」

「そうですよ会長。」

「嫌よ、私が言ってるんだから決定事項よ。」

紅葉先輩と杉崎先輩も困ってます。何に困ってるかというと、

「3人を尾行するわよ。私の話より大事ってところを見てやるうじやない。」

と言っています。先輩は会長さんの話より大事とは言っていないと思

うのですが。興味はなかったと思いますが。

「どうするんですか知弦さん。このままだとほんとに尾行することになりますよ。」

「まずいわね。これは止めれそうにないわ。」

「絶対見つかるだろ。」

普通の人を尾行する言うならここまで慌てたりはしません。会長さんの気が済むまでバレないように尾行すればいいのですから。問題なのは先輩を尾行しようと言ってることです。絶対にばれます。紅葉先輩やお姉ちゃんだけが行くならもしかしたらバレないかもしれませんが、会長さんも一緒だと絶対にバレます。そして、尾行されてると分かった先輩が何もしいわけがありません。絶対に何かされます。なので全員慌ててるわけです。

「知弦さん、見つからずに行く方法はありませんか？」

「難しいわね。普通の人ならできるけど、今回は対象が凶夜、追うのがアカちゃん。厳しいわ。」

やっぱり難しいみたいです。

「尾行してバレたとすると何されると思う？」

「さすがにないと思うけど、最悪この生徒会が潰されるわね。」

そうです、この最悪のパターンが怖いのです。ないと信じたのですが、もし先輩が本気で怒ってしまったら可能性は0ではありません

ん。

「何してるの、早くしないと置いて行くわよ。」

ガラッ

「どうするんですか、会長一人で行ってしまいましたよ。一人で言ったら数秒でられますよ。」

「こうなったらバレないように精一杯みんなでサポートするわよ。」

「それしかないか。」

「真冬もがんばります。」

「ハーレムの主の名にかけて何かあっても会長に手出しをさせません。」

「おつ、じゃあ全責任は鍵にあるってことにしようぜ。」

「すみません、それだけは。」

いつも黒井先輩に殴られたりしてますが、全責任を持つということ
は嫌だったみたいです。

「それじゃあ行くわよ。」

『はい!』

まるで死地に行く戦士のような気分です。

真冬side end

- - - 商店街 - -

「わーい、お買い物〜。」

「エリス、走ると転びますわよ。」

「はい。ほら、にいさま行こう。」

「ああ。」

楽しそうだな。だが、買い物なんかいつでも来られるだろうに何でこんなに楽しそうなんだ？女は買い物好きって言うがエリスもそうなのかな。

「ところでリリシア、どうして一緒に行く相手が俺もなんだ？お前ひとりでも大丈夫だろ。」

「エリスはあなたに懐いてますから、一緒の方が良かったんじゃないじゃありませんの？」

「そういふもんか？」

「そういうもんですわ。」

買いものなんか最低限のものとゲームしか買わないからな。いつも一人で行くし。誰かと一緒にいいという気持はしばらくは分かりそうにないな。

「ねえさま、エリスあれが欲しいな。」

「はいはい、あら？これは別の場所にもっと安く売ってましたわよ。」

リリシアって金持ちのはずだけどたまに所帯じみてるよな。

「分かった。じゃあ今度そっちで買う。」

「言うことを聞かない子は好きですわ。代わりにそこでソフトクリームを買ってあげますわ。」

「わーい。」

「凶夜も一緒にいかが？」

「いや、俺は金がないから。」

「あれぐらいならおごってあげますわ。」

一般的には女におごってもらう男はみつともないと言われることがある。それにタダより高いものはないとも言つ。だが俺は、

「なら、ごちそうになるつ。」

タダより安いものはないと思っている。おごってもらえるならおごってもらう方がいいに決まっている。一般的にはダメな奴になるんだろつが、別にどうでもいい。俺が何かを買ってやることはできないが、そのうち別の形で恩を返すでしょう。

「にいさま並ぼう。」

「ああ。」

「エリスはどれを食べますの。」

「うーん、どれにしようかな。バナナもいいし、チョコもイチゴもバナナも、それ以外にも、エリス悩んじゃう。」

「二つ決める。」

「えっどうして?」

「片方俺が食う。それをお前が少し食べばいい。」

「いいの? わーい。」

「凶夜、すみません。」

「別に、買うのはお前だしな。俺が金を出すわけじゃない。」

「それでも、ありがとございますわ。」

「ああ。」

これぐらいならいくらでもやってやる。よっぽどのことがない限り俺に損はないからな。

「エリス、わたくしのも好きなの選んでいいですわよ。わたくしもあげますわ。」

「ほんと！わーい。」

仲のいいしまいだ。それにしても、

「いいな。私もソフトクリーム食べたい。」

「ちょっと静かにしろよ会長さん。見つかるぞ。」

「アカちゃん、後で買ってあげるから静かにね。」

「うー、分かったわよ。」

後ろで付けてる奴らうぜ。どうせバ会長が尾行とか言い出したんだろうが、あれでバレてないとも思ってるんだろうか。特にあのバ会長の声がうるさすぎる。気づいてくれと言ってるようなもんだ。現に、

「ねえ凶夜、後ろの方々は何ですか？」

リリシアも気づいてるし。

「ほっとけ、後で俺がどうにかする。」

俺のことをつけて何もなく追われると思うなよ。

「にいさま、はいこれ。」

ソフトクリームができたようだ。

「ああ、悪いな。」

「はい、ねえさま。」

「ありがとうございますわ。」

結局エリスはバニラ、俺はチョコ、リリシアはイチゴにしたようだ。

「適当なところに座ろつぜ。」

「あそこあいてるよ。」

「エリス偉いですわ。」

さて、食つか。…甘い。

「どうだエリスうまいか。」

「うん、おいしいよ。」

「そうか、ほら、約束通り少しやるよ。」

「わい。あ〜ん。ん、おいし〜。にいさまもほらあ〜ん。」

「別に俺は…。」

「あ〜ん。」

これは食うしかなさそうだな。

「…ん、バニラも甘いな。」

それでもチョコの方が甘い。

「おいしかった？」

「ああ。」

「なんかわたくし蚊帳の外ですわ。」

「悪いな。じゃあお前も食うか？」

「ええ、いや、それは…。」

まあ、そうなるわな。

「冗談だよ、気にするな。」

「えつ、あ、ええ、もちろん分かってましたわ。」

「ねえさま照れてる。」

案外こいつもウブだな。

「くく、あいつあんなデートみたいな、うらやまし。」

「おい、鍵黙れ。」

「ソフトクリーム。」

「後で買ってあげるから。」

「なんかもうグダグダです。」

そろそろあいつらどうにかするか。うざくてたまらん。

真冬side

こうして先輩を尾行してますが、杉崎先輩の言うとおりデートみたいです。ソフトクリームであ〜んなんてカップルのすることです。まあ相手はエリスちゃんですけど。あれ？何か今イラっとしてしまいました。何でしょうこの感じ。

「知弦ソフトクリーム」。

「アカちゃん、もう尾行はいいの？」

「えっ！ううん、でもソフトクリームの捨てがたいし。」

「くそ、あいつエリスちゃんだけならともかくリリシアさんともうらやましぜ。」

「だからみんな落ち着けて、ばれるぞ。」

私のことは置いておくとして、これはもう絶対ばれてると思います。この騒ぎのなかで先輩が気付かないはずがありません。

「あ、もしもし。」

あつ、どこかに電話しています。真冬の直感が告げています。これは間違いなく真冬達へのお仕置きのための電話です。逃げた方がいい

いと思います。

「あ、あの皆さん。」

「深夏、俺達も今からデートをしよう。」

「何言つてんだよ。いやに決まってるだろ。」

「ソフトクリームも大事だけど大人の私は我慢するわ。」

「偉いわアカちゃん。それでこそ大人よ。」

「えへへ。」

ダメです。聞こえてません。皆さんすみません、真冬は一足先に避難させていただきます。逃げるわけじゃありません。戦略的撤退です。

サササッ

とりあえず少し離れた店の陰にきました。ここで何が起きるのか見てみましょう。ここにおいても何かに巻き込まれるならおそらく逃げられないと思いますのであきらめます。

「じゃあ、尾行を続けるわよ。みんな、ばれないように静かにね。」

「あれ？真冬ちゃんは？」

「そうね、どこに行ったのかしら。」

「トイレにでも行ったんじゃないか？あたしがメールしとくから早く行こうぜ。このままじゃ置いてかれる。」

「そうね。」

「それじゃあ…。」

あつ、誰かが近づいてきてます。あれは…。

「あゝ、君たち。少し話をいいだろうか。」

「何よ、今尾行で忙しいのよ。」

「会長、尾行って口に出していいものなんでしょうか。」

誰も話しかけた相手に気づいてません。それにしても紅葉先輩が先輩の行動に気付かなかったなんて珍しいです。たぶん会長さんの世話でそこまで気が回らなかったのでしょうか。だとしてもらしくありません。

「話を聞かないか君たち。」

「何よもう。…えっ。」

「どうしました会長。…えっ。」

そこでみんなが振り返ってやっと気が付きました。

『警察！』

そうです、ずっと警察の方が話しかけてました。おそらく先輩が呼んだのでしょう。」

「えっと、どうして警察の方が俺たちに話しかけてるのでしょうか。」

「さっき通報があつてね、誰かにずっとつけられていると。ストーカが何かを企んでる犯罪者かもしれないし、不気味だから助けくれとね。」

「おいおい、どうするんだよ会長さん。」

「どどどどうするって、どうするのよ。」

「あの、私達は怪しいものじゃありません。」

「物陰から複数で覗き見してる人たちは怪しいというんですよ。」

「確かに……。」

「知弦さん。」

「ごめんさないキー君、これは無理よ。」

さすがの紅葉先輩でも現場を抑えられたら無理なようです。気づくのが後1分早かったら大丈夫だったのでしょうか。……真冬はちゃんと言いましたよ。悪くないですよ。……実は少し罪悪感が。

「とりあえず話は署で聞くよ。ついておいで。」

『はい。』

皆さん連れて行かれてしまいました。学生の悪戯みたいなものなの
ですぐに話は終わると思いますが、真冬はどうでしょう。ここに
いても暇なので皆さんには悪いですけど先に帰らせて、

ブーブーブーブー

メールみたいです。さっき言ってたお姉ちゃんからでしょうか。

「うまく逃げたみたいだな。今回は勘弁してやるが、次やったら…。」

怖いです。真冬だけ逃げたの先輩にはバレてました。文章が途中で
終わってるのが怖さを増幅させてます。

ブルブル

何かされると思ったら震えが。今回のお詫びとしてレアアイテムで
も今度贈呈しましょう。今回は大丈夫と言われても何か怖いです。
やっぱり先輩は敵にしないに限ります。とりあえず今日は帰りまし
ょう。

真冬side end

パタン

これで大丈夫だろう。椎名妹に気づかれたのは意外だったが。

「どうしましたの?」

「いや、害虫どもの退治をしたただけだ。」

「そうですの。」

気づいてたせいか興味なさそうだな。

「おいしかった。ごちそうさま。」

「食い終わったか。次はどこに行く？」

「ん〜と、エリスういんどっしょっぴんぐがしたい。」

こいつはこういう言葉をどこで覚えて来るんだろうか。おそらくだ
がこの年の子が言うことじゃない気がする。

「分かりましたわ。」

「じゃあ、適当に見て回るか。」

「うん。にいさま。」

そう言うと手を掴んできた。

「ねえさまも。」

「ええ、もちろんですわ。」

エリスが間で3人並んで手をつないだ。これって周りから見たら子
連れ？ いや、制服着てるしな。どう見えるんだろうか。

「じゃあ、行こつ、にいさま、ねえさま。」

あつ、呼び方からして兄弟か。…ないな。髪の色とか全然違うし。どうでもいいか。その後は普通にウィンドウショッピングをしてバイトの時間まで3人で楽しんだ。その間生徒会の連中が来ることもなかった。警察に連れて行かれて少しは懲りただろう。その日の夜ネットゲをやると、

「プレゼントです。どうぞ。」

と、椎名妹から前にもらつと物と負けず劣らずのレアアイテムをもらった。律儀な奴だ。

尾行（後書き）

ホントは買物の描写ももう少し書こうと思ったのですが、話が思い浮かばず少し短くなってしまいました。

タイトルもホントは「買い物」の予定でした。

警察に連れて行かれたメンバーは少し話をして無事に解放されました。

それではまた次回。

V S 深夏（前書き）

やっと更新できました。

学校が始まったうえにネタがなくなってしまっ…。

近いうちに多少原作沿いの別作品を出そうと思っています。

ホントは1つの作品を終わってから次に行きたかったんですけど、このままだと1話1話の間がだいぶあいてしまいそうなので。

多少なのは原作崩壊が好きなので。

今回は久々なのでキャラがぶれてたらすみません。

それでは駄文をどうぞ。

V S 深夏

- 川原沿いの道 -

ん、暇だ。今日は休みで学校はないし、バイトも休み、椎名妹から借りたゲームもすべて終わって返したし、ネットゲは今日はメンテナンス中、俺の暇を満たすものが何もない。家にいても勉強以外することがないから散歩しているが、退屈だ。勉強をすればいい気がするが、どうせ夜にもすることになるしな。何か暇をつぶせるものはないものか。

ブッブッブッ

電話か。

「もしもし。」

「ああ、凶夜君か。近藤だ。」

近藤と言えば、町内会の野球チームを持ってる近藤さんか。

「近藤さんですか。どうしました。」

「実は今日試合があるんだが助っ人をお願いしたい。大事な試合何だが、相手が強力な助っ人を入れてきて今のうちじゃ勝てそうにないんだ。」

確か近藤さんのチームは人数は少ないが、実力は低くなかったはずだが。よほど強力な助っ人なのか？

「分かりました。すぐに行きます。」

どうせ暇だったしな。それにこの人にも結構世話になってるし。

「おお、来てくれるか、すまない。助っ人代はしっかり出させてもらうよ。」

「どうも。それで場所はどこですか。」

「ああ、場所は…。」

- - 野球場 - -

町内会の野球チームの試合に使うところとしては立派なところだ。大事な試合って言うってたな。大会か何かか？まあ、行けば分かることか。

「どうも、黒井です。」

「おお、よく来てくれたね。」

「いえ、近藤さんの頼みですから。それに助っ人料もただけなんですすみません。」

「いやいや、こっちからお願いしてるんだから当然だよ。」

近藤さんには小さい頃から世話になってる。いいバイトを紹介してもらったり、金のないうちのために家で栽培している野菜を分けてもらったりもしている。

「それで、今日は大会か何かですか？」

「そうなんだよ。今日は大会の決勝だね。これに勝てればうちのチームに入ってくれる人も増えてくれるかもしれない。」

このチームは実力はあるのだが人数がギリギリで、誰かが出れなくなるたびに俺が助っ人として参加している。強いつても入りづらい理由の一つだとも思うのだが、それは子供の考えなんだろうか。もっと大人の理由とかがあるのだろうか。

「今向こうのチームがノックをしている。チームとしての力はうちと同じくらいだろう。」

それだけなら俺を呼ぶ必要がない。やはり問題は相手の呼んだ助っ人か。

「君も気づいてると思うが、問題なのは相手の助っ人なんだ。ポジションは投手。どうやらレギュラーの投手がギックリ腰になってしまったみたいだね。」

なんだ、勝つための助っ人じゃなくて欠員が出たための助っ人だったか。

「そんなにすごいんですか？」

「ああ、うちのメンバーじゃ打てるかどうか。いや、当たるかどうか。」

当たるかどうかって、相手は化け物かよ。

バシーーン

バシーーン

「うおっしゃー。今日は調子がいいぜ。」

あつ、化け物がいた。

「彼女が相手の助っ人、椎名深夏君だ。」

確かに化けものだったな。っていうかあいつが本気で投げたら捕手も取れないだろうから押さえてるんだろうな。運動能力に関してはチートだろあいつ。

カキーーン

カキーーン

バッティング練習なんだろうが、打つたびにボールがなくなってるよ。もったいない。

「さすがにうちのメンバーじゃ無理だろうと思ってな。君ならやってくれるんじゃないかと。」

「できる限り頑張ります。」

よりによってあいつかよ。あいつ以外なら何とかなっただかもしれないが何しろチートだからな。だが、やる以上負けるわけにはいかない。助っ人料もなくなるしな。これは向こうがくれないと言ってる

わけじゃない。俺自身が負けてしまった試合の助っ人料はいらないと言っている。負けてしまったのに金を貰うってのは気分が悪くなるからな。

「それで、俺のポジションは?。」

「投手をやってもらいたい。彼女を抑えるという意味も含めて。」

それしかないか。あいつが出るたびにホームランか敬遠じゃ嫌だろうしな。

「分かりました。」

「俺が不甲斐無いばかりにすまないな。」

「佐々木さん。」

このチームのエースの佐々木さんだった。実力はある。あるのだがチート相手じゃ分が悪い。

「俺の分まで頼んだぜ。」

「分かりました。」

「おっ、凶夜じゃないか。こんなところでどうした。」

椎名姉が気付いたようで声をかけてきた。

「お前と同じ助っ人だ。」

「ホントか。ポジションは？あたしは投手だ。」

「同じだよ。俺も投手だ。」

「おお、それは偶然だな。同じ助っ人で同じポジション。くー、これは負けられないぜ。」

お前が来なければこの仕事自体なかったんだがな。

「お前とは一回勝負したいと思ってたんだ。本気で来いよ。」

「やる以上当然だ。」

「それじゃあな。楽しみにしてるぜ。」

そう言う自分のベンチに帰って行った。そう言えばよく勝負って言ってたような言ってなかったような。

「知り合いだったのかい？」

「クラスメイトです。」

「それはすごい偶然だな。クラスメイトには負けられないな、お互い頑張ろう。」

「はい。」

そう言えば近藤さんは監督兼4番バッターだったな。ポジションは捕手だ。人柄の良さから周りに好かれてるすごい人だ。さて、試合だ。

「プレイボール！」

試合は向こうが先行だ。そして椎名姉は4番。ちなみに俺は1番だ。1番が1番打順が回ってくるからな。1回表は3者凡退にできた。そして1回裏、俺からだ。

「凶夜、本気で行くぜ。」

ブン

バシャーーン

「ストラーイーク。」

「おし、いい調子だ。」

やっぱり速いな。それに球も重そうだ。うまいこと打たなきゃ飛びそうにないな。

ブン

バシャーーン

「ストラーイーク。」

「追い込んだぜ凶夜。」

「次、早く来い。次は打つ。」

タイミングが少し分かった。緩急つけられるとまだ少し厳しいがこいつの正確なら全力ストレートだろう。

「言ってくれるじゃねえか。そう簡単に打たせるかよっと！」

ブン

ガキーン

「ちっ、打ち損じか。」

「よしっ、この打席はあたしの勝ちだぜ。」

「アウトッ！」

「まだあと2回はある。そこで打てば問題はない。」

アウトになったしベンチに戻るか。

「凶夜君、打てそうかい？」

「後最低2回は回ってきます。その時には打ちます。」

「おっ、心強いね。おいみんな、俺たちも打てないなんて言ったられない。やってやろうぜ。」

『おう！』

さて、次の回は椎名姉からか。あいつと違ってストレートだけだと無理だろう。当たればホームランになりそうで怖いからな。変化球

を使っていくか。

「バッターアウト、チェンジ。」

さて、さっきの借りをここで返さなくては。

「さあ来い凶夜！どんな球だろうと打ってやるぜ。」

「やれるもんならやってみろ。」

ブン

バシーン

「ストラーイイク。」

うん、調子は悪くないな。

「いい球投げるじゃねえか。」

次は変化球でタイミングを狂わす。

ブン

バシーン

「ストラーイイク。」

「おっ、変化球もいけるのか。これは球をよく見ないとな。」

次は1球はずす。

ブン

カキーーーーン

嘘だろ、はずした球だぞ。

「ホーーーームラン」

『わ~~~~~。』

もっと大きくはずさなきゃ打たれるってことかよ。

「うつしゃー。まずは1点。」

やられたぜ、化け物。

「凶夜君、どんまいどんまい。いい球来てるよ。気にせずいこう。」

「はい。」

その後は3人で抑えた。1点取られてしまった。どこかで取り返さないとな。

「近藤さん、あの4番のときは遊び球なしで行きましょう。下手にはずすとそれを狙われます。」

「ああ、そうしよう。」

この1点、絶対俺が取り返してやる。その後お互い誰一人ヒットを打たせることなく回は進んでいった。俺の2打席目は3振、3打席目はピッチャー返しをしたが化け物じみた反射能力でとられてしまった。あれは結構自信があっただが。そして椎名姉の2打席目はセカンドゴロ、3打席目はセンターフライ。あれは入るかと思つてヒヤつとした。そして回は進んで9回裏。この回で点を取らなきゃ俺たちの負けだ。

「ストラーイック、バッターアウト。」

これで1アウトか。後二人。どっちでもいい、何とかして出てほしい。

「おりゃーっ、つてしまった！」

「えっ、ギャーっ！」

「デッドボール。」

おっ、一人出た。でも、すっげー痛そう。ご愁傷様だ。だがこれで俺に回る。…ゲッツーじゃなければ。

「ストラーイック、バッターアウト。」

回ってきた。ご都合主義だが、回ってきた。この打席で打つ。

「あたしのミスで一人出してしまったが、凶夜、お前で終わらす。」
今までの打席でタイミングは大丈夫だ。後はコースと球に力負けしないかどうかだ。

「いつくぜ〜。」

ブン

ガキーン

っち、ダメか。

「ファール。」

「そんなんじゃあたしの球は打てないぜ。」

少し振り遅れたか。球が少し早くなってやがる。なんでこのタイミングで。

「1対0、9回裏、2アウトでラストバッター、ランナー1人、ホームラン打たれたら逆転負け。く〜、燃えるぜ〜。」

あいつ、この状況を熱血変換しやがった。それで力が出たとも言うのかよ。あり得ないだろ。

「次、行くぜ！オリヤーッ！」

ブン

バシーーーーン

「ストラーイイク。」

「つつー、いてて。」

おい、めっちゃ捕手の人手がいたそうだぞ。っていうか、よくここまで手がもったな。絶対手がはれてるだろ。っと、気にしてる場合じゃない。ここで打たなきゃ負けなんだ。助っ人としてはここで打たないと。それにこいつに負けたくない。

「これで、終わりだ！ウリヤーーーーーッ！」

ブン

カキーン

「どうだ！」

「くっ、センター！」

手ごたえ的にギリギリか？…って、センターがフェンスの上に。まさか…。飛んだ…。どっちだ。

「センター！取ったか？」

センターが取れば俺たちの負け、取ってなければ俺たちの勝ち。

「アウトーー！ゲーームセット！」

「おっしやーーーーー！凶夜！あたしの勝ちだ！」

っち、負けたか。

「近藤さん、すみません。負けてしまいました。」

「いや、凶夜君は頑張ったよ。いい勝負だったじゃないか。」

「ありがとうございます。それでは、これで。お疲れ様でした。」

「お疲れ。」

――帰り道――

チームの人に簡単に挨拶して別れた。最後の入ったと思ったんだがな。やはり勝負に負けると悔しいな。

「おい、凶夜。ちょっと待てよ。」

「椎名姉か。」

後ろから椎名姉が追いかけてきた。

「いやー、いい試合だったな。あそこまで燃えたのは久々だぜ。」

「そうか。」

「お前野球あんなに強かったんだな。」

「それでも負けたがな。」

「最後のはセンターのおかげだ。あれがなかったらホームランで負けてた。他のスपोर्टスもできるのか？」

「人並みには。」

「そうか、また勝負しようぜ。」

「機会があればな。俺は助っ人でしかやってないからな。」

だが、いつか勝負して勝たないと気がすまない。負けっぱなしは好きじゃない。

「おう、次の勝負楽しみにしてるぜ。それとあたしのことは深夏って呼んでくれ。もうお前はライバルだ。やっぱりライバル同士は名前で呼び会わねえとな。」

名前ねえ。好き好んで呼びたいとは思わないが、敗者は勝者の言うことを聞かないとな。勝負とはそういうもんだ。

「分かった、それじゃあな深夏。」

「おう、またな。」

さて、今日は思ったより動いて少し疲れたな。帰って寝るか。

VS 深夏（後書き）

今回は深夏との友情が少し深まりました。（たぶん深夏が一方的に）

やっぱり深夏との仲を深めるには勝負が一番かと。

前書きの通り更新が遅くなることが多くなりそうですが、作品を途中でやめることはありません。

絶対に最後まで書こうと思ってます。

それではまた次回。

呼び方の問題、そして…（前書き）

今回は若干シリアス？です。

こんな風にするつもりはなかったんですが。

セリフの中でちょっと無理やりなところもあるかも。

それでは駄文ですがどうぞ。

呼び方の問題、そして…

- - 生徒会室 - -

今生徒会室の時間が止まっていた。俺としてはこのままの静かな方がありがたいがそうはいかないんだろうな。

「ちょ、ちょっとどういうことよ。」

「私も聞きたいわね。」

「真冬にも知る権利があります。」

権利ってなんだよ。お前ただけ位が高いんだ。…いや、一応権利としてはあるのか？

「きくさくま、俺のハーレムに手を出すとはいい度胸じゃねえか。」

とりあえず、

ドカツ

バキッ

ボコッ

雑菌掃除だ。

「話しかけるなっっていつも行ってるよな。あんま調子にのんなよ。いい加減…殺すぞ。」

『!?!!』

…少し殺気を出しすぎだか。完全に周りがビビってる。特にバ会長とか気絶しそうだ。確か以前にもこんなことあったよな。まあとりあえずどうしてこんな風になったかと言うとほんの数分前の出来事のせいだ。

…数分前

「たまには文学に触れましょう。っと言う訳で今日は読書。みんな、今日はちゃんと読書するのよ。」

つとバ会長が言い出した。もちろん俺は無視だ。

ピコピコ

「凶夜、ちゃんと本を読みなさい。」

「黙れ、絵本を読もうとしてるやつが何言ってるんだ。」

「何よ、えほ…」

「黙れって言うてんだ。高校生にもなって絵本が読書だ？ふざけんな。そんなバカの言うことを聞く必要はない。それを本気で読書って言うんなら幼稚園からやりなおせ。」

「…ちっ知弦。」

「よしよし。」

またか。いつもすぐに泣きつくよな。これだからガキだって言ってるんだ。

「おい凶夜、そっちにある漫画取ってくれ。」

「…ん。」

「サンキュ。」

こいつはこいつで熱血漫画かよ。まあ読書を強制されなければ誰が何を読もうがどうでもいい。

「……。」

「…どうした椎名妹。」

さっきから視線がつざい。

「何か黒井先輩とお姉ちゃんが仲良くなってる気がします。」

「気のせいだろ。」

少なくとも俺にその気はない。

「そうでしょうか？気のせいならいいんですが。」

いいんですがって仮に仲良くなってたらどうする気だったんだか。

「…ん？」

机の上にある本の山を見ていたらこの前椎名妹から借りていたゲームのキャラデザとかがいろいろ書いてある資料本があった。

「椎名妹、あれってお前のか？」

とりあえず一番持ち主っぽいやつに聞いてみる。

「え？…あっはい。先輩が気に入ってたみたいなので持ってきてたのですが渡すの忘れてました。」

それが今はかき集められた本の山に埋もれてるわけか。とりあえず興味もあるし読んでみるか。

「おい深夏、そのゲームの資料集をよこせ。」

『え！？』

「ん？ああ、これか。ほら。」

「…ん。」

この前のゲームは面白かったからこの資料本も結構楽しみだ。それにしても周りが妙に静かだな。周りを見てみると俺と深夏を見てかたまっていた。何だこいつら。

…現在

と言う訳だ。静かなのはほんとにいいが、視線がマジっぴい。

「きよ、凶夜が深夏を名前で呼んでる!？」

「ど、どういことですか。」

「いったい何があったのかしら？」

「ん?どうしたんだみんな？」

この熱血バカは今気づいたようだ。

「み、深夏。凶夜が深夏のこと名前で呼んでたけどどういこと。」

「お、お姉ちゃんと先輩がそんな関係に。」

「ああ、そのことか。この前偶然会ってな、その時に名前で呼ぶように頼んだんだよ。」

「ぐっ、偶然会ってその時に!きつとその時に何か心に訴えかけるものがあつたのね。」

「ああ、あれは興奮したぜ。」

あゝ会話にズレが出だしたな。っていうか静かにしろよ、うざったい。

「あの時思ったぜ、あたしにはもうこいつしかいないってな。」

…こいつワザとか。ワザとそう言っいい方してんのか。

「こいつしかいない。…これは決定みたいね。」

「ああ、凶夜とは長い付き合いになりそうだぜ。」

「くゝろゝいゝ、貴様よくも…」

ドゴン

「うぐつ。」

もういいよな。俺何回も警告したよな。

「…おい、さっき言ったよな。あまり調子に乗ると殺すつて。」

「…せつ先輩本気で怒ってます。」

「…今までとは比べ物にならないわね。」

「ちっ知弦どつどうしよう。」

「…これは私には止めれないわ。」

「…これってあたしのせいかな？」

「…違うわね。」

「お前さっきから何様だ？深夏はお前のなんだ？彼女かな？」

「深夏は俺のハ…」

ドカツ

「黙れ。何がハーレムだ。お前が勝手に戯言言ってるだけだよ。いい加減気持ち悪いんだよ。この中で誰か一人でもお前に好きって言ったのか？」

バ会長はこいつのこと好いてる可能性もあるが、あいつの性格上素直に言うことなんかないだろう。

「借りに俺と深夏が付き合ってたとしてもお前にはまったく関係ないよな。それなのにお前はいつもハーレムだのなんだのほざきやがって。お前深夏がほんとに付き合ってるやつが出た時もそういうことすんのかよ。ほんとに最低だな。お前の戯言のせいで最悪破局だな。」

「なっ、それは違う。深夏が本気なら……」

ボカツ

「説得力ねえんだよ。俺にさっき言ってたことを考えると。それに直接言うことがなくてもお前が戯言言ってるせいで深夏のほんとに好きな奴が深夏を好きだった場合、深夏に告白する前に諦めるかもなあ。」

まあ今は深夏に好きな奴なんかないだろうが。

「ほんと、最低だ。みんなが幸せになるためのハーレムとか言ってるやつがそのせいで相手を不幸にさせるんだからなあ。」

「…あ、ああ。」

「ちょ、ちょっと凶夜！それ以上は…」

「黙れガキっ！！ならお前はこいつと、いや違うな。お前らはこいつと付き合うのか。」

「そっそれは…」

『…』

バ会長をはじめ他の奴らもだんまりだった。

「だんまりか。なら口を挟むんじゃねえ。」

俺の言ってることはあくまで仮説の1つだが、今これを撤回させるにはここにいる全員がこの変態と付き合つてるとかしないと無理だ。なにしろ俺の言ってることはこの変態のことが好きじゃないんなら可能性は0ではないからな。

「確かお前は以前に二股で相手を不幸にさせて、それでゲームではいつもみんなが幸せなハーレム目指すようになったんだよなあ。…バカか？みんなが幸せ？あるわけないだろ。んなのゲームだけだ。」

そもそもゲームはゲームだ。現実と一緒にするなんてそっからバカだ。

「ハーレムが仮に出来たらどうなるかなあ。女が他の女に嫉妬したりしてドロドロの関係になっていくだろうなあ。騙し合い、憎みあい。女どもが他の女を気にせずいられるわけないよなあ。最悪殺し

あうかもなあ。」

そこまでいったらほんとに最悪だよな。

「お前はハーレムとか言ってるが、やってることは二股と変わんねえよなあ。むしろそれ以上に相手がいるからもつと最悪だ。いや、すごいねえ。昔に女を不幸にして、そこから学んだことを生かしてもつと多くの女を不幸にする計画を立てるなんてなあ。過去の女も報われねえなあ。」

「あああ、俺は…違う。…そんな…ああ。」

「違う？ いや、違わねえなあ。お前のやってることはみんなが幸せになることじゃない、みんなが不幸になることなんだよ、バカがつ！！」

「違う、そんな、…うわあああああ。」

ガラッ

あつどつかに走って行った。これでようやく静かになった。

「…さて、ゲームするか。」

「ちょっと凶夜！あそこまで言う必要ないじゃない！」

「はあ？じゃあお前は俺の言ったこと否定できるのか？あいつのやつてることは絶対にみんなが幸せになるのか？」

「そ、それは。…絶対に幸せにならないかもしれないけど、絶対に

不幸になるってこともないじゃない。」

「確かにそうかもな。だが、こっちの方が確率的には高い。というか全員が幸せの方の確率が圧倒的に低い。」

「うちではハーレムじゃなくて浮気だったが、実際に不幸になってるんだからな。その時開けっ放しになってるドアから紗鳥が入ってきた。」

「おい。今杉崎がすごい顔しながら走って行ったが何かあったのか？…ってあつたみたいだな。」

「あいつがふざけたことを言いまくってるんでちょっとな。」

「はあ、あいつのハーレム宣言を全面的にぶち壊したか。」

「ああ。」

「そりゃ、ああなるか。」

「せつ先生は杉崎の考えどう思います？」

「バ会長が望みをこめて聞いてみる。自分で答えを出さずに他人から答えをもらおうなんて最低だな。」

「あいつのハーレムはみんなが幸せ宣言か。今まで言ったことはないが私から言わせてもらうとあんなのは子供の戯言だな。現実にはありえん。」

「そ、そんな。先生まで。」

「すまん桜野。だが、これが私の考えた。…さて凶夜、お前はもう帰れ。顔色があまり良くない。」

「…分かった。」

少し昔を思い出してしまった。

「送っていいこう、ついてこい。」

「ああ。…そうだ、最後に言つとくが、俺と深夏は特に何があつたわけじゃない。野球で勝負して俺が深夏に負けた。敗者は勝者の言うことを聞くものだから俺は深夏の名前を呼べという条件をのんだ。深夏が俺を名前で呼べと言つたわけはライバルは名前で呼び合うもんだからだそうだ。それだけだ。」

俺はそう言い荷物を持ち生徒会室を出た。そもそもこれが原因だつたんだよな。物事何がきつかけになるか分からないもんだ。生徒会室には重苦しい空気があつたが別にどうでもいい。とりあえず今日はバイトがなくてよかった。バイトを休むわけにはいかないからな。そんな感じで紗鳥の車で家に帰った。

呼び方の問題、そして…（後書き）

杉崎の信念をたたき折ってしまいました。

いつかはやるかもとは思ってたけど、こんな形ですることになるとは。

前書きでも書きましたが、こんな感じにするはずじゃありませんでした。

深夏のことを名前で呼び、そのことに真冬が嫉妬するといった感じしようと思ってたのにどうしてこうなったのか。

批判などの意見は感想で受け付けます。

この展開に不満の方はそちらで。

それではまた次回。

母との会話（前書き）

ようやく更新できました。

杉崎のことはとりあえず放置で、少し凶夜の過去を。

それではいつも通り駄文ですが、どうぞ。

母との会話

- 車 -

「大丈夫か、凶夜。」

「ああ、ちよつと昔のことを思い出して気分が悪くなっただけだ。」

「そうか、あまり無理するなよ。タダでさえ学校やバイト、勉強とかで体に少し無理をさせてるんだから。」

「大丈夫だ。」

そう、大丈夫だ。今の俺の苦労なんて昔の母さんに比べたら何ともない。それにそこまでギリギリまで自分を追い込んでるつもりもないしな。家でもゲームやったり学校では寝てることもあるし。

「よし、着いたぞ。」

「ああ、悪いな。寄ってくか？」

「いや、今日はいい。それじゃあな。くれぐれも無理はするなよ。」

「分かった。」

紗鳥にはそこまで無理してるように見えるのだろうか？…いや、あいつは若干過保護なところがあるからそのせいだな。

- 家 -

「ただいま。」

「あ、おかえり。ってキョウちゃんどうしたの？」

「どうしたって何だ？」

「顔色悪いよ。それに何か疲れてるみたい。」

…やはり俺が自分のことに気づいてないだけなのか？

「大丈夫だ。ちょっといろいろあってな。気分が悪いだけだ。」

「そう？とりあえず布団に入るところか。ちょっと待っててね。栄養のあるもの作るから。」

「いや、だから大丈夫だって。」

「いいのいいの。」

いや、何がだよ。

「キョウちゃんもたまにはゆっくりしないとね。いい機会だし、もう力ぜつてことにしよう。だから私が看病するの。」

「はあ、分かった。それじゃ、部屋にいるからな。」

「うん。…あつ、今日はゲームしちゃダメだよ。キョウちゃんは病人なんだからね。」

「はいはい。」

別に寝てないといけないほど体調は悪くないのだが、母さんがあそこまで言うってことは少し休まないと体を壊す可能性があるってことだろ。そういうのには敏感だからな。俺は毎日バイトを入れていない。母さんが禁じてるからだ。何も言われなければ掛け持ちをしても毎日バイトをするんだがな。週に一日、次の週には2回は休みを取らないといけないのが我が家のルールだ。つまり2週間に3回休みを取らないといけないわけだ。これは母さんも同じだ。

「ふわあ。」

少し眠いな。どうせ少ししたら母さんが来るだろうしそれまで少し寝るか。

… 3 時間後

「…ん。」

「あつ、起きた？」

母さん？今何時だ。

「あつ、今はキョウちゃんが帰ってきてからだいたい3時間ぐらいかな。」

「そうか。」

つというか口に出してないのによく分かったな。

「キヨウちゃん分かりやすいもん。」

またかよ。

「いや、そう思ってるのはあんただけだ。」

「えー、そうかなあ。」

母さん以外の人に俺が分かりやすいなんて思われたことは一回もない。むしろ逆に分かりにくいと思われてるはずだ。聞いたことはないがな。

「さて、キヨウちゃんも起きたことだしご飯持ってくるね。」

「ってもう飯はできてるのかよ。いったいいつからいたんだ。」

「えつとねえ、2時間ぐらい前かな。」

「はあ。」

やっぱりか。母さんが飯を作るのに3時間もかかるわけがないからな。

「いったい何をやってたんだか。」

「もちろんキヨウちゃん観察。」

いや、そんな当たり前じゃん、みたいな顔するなよ。

「はいはい、それじゃ飯持ってきて。」

「はい。」

…数分後

「持ってきたよ。」

「おう。」

持ってこられたのはお粥だった。本気で俺を病人にしやがった。

「ちよつと待ってね。ふゝ、ふゝ。はい、あゝん。」

「あんたがちよつと待て。自分で食える。」

「ほらほら、早く食べないとこぼれちゃうよ。」

つち、これは一回食わんとひかな。

「…モグ。」

「大丈夫？熱くない？」

「大丈夫だ。というか次からは自分で食う。」

「えゝ。」

「えゝ、じゃない。ほらよこせ。」

「ちえつ。」

あんた一回自分の年齢考えろ。もし俺をほんとに産んでたなら30歳は超えてるはずだ。40歳前後の可能性もある。…全然見えねえ。

「それじゃ、私も食べよつと。」

「おい、いやがらせか。」

「えっ？なんのこと？」

「何のことって。…いや、いい。」

「そう？変なキョウちゃん。」

はあ、こいつ俺にお粥を食べさせといて自分はステーキ食ってやがる。なんてやつだ。

「それで？何があったの？」

食後にいきなり聞かれた。こいつ、最初から聞く気で待機してたな。

「学校でいろいろあってな。」

「うん、それで？そのいろいろって。」

こりゃ言うしかないな。ほんとこー一番では頑固な奴。それとも何があったのかだいたい予想できてるのか。…両方だろうな。

「分かった分かった。言えればいいんだろ。」

「うん。」

いや、そんな笑顔でうんって言われても。とりあえず今日学校でというか生徒会室、もっといえばあの変態のことを話した。

「んで、昔のことをちよつと思い出して気分が悪くなっただけ。以上。」

「…そつか、キョウちゃんまだ昔のこと気にしてたんだね。」

「別に気にしてねえよ。ただ、あいつのことを思い出したり、あの頃の生活を思い出すと少し気分がな。」

「そう、だね。大変だったもんね。」

うちの家はクソ男がいた時から母さんがほとんど稼いでたから職探しに困るとかはなかったが、あのクソ男が家の金をほとんど持って出て行ったり借金を残して行ったりして一気に貧乏になったからな住んでた家は手放さないといけないわ、借金取りに追われるわマジ軽い地獄だった。知り合いのつてで安い家を貸してもらえたのが幸いだった。母さんが幸い周りに好かれるタイプ人だったから色々と親切にしてくれる人が多かったのだ。まあ母さんが傷心中だと思い、母さんを狙って来た人がいないこともなかったが。クソ男がいなくなったことについては母さんは何とも思ってたようだが。むしろ喜んでたような。そんな母さんが何に傷づいたって俺に迷惑をかけたことらしい。まあ小学生にも関わらず俺がバイトをしてたせいもあるんだがな。ちなみにこれも母さんの知り合いの人に頼んで無理言ってやらしてもらったバイトだ。もちろん他の人に比べたら楽だったが、毎日やってたしまだ小学生だったから決して楽とは感じなかった。

「あの頃みたいな無理絶対にしちゃダメだからね。今はあの頃より生活も楽になってるしね。」

「いや、それは分かってるが、無理したのはあんただろ。」

「あ、そっかあ。」

母さんは休みをほとんど取らずに働き続けた。さすがに毎日仕事先が許さなかったから休みはあったが、その数少ない休みの日もパートを入れて休まなかったのだ。その結果体を壊して入院、余計に金がかかったわけだ。しかもその間の収入はなし。俺は知り合いの家に数日預けられたが、もし頼れる人がいなかったらどうなったのやら。それから母さんは休みは絶対にとるようになった。そして俺にも休みをとるように言うようになったわけだ。

「まっ、これからもお互い体は大事にね。私もだけど、キョウちゃんも何かおかしいと思ったたら私に言うんだよ。私も何かあったらキョウちゃんに言うから。」

「分かった。」

そうは言ってもお互いに言わないんだろうなあ。

「はい、じゃあこの話はおしまい。私は食器を片づけてくるね。」

そう言っ母さんは出て行った。さて、もう少し寝るか。その後俺は朝まで眠り続けた。やはり疲れていたのだろうか？そう思っていたが、

「あつ、キヨウちゃんおはよう。よく眠れたみたいだね。食事に入れた睡眠薬も役に立ったみたい。」

この言葉で謎は解決した。ちなみに入れたのはほんの少しだそうだった。息子の飯に睡眠薬なんか入れるなよ。まあそのおかげかは分からんが、よく眠れたから何も言わなかったが。だが、今後は母さんの料理には少し気をつけようと思った。危ないものを入れられたらたまらんからな。

母との会話（後書き）

前書きの通り過去について少し書いてみました。

これ以上詳しく書くかは今後の展開次第なので分かりません。

久しぶりなので少しキャラがぶれてるかも。

もしキャラがぶれてると感じたら、感想のところをお願いします。

今回は杉崎出てくるのかは……分かりません。

それではまた次回。

頑張るくりむ（前書き）

2ヶ月以上更新できませんでしたがようやく更新できました。

今後はもっと早く更新できるように頑張りたいと思います。

今回の話ですが凶夜は出てきません。

くりむを中心に凶夜が杉崎のハーレム宣言を否定した後の話になります。

くりむのキャラが崩れてるかも…。

それでは駄文ですがどうぞ。

頑張るくりむ

- - 川原 - -

くりむ side

「はあ、はあ。よ、ようやく見つけた。」

杉崎と凶夜が出て行ってから少しして今日の生徒会は解散した。私はあまりに杉崎の様子がおかしかったから解散した後にいるんなところを探していた。そして、今ようやく川原で一人死にそうな顔をしている杉崎を見つけた。

「はあ、はあ。こ、こんなところで、な、何やってるのよ。はあ、はあ。」

「…会長ですか。」

やっぱり凶夜の言ったことに動揺してるのかいつもの反応じゃない。いつもなら、

「か、会長どうしたんですか、そんなにはあはあ言つて。ま、まさか俺に興奮して。…分かりました、俺はいつでもOKですよ。さあ、来てください、会長。」

とか、

「そんなに慌ててどうしたんですか？あつ、分かりました。迷子ですね。初めてお使いに行つて迷子になったんですね。任せてください

い。この杉崎、責任もって家まで送らせてもらいますよ。」

とか言いそうなのに。…って私何考えてるのよ。ダメよ、まず落
着かなきゃ。

「はあ、はあ、はあ。」

「大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫じゃないわよ。ちょ、ちよつと待ちなさい。」

一応女の子のことを心配することはできるみたいね。とりあえず私
が落ち着かなきゃ。いろんなところ探し回ったせいで体力が。

…10分後

「ふう、ようやく落ち着いたわ。」

「…そうですか。それは良かったです。」

杉崎はそう言って軽く笑った。

「こんなところで何やってんのよ。みんな心配してたわよ。」

「…すみません。少し一人になりたくて。」

「そう。…それで一人になって何を考えてたの？」

「…そうですね。今まで俺がやってきたことは間違ってたのかなっ
て。」

「やって来た事ってハーレムのこと？」

「はい。誰も不幸にならないようにみんなが幸せになれるハーレムを目指してたんですが…」

「凶夜にああ言われてそれが正しいか分からなくなつたと。」

「…はい。」

…私個人では正しいことじゃないと思うけどそれを今ここで言ったらとどめをさしてしまいそうだね。さすがにここで言うことじゃないわね。

「やっぱり俺には無理なんでしょうか。」

「ハーレムが？」

「はい。会長と最初に会った時にゲームをすすめられてそこでみんなが幸せなハーレムエンドに出会いました。」

「…そうだったわね。」

その頃の私はどうしてそんなのを進めたのかしら。

「それにあこがれて俺も目指すようになったんですけど。…はは、やっぱり無理だったのかな。黒井にああ言われて全然言い返せませんでした。もしかしたら自分でも分かってたのかもしれないね。ただ認めたくなかっただけなのかも。」

「そうね、確かに今の杉崎には無理ね。」

「…やっぱりそうですか。」

「ええ、だってみんなを幸せにするためのハーレムなんですよ。なのに今の杉崎はみんなを幸せにするんじゃないやなくて、いきなりいなくなって心配をかけてる。そんな今の杉崎にはハーレムなんて無理ね。」

「…。」

「でもね、前の杉崎は私たちを幸せにできてたんだよ。」

「えっ。」

「うーん、みんなが本当にそうかはつきりとは言えないけど少なくとも私はそうだった。私がいて、知弦や深夏、真冬ちゃん、そして杉崎がいる。私はそんな生徒会が大好きなのよ。生徒会室にいないだけで私は幸せになれる。凶夜は…まだ分からないわね。」

「はは、ひどいですね。」

「だって凶夜だったらいつもバ会長バ会長って…今はそんなことはいいいわね。とりあえずそんな私の大好きな生徒会はみんながいればこそなのよ。誰一人欠けてはいけない。誰かがいなくなればどこか暗くなってしまうってそこは私の大好きな生徒会じゃなくなる。その中に杉崎もいるんだから間違いなく杉崎は私を幸せにしてくれてた。たぶんみんなも似たようなもんだと思うわ。」

「…俺、みんなの役に立ててましたかね。」

「もちろんよ。確かに私が優秀すぎて自分のしてることに意味があるのかが分からなくなる時はあると思うわ。でも確かに杉崎は役に立ってたわよ。」

「ははは、それは良かったです。」

むっ、何か視線が暖かい気が。

「そつかあ、俺も役に立ててたのか。」

「そうよ。それにあんたの思いは凶夜に少し何か言われたくらいで諦める程度だったの？」

「それは…」

「違うでしょ。私たちがいくら言っても聞かなかったぐらいなんだから。」

「…。」

「何か言われてそれが心配なら見返せばいいのよ。」

「えっ？」

「だから見返せばいいのよ。みんなが幸せになるわけがないって言われたならみんな幸せにしちゃえばいいのよ。それで凶夜に言つてやればいいわ。お前は無理って言ったけど俺はやってみせたぞ、みんな幸せだぞってね。お前の言ってたことは間違いで俺が正しかったって。」

…あれ？私どうして杉崎にハーレムを進めてるのよ。たしかに今みたいな杉崎見たくないけどいつもの杉崎に戻すよりも少し真っ当にした方が今後のための気がするわ。…うん、ハーレムを進めるんじゃないくて一人の女の子をちゃんと幸せにできるようにって言いかなきゃ。

「でもね…」

「…ですよね。」

「えっ？なんか言った？」

「そうですよね！！」

「うわっ。」

杉崎の顔はさっきまでとはすごく変わって明るい顔になっていた。

「そうですよ。あいつが何を知ってるのかは知りませんが俺がハーレムの女の子たちを絶対に不幸にすると決まったわけではないんですよね。」

「いや、深夏のこと好きな人の例ではもうすでに手遅れな気が…」

「ありがとうございます会長。おかげで自信が持てました。」

き、聞いてない。

「よおおし、絶対にみんなを幸せにしてやるぞ。そうだ、今日の雑

務をまだやってない。それじゃあ会長俺は生徒会室に戻りますね。もう少しで暗くなりますから会長もいつまでもここにいちやいけませんよ。それじゃまた明日。」

「あつ、ちよつ…」

…行っちゃった。そして私やっちゃった。せつかくの杉崎を真つ当の人に戻すチャンスを不意にしまったわ。これじゃあ今までと変わらない。いや、もっとひどくなってる可能性もあるわね。

「はあ。」

「あらあら、溜息何かついてどうしたの？」

「えっ!？」

「お疲れ、アカちゃん。」

「ち、知弦!！」

後ろを向くといつの間にか知弦が立っていた。

「い、いつからいたのよ。」

「それはねえ、アカちゃんが色っぽくハアハア言ってたところからよ。ああ、あのアカちゃん可愛かったわあ。」

「色っぽくなんてしてない。しかもそれ最初からじゃない。」

まさか最初からいたなんて。全然気づかなかったわ。

「それで？キー君を立ち直らせることができたのにどうして溜息何かついてるのかしら？」

「それは…」

ずつと近くにいた知弦なら知ってると思うけど、さっき杉崎にハーレムを進めてしまったこと。言い方によっては真っ当な人にできなかったんじゃないのかってことを話した。

「…っと言つ訳なの。私間違つたのかなあ。」

「そうねえ。確かにアカちゃんはハーレムを進めてたわね。もうそれは熱烈に。」

「ぐっ。」

や、やっぱり全部聞かれてたみたいね。

「でもまあいいんじゃない。」

「えっ？」

「キー君自身が考えてハーレムをやめるならともかく、アカちゃんの言ってるのだとまるで洗脳よ。…まあ私は自分の思いどおりに洗脳するのも。…フフッ。」

「いや、知弦怖いから。」

「あらごめんなさい。それにいきなりキー君が真っ当になってごら

んなさい。」

「ダメなの？」

「想像してみたら？キー君が一人の女の子に対して俺はこの子だけを愛し幸せにしてみせるって言ってるところを。」

「うっ、それが正しいはずなのに何かがおかしく思えるわ。」

「そういうこと。いきなり真っ当になられてもこっちが動揺してしまっわ。今のところキー君はあのままでいいのよ。」

今のところは？…そういうえば知弦は杉崎のハーレムについてどう思ってるのだろうか。

「ねえ、知弦。」

「なあにアカちゃん。」

「知弦は杉崎のハーレムについてどう思う？凶夜や真儀瑠先生の言うとおり無理だと思う？」

「そうねえ、現実的には難しいんじゃないかしら。」

「…そっか。」

知弦ですらそう言うんだからほんとに難しいんだろう。

「でもね。」

「えっ？」

「それはあくまで可能性的に低いっただけ。アカちゃんと凶夜も話してたでしょ。全員が幸せになる可能性は低いけどゼロじゃないっで。キー君次第ではその可能性はどんどん上がっていくわ。」

「…。」

「ようはキー君の頑張りというか、キー君と女の子達次第だわ。憎みあつか、みんなで幸せになるのか。」

「そっか。」

「そういうことよ。それじゃあそろそろ帰りましょ。キー君も言ってたけどそろそろ暗くなるわ。」

「うん。…あつ、そういえば。」

「どうしたの？」

いきなり知弦が現れたことに動揺して一番大事なことを聞くのを忘れてた。

「どうして知弦はここにいたの？」

「ふふ、それはね。アカちゃんが明らかに今からキー君を探しに行きますって顔をしてたから心配になってね。」

「わ、私そんなに分かりやすそうな顔してた？」

「ええ。深夏や真冬ちゃんも気づいてたみたいよ。もしキー君を見つけたらすぐに私に連絡するって。それでもし連絡が来たら私がキー君のところまでアカちゃんを誘導しようかと、ね。」

「はあ。」

まさかみんなにばれてたなんて。うう、恥ずかしいよあ。

「ほらほら、アカちゃん元気出して。暗くなる前に帰るわよ。」

「…うん。」

そのあと知弦と一緒に帰ったけどやっぱりどこか恥ずかしかった。
…私って分かりやすいのかなあ。

頑張るくりむ（後書き）

今回はくりむ頑張りました。

子供なくりむが頑張って杉崎を説得しました。

本人は若干ミスったと思ってますが。

そして長い間悩んだ結果杉崎にはハーレムルートに戻ってもらいました。

このままだと話がつながらなかったり杉崎の出番がゼロになる可能性もあったので。

この後はどういう展開にしようかなあ。

色々考えてますがどうなるかはまだ分かりません。

それではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5494r/>

生徒会の悪魔

2011年10月8日21時04分発行